

363  
16



始





36.3.28



22/46



福岡市





363-16



岡

市





福岡市上西町七番地  
**渡邊總本店**  
電話(長)一四八番



工業用鹽素  
酸加里製造  
同 所  
**渡邊電氣工業所**  
電話(長)一四八番  
工場電話一七六九

同 市同町十二番地  
**吳服大物卸商**  
電話(特長)三三七  
三〇七

同 市下土居町三番地  
**紙與合名會社支店**  
電話(特長)三三三  
七九五

同 市下西町四十四番地  
**吳服小賣 紙與吳服店**  
電話(特長)三三三  
七九五

綿糸精綿卸商  
同 市下西町四十四番地  
**紙與合名會社**  
電話(長)五三三

筑紫郡二日市町武藏  
**ラジウム温泉 藥**  
電話一

水瀧湯灑ノ設備アリ  
川御 前  
**湯湯湯**  
電話一



畏れ勅使御差遣の榮を賜ふ

# 國産博多織元



## 松居織工場

本邦 福岡市外春吉町  
 販賣部 福岡市博多東中洲  
 京都支店 京都東洞院御池下  
 大坂支店 大坂市東區本町三丁目  
 第一工場 福岡市外春吉四番丁  
 第二工場 今市外住吉町中津  
 染色工場 今市外蓑島村

博多 麴屋町

# 菅田屋呉服店



電話 (長一三八番  
 二九〇番  
 振替 福岡 四七〇番  
 口座



好評噴々たる天活の大  
 寫真泰西劇  
 舊劇、新派劇  
 にフキレム  
 の清新と卓  
 抜を誇る



東 中 洲  
 壽 座

高等模範活動寫真常設館  
 電話一二八八番

五

御家庭に於ける御一族の御集會御宴席の餘興又は工場の慰安會等に利用せらるゝ娛樂機關は活動の右に出づ  
 るもの無之ミ存候弊座は最も趣味と實益とに富める嶄新優良なる寫真を提供して大方の御招聘に應じ可申候

藥 禮  
 寶 寫  
 森 田 商 塵 藥 舖  
 諸 機 械 油  
 及 副 產 物  
 森 田 商 塵 瀆 油 部

博 多 下 土 居 町  
 長 電 五 四 五  
 振 替 七 七 六

四



日 活 會 社 特 約



高等模範活劇寫真常設館

博多の淺草を以つて呼ばれてゐる中洲のまん中に九州劇場と向ひ合せに聳へて光彩を放つてゐるのが本館である



東 中 洲  
世 界 館

舊新西辯  
劇派劇士  
はははは  
尾立倫西  
上花敦劇  
松貞日説  
助次之  
助郎支人  
一社一  
派最男  
新近森  
新撮輸文  
影影影  
ももも  
ののの  
下

公債

株式

現物

問屋

平山久吉商店

博多東中洲町電車通

瓦斯會社陳列所側

(世界館裏通り)

電話長四九九番



資本金壹千七百廿五萬圓

# 九州水力電氣株式會社

本社	東京市日本橋區小網町三七
營業部	福岡市庄三十五番地
福岡支部	同
大分支部	大分市南新地

## 福岡市

### 目次

◎緒論——西日本と福岡市……………	一
◎歴史的觀察……………	五
1. 博多の回顧と福岡城下……………	五
2. 福岡市の發達……………	一八
(福岡市及接續町村累年戸數人口表)	
3. 市を中心とせる史實……………	二四
菅原道眞の配流——天慶の亂——文永の役——弘安の役——	
五卿の入筑——丁丑の大獄——十年の變——其他の史實	
4. 出身人物……………	三三
緒論、黒田如水——黒田長政——神屋宗湛——嶋井宗室——黒田	



家二十五騎——栗山大膳——伊藤小左衛門と大賀宗伯——貝原益軒——龜井南冥——僧仙厓——宮崎安貞、宮川忍齋——青柳種信、稻富又百——平野國臣——野村望東——加藤司書——幕末の志士——市内贈位者其他

◎福岡市概観

- 1. 地理的説明……………五九  
(市内職業別戸数人口表)  
 一般の説明——氣候
- 2. 市街の色別……………六五  
(市内各町名表)
- 3. 福岡市と其港灣……………七二  
(博多港航路船明細及出入船舶表)
- 4. 博多氣質と福岡氣質……………七八
- 5. 市民の年中行事……………八二

緒言——玉籠——松囃子——博多山笠——流勸頂——放生會——海戰紀念會其他——祭禮及氏神祭

- 6. 名物と名産……………八九  
(福岡市特産物戸数産出高價格表)

博多織——博多人形——博多絞——高取焼——酒醬油農具反物  
 素焼物文具車製其他

◎都市としての機關と設備……………九六

- 1. 過去現在の市政と市民の負擔……………九六  
(市長助役收入役市會正副議長在職年表、市吏員現在數表、累年福岡市歳出入及市民負擔率表、地租、營業稅所得稅縣稅、市稅、間接國稅明細表其他)
- 2. 政治的機關……………一一〇  
諸官衙公廳——縣廳——裁判所——軍事——警察、消防  
 (歷代縣主職者在職年表、市内外巡查派出所明細、市内徵兵成績五ヶ年對照表)



3. 教育的設備……………一三二

緒論—A. 學校教育(市内各種學校明細表)

B. 社會教育—圖書館—教育的團體及講演會—公會堂—博物館、水族館及動物園

C. 武術及各種の運動競技

4. 衛生的設備……………一三〇

緒言—大學病院—齒科學校病院—市立荒津病院—開業醫、藥劑師、看護婦、產婆—上水道—一般衛生狀態と衛生組合、市街掃除

(市内傳染病五ヶ年間對照表其他)

5. 交通運輸機關……………一四六

緒言—郵便、電信、電話—道路—鐵道—電鐵—軌道—港灣と海路—博多灣大築港計畫—馬車、自働車、自轉車、人力車(郵便物取扱高各種別表、電信、電話各種別通話數其他表、各地里程表、鐵道乘降客貨物表、市街鐵乘客貨銀表、軌道

6. 新聞及雜誌……………一六六

緒言—福岡日々新聞—九州日報—博多毎日新聞—大正時報—雜誌、獨尊其他—新聞社の支局

7. 宗教と慈善救濟事業……………一七〇

緒言—神社と神道—佛教—基督教及救世軍—感化院—孤兒院—盲啞學校—無料診療事業—水難救護—免因保護—行旅病人の救濟

8. 電氣と瓦斯……………一七四

9. 社交團體……………一七八

◎産業狀態と其機關……………一八〇

1. 商業會議所商品陳列場及工業試驗所……………一八〇

博多商業會議所—縣立物産陳列場—福岡市商品陳列館—博多織工業試驗場



2.	實業諸團體及產業組合……………	一八四
	(重要物産同業組合、公認組合、準則組合、任意組合、各聯合會及產業組合明細)	
3.	金融及倉庫……………	一九一
	銀行—金融狀態—郵便爲替貯金—質屋—無盡講—金錢貸付業—倉庫	
	(過去五ヶ年間銀行利子歩合表、市内各銀行預金及貸出高表、組合銀行手形取扱及交換高表、郵便爲替、貯金、振替貯金取扱高表、質屋取扱高表、在庫品表其他)	
4.	取引所と市場……………	二〇〇
	博多株式取引所—魚市場	
	(博多株式取引所年間出来高表、三魚市場取扱高表其他)	
5.	會社事業……………	二〇四
	(市内各會社明細表)	
6.	工場と生産状態……………	二二〇

7.	市中商業と貨物の集散……………	二三三
	(市内重要工場明細表、同工産品數量價格表)	
	(福岡市移出入貨物明細表)	
8.	水産業、農業及礦業……………	二四〇
	トロール漁業—鯨肉—近海漁業概況—製鹽業—農業—礦業	
	(トロール漁業鯨肉陸上高表、近海各漁業組合戸數船數漁獲高表、附近郡部農産額表、福岡縣各炭礦産出高明細表其他)	

◎ 娛樂と其機關

1.	遊覽地としての福岡市……………	二五四
	緒言—博多停車場—櫛田神社—網敷神社—宮崎八幡宮—箱崎汐井濱及び水族館—住吉神社—名島公園、辨財天、帆柱石—米一丸の墓—東公園百花園—龜山上皇銅像—日蓮上人銅像—濡衣塚—釜掛松—承天寺—聖福寺—崇福寺—醫科大學と工科大學—萬行寺—東長寺—	





國産

アサヒ

於大正博覽會  
名譽大賞牌受領

風味品質第一位ナル事ヲ公認シ  
證明セラレタリ

目次終

5. 博多美人と柳町……………二九四

4. 旅館料理屋待合茶屋……………二八八  
(重なる旅館料理屋待合明細)

3. 劇場寄席其他の娛樂……………二八三  
劇場と寄席—遊藝師匠—能樂及狂言—生花茶道及盆栽  
圍碁、將棋及球突—其他の娛樂機關

2. 博多仁和加と筑前琵琶……………二八〇

1. 福岡城—西公園、平野二郎の銅像—鶴來島—光雲神社  
—小田部の藤—宗湛の茶室と名島城門—益軒翁の墓  
—鳥飼八幡宮—水鏡天滿宮—警固神社—愛宕神社—  
菊池神社—平尾山莊—太宰府天滿宮—天拜山と湯町温  
泉—太宰府の舊蹟—今宿温泉—今津の元寇防壘と誓願  
寺—芥屋の大門—西戸崎—香椎宮—宇美八幡宮—志賀  
神社—御膳立岩—若杉山



公債株式現物賣買

並ニ一般信託業

資本金額三十萬圓

拂込金額七萬五千圓



堤信託株式會社

博多片土居町川口通り

電話 長六八八番  
七五三番







(一 其) 街 市 岡 福



(二 其) 街 市 岡 福



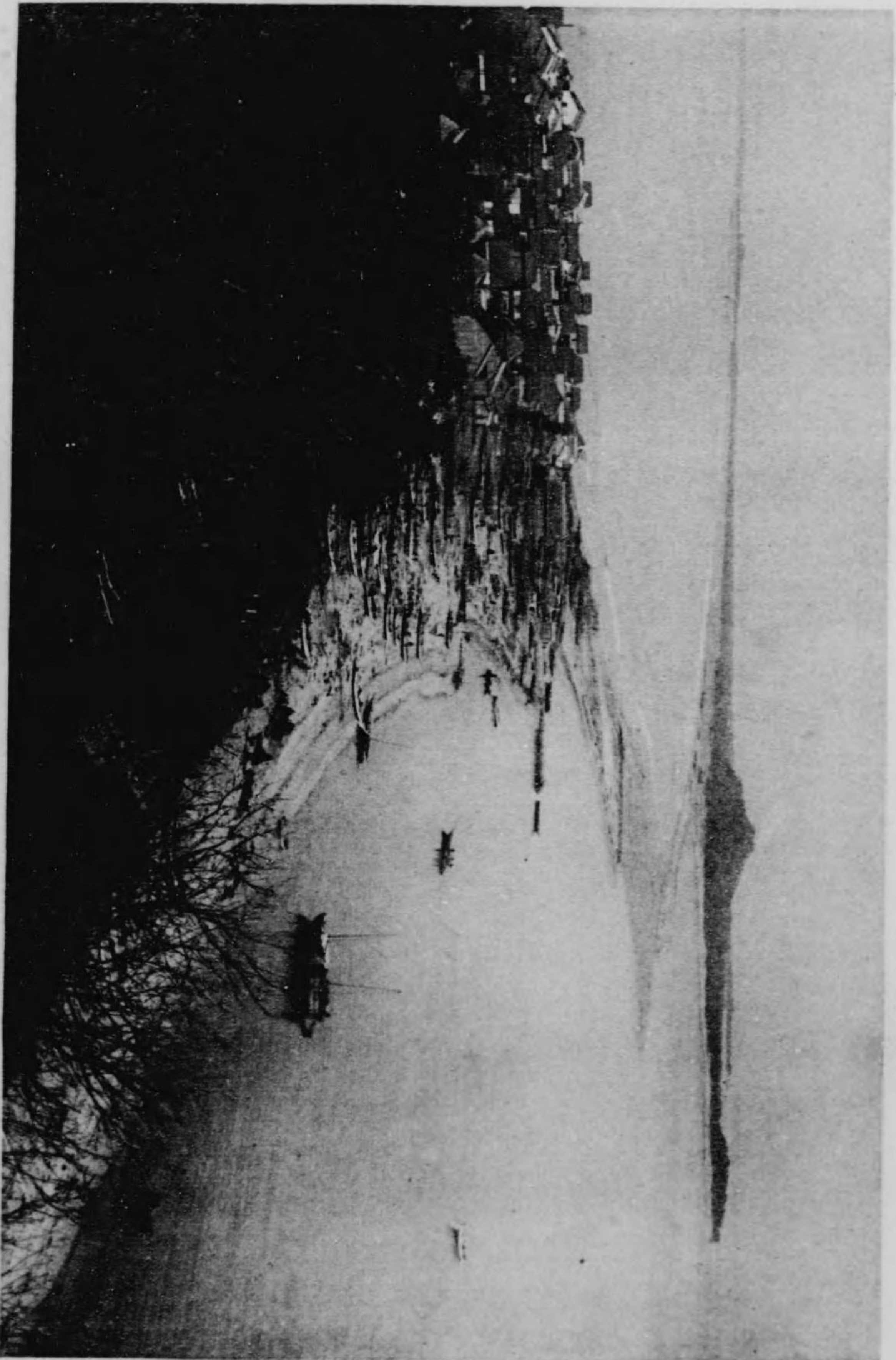
堤信託株式會社

博多片土居町川口通り

電話 長六八八番  
七五三番



道 中 の 海



大 船 水 景 影 ( 攝 影 天 市 九 州 道 徑 社 )



# 福岡市

## 緒論

博多織と博多人形と博多節とで名の高い筑前の國の福岡は九州の北部、鳥も通はぬ  
と唄はれた玄界灘に面した入海の大博多灣に裳を浸して居るのである。其昔は海  
原遠き筑紫瀧と迄呼ばれて知らぬ異國の山々はつひ眼の前にでもある様に云ひ傳  
へられた片僻の地には相違ないが、現在では文明の代の有難さ、花の都の東京から最  
大急行列車で僅かに三十時間、大阪からは十六時間、我日本の西の果て長崎からは六  
時間、南國の暖流が緩やかに岸を廻る薩摩隼人の本場たる鹿兒島からでも、十一時間  
の短時間で其身其儘達せられるのである。扱九州の玄關口たる門司驛を發した汽  
車は鐵を鑄るに云ふ魔術を振ふ大製鐵所を初め、各種工場の煙筒が隙間もなく林立  
し、煤煙濛々として、空を蔽ふ戸畑八幡の地を過ぎて遠賀川の大鐵橋も打涉り、神功皇  
後の遺跡香椎の宮で名高い香椎驛を過ぎる頃から沿道一帶白砂青松、蜿蜒として連



なる中に九州一の大驛に止まるのである。之れ即ち我福岡市なのだ。黄塵低く迷ふ福岡の市街は遠來の客を迎ふる支度は何時何時でも充分に出来て居つて儲んご欲する人に向つては、お望次第の商工業者が算盤片手に控へて居り、散ぜんご欲する人の爲には呼ぶに美妓あり酔うに美酒佳肴がある、お國自慢で誠に濟まないが、福岡はほんごにヨカ所である。若し夫れ一天空晴れて名物の松原が露に濡れる朝、東西南の三方を望むならば、立花、寶滿、天拜の靈峯は千古變らざる緑の姿、泰然として美しく、又磯邊の白砂を踏んで立つならば、遠く玄界、沖の島々は青螺點々、近く志賀、能古の二島は煙波漂渺の間に駱駝の如く臥むつて見える。言ひ代ゆれば、福岡は背には所謂萬頃の田に黄金の波を漂はし腹には博多灣の清濁併せ呑む玄界の澎湃たる波濤を受けて松は青く砂は白い真只中に圍まれて薨を並べ近世文明都市としての機關一つとして備はらざるはなく、殷賑を四方に誇るのである。

福岡市は福岡縣の首都である。従つて此福岡市を説かんならば、先づ福岡を育てた巨人福岡縣を略説せねばならぬ。福岡縣は筑前筑後豊前の三國に跨る。總面積二百三十九方里の一大雄縣であつて縣内の區劃は首都福岡を初めとして門司久留

米小倉若松の五市と筑紫糸島早良粕屋宗像遠賀朝倉鞍手嘉穂田川築上京都企救浮羽三井三池三瀬山門の十九郡近く大牟田八幡直方の三町が市の資格を得たならば驚くなかれ八市十九郡なる譯だ。位置は西部日本の咽喉を扼して、北の一方は近く滿韓と相對峙し西南二方は大分熊本佐賀の三縣に接し東の一方關門海峡を隔て本土に連なつて居る。地勢は山野殆んご相半し、十五萬六千町歩の田畑十六萬三千町歩の山林の間には百九十六萬の生靈を息させ此農林產品の年額四千八百六十萬圓工產品額七千八百六十五萬圓海岸線百七十里の間に獲られる水産物の價が二百二十萬圓の外筑豊の炭田として其名天下に聞えたる縣内各所の礦産物年額五千萬圓福岡縣の富力は確かに全國各府縣に冠絶して居るのである。而して我福岡市は實に此偉大なる福岡縣を代表すべき一大縮圖であつて一縣政治の中心地として、商工業地として漁業地として教育の府として遊覽地として將た亦藝術の地として各種各種百花綫爛何人に向つても開放的都會である。

然らば此福岡市を中心とせる地方一帯の山河は古來如何程我日本文明史上に花を添へたこゝがあつたか、亦將來如何なる使命の下に進まなければならぬのか言を



代へて云へば、過去現在未來に涉つて西部日本と福岡なるものとの間に干係を認むべきものは何か、之れ蓋し序ながら是非吾々が論じて見たい所である。波濤岸を拍つ處は文明の起る所である。古代史に現はれたる最初の日本は凡て之れ海の日本である。而して海の日本の傳説的地名は筑紫と云ひ、豊國と云ひ、日向と云ひ、壹岐と云ひ、對馬と云ひ、大體に於て我九州に初まつて居る。人若し一葉の輕舟を放つて一時間に一百哩を走るに云ふ南洋奔流の暖潮に乗じて其行く所に任せたらば、自然の勢必ず九州の西部を廻つて玄界に出て日本海に達するか、然らざれば九州の東部に出て、自然に豊後の海から瀬戸内海に達するであらう。即ち古代日本に於ける文明の發源地は此兩沿岸豐沃の土地の外に出でぬのである。

深見商店

本店部

鍋釜類各種及  
セト引かなげこめ  
農具牛馬耕用  
鋤先及犁各種  
銅像及紀念碑  
神佛用器各種

支店部

諸金物卸商  
バケツ製造  
度器製造  
鑄物類製造

營業課目



博多深見鑄工場ノ一部





營業要目

煖房裝置  
各種放熱器製造  
病院用蒸汽裝置  
各種消毒器

輸入及製造  
設計及工事請負

株式會社 齋藤製作所福岡工場  
福岡市外住吉町人參畑  
電話特長福岡四番

○資本金 壹百五十萬圓

○諸積立金 貳千九百四拾四萬參百八拾貳圓餘(大正四年末現在)

○保險契約高 壹億四千八百六十九萬九千七圓(大正五年八月末現在)

○開業以來支拂保險金 壹千參百九拾貳萬四千八百六圓(大正四年末現在)

明治貳拾七年七月創立



西本美壽保險株式會社

本社 大阪市東區今橋四丁目七番地  
九州支店 福岡市橋口町八十六番地

支店 東京、京都、名古屋、福岡、金澤、仙臺

電話(二三番・二一四番)  
本局(二五番・二〇三六番)  
電話 五 番

大正二年末を以て執行せる第三回大決算に於ては利益金の内壹百貳拾萬圓を保險契約者に配當せり  
尙大正七年末に行ふべき第四回大決算に於ては保險契約者に對し積立金を除きたる總利益金の百分の五十以上を配當すべく此種の配當資金は已に昨年末を以て金壹百六十四萬六千六百五十圓餘に達したり



創立 明治二十七年四月  
社長 高倉藤平



# 有隣生命保險株式會社

本店 東京市日本橋區南茅場町  
支部 福岡市博多上小山町三〇

電話長 六三四番  
振替口座 五二四番

資本金 五百萬圓

# 千代田火災保險株式會社

福岡支店

福岡市天神町貳番地ノ壹  
電話 一三三五番



# 千代田生命保險株式會社福岡支部

福岡市天神町貳番地ノ一  
電話 八〇九番  
振替貯金 福岡九四〇番



資本金壹百萬圓

本社 東京市日本橋區本町一丁目十一番地



東洋生命保險株式會社

九州出張所

福岡市下吳服町一番地  
長（電話）七六八番

支店及出張所

京城、大阪、仙臺、  
廣島、名古屋、金澤、  
京都、臺灣

取締役社長 尾高次郎  
專務取締役 佐々木清麿  
常務取締役 福島宜三

◎本社 東京市麴町區內幸町二丁目三番地 五號  
四番地

電話新橋  
特長 五六三番  
重役用 五六四番  
宿直用 二、六〇四番  
二、六〇五番

振替口座東京二〇、七五〇番

◎生命保險界の一新機軸



東海生命保險相互會社

◎最も進歩せる相互組織

專務取締役 長 松方五郎 取締役 宇都宮金之丞

取締役 諸戸清六 監査役 小川源次郎

同 阿部市三郎 同 春田祐清

同 伯爵川村鐵太郎 同 大島要三

●本社ハ

明治十四年七月開業セリ

●本社ノ

資本金ハ五拾萬圓ナリ

●本社ハ

諸積立金壹千九百貳拾參萬五千九百五拾貳圓餘

ヲ有ス

●本社ノ

總契約高ハ壹億壹千七拾萬參千五百圓ヲ數フ



明治生命保險株式會社

本社 東京市麴町區八重洲町一丁目一番地

福岡支店 福岡市中島町七十七番地

電話 一三五番

●本社ハ

開業以來壹千參百九拾六萬八千八百圓ノ保險金

ヲ支拂ヘリ



日清生命保險株式會社



東京市  
丸の内

社長  
中野武營

當會社の利益配當附保險の特色

○利益金の十分の八を契約人に配當す  
○被保險人の旅行職業の種類又は戦死等に  
對して不利益なる條件を附することなし

一支店及出張所 參拾壹ヶ所  
代理店 壹千八拾九ヶ所(大正五年五月末日調査)

福岡支店

福岡市中土居町十三番地

電話番號 三八番  
振替口座福岡三五〇番



帝國生命保險株式會社

一 創立 明治二十一年三月  
一 資本 壹百萬圓  
一 諸積立金 壹千八百六拾七萬參千五拾七圓八拾錢九厘  
一 契約約金高 壹億〇貳百九拾七萬五千七百五拾圓  
一 契約約件數 拾六萬七千八百參拾七件  
一 創立以來拂渡金 壹千四百四拾參萬七千壹百五圓六拾五錢七厘  
一 同上人員 參萬八千九人

日本徵兵保險株式會社

本社 東京市日本橋區元大工町十番地

社長 門野幾之進

出張所 福岡市天神町二番地



本社 東京市麴町區有樂町三丁目



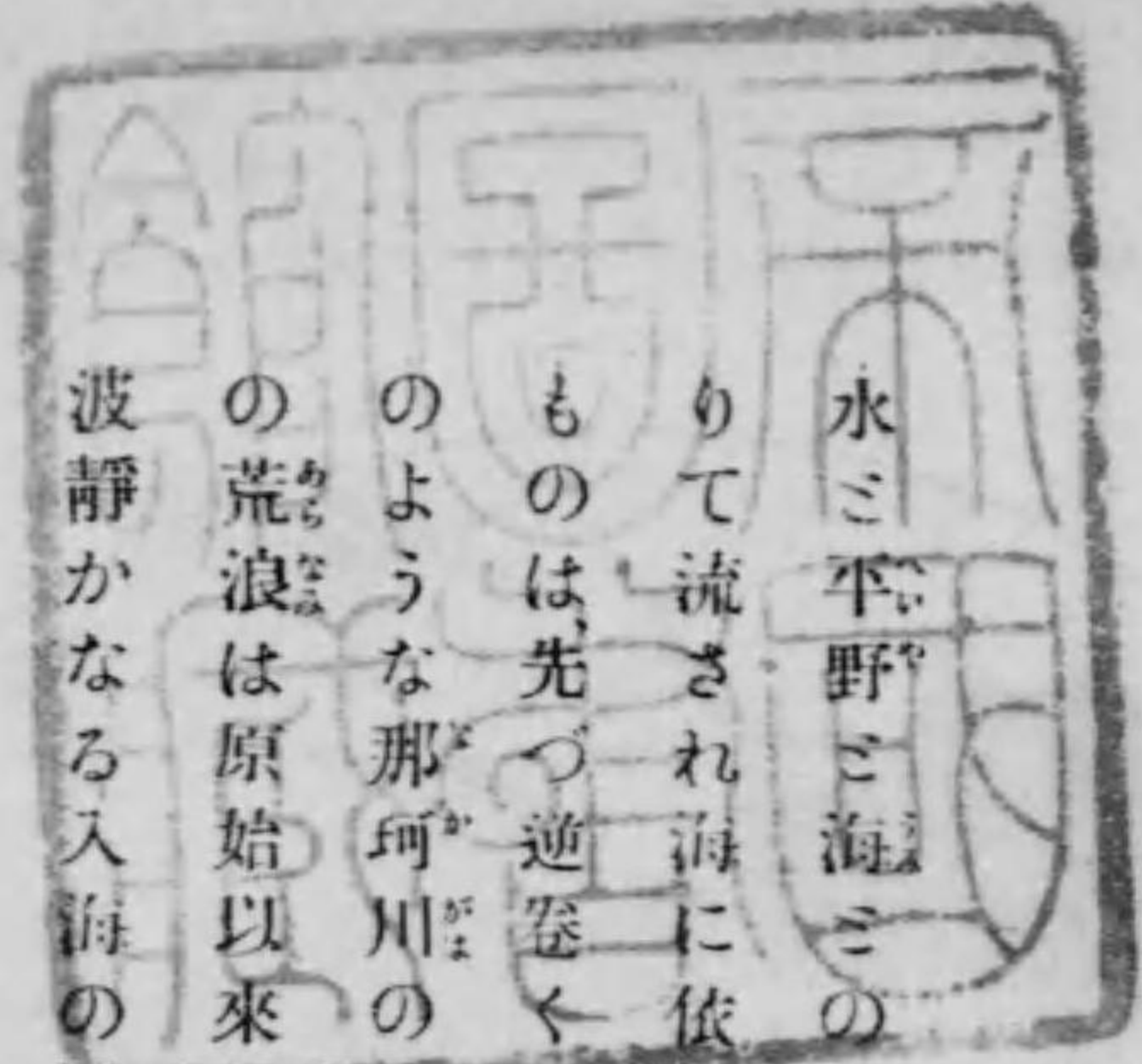
# 愛國生命保險株式會社九州支部

福岡市上新川端町  
電話 九 八 八 番

新築場 福岡市天神町

## 歴史的觀察

### 博多の回顧と福岡城下



水と平野と海との在る處、其處には必ず文明の芽が生えた。所詮文明の華は水に依りて流され海に依りて培はれたる平野の煙に榮えたのである。博多の榮華を説くものは先づ逆巻く玄界灘の浪の音にも、砂白い多々良瀆邊の松の戦ぎにも、乃至銀河のような那珂川の畔り流るゝ水の呷きにも耳を傾けねばなるまい。輕踏たる玄海の荒浪は原始以來無始無終たゆむ暇無く、北九州の岸壁を叩いて、其處に入江豊かな波靜かなる入海の博多灣が出来た、滾々たる泉のような那珂川、石堂川の盡せぬ流れの土と砂とは、三菱洲となり平坦地となり、永劫の時の力と相待つて、其處に繁華な博多の市街の礎が作られた、されば博多の今日の榮華を見るものは、逆巻浪の玄界な楚々たる流れの那珂石堂の兩川を忘却するこゝは出来まい。

水と海との結合融和によりて築き上げられた博多の町も、地勢の位置其の宜ろしき



を得なかつたらば博多今日の榮華は果して保ち得たであらうか、頗る疑問云はねばならぬ古詩に、



那珂川沿岸



石堂川沿岸

石城樓上倚欄干、萬里秋空一望吞、龍卷黑雲歸洞府、日行黃道墮金盆、  
 三邊翠浪開天塹、西岸青山夾海門、廣不可量深莫測、灼然方外有乾坤、  
 波紺青の色深く、滿帆に風を孕んだ、歎乃寛やかな、出船入船の數多く、帆檣林立の有様  
 は、實に其の昔博多港の有様であつた。福岡博多は地理上九州の中心點では無い、然  
 し理學上重心點は云へるであらう、九州は北に延びて南に狭い、其の不等邊三角形  
 の重心は、僻目に見ても博多の附近を去る事遠くは無いと云うて宜い、博多は海陸の  
 地形上、既に昔から西日本の要衝であつて、海外往來の人は内外人の別なく、凡て博多  
 の港から船に乗り又陸に上つた時代もあつた。地形上の要衝を得ない地點は、文明  
 の進歩に連れ添ふ事は出来ぬ、此の意味に於て博多は極めて好運兒であつた、海を控  
 へ川を控へ、地勢の宜しきを得た博多は、西日本の主都として、鎮西の政治的中心地と  
 して榮え來た所以である。然らば博多の港は何時から開かれ何時の年代から發  
 したものであらうか、此の點に關する正確な事實は、頭を回らせき口碑にも傳はらず記  
 録にも残つて居ない、史蹟を探つて見ても、遂ひぞ分り得ないのは、恐らく博多の發  
 生が餘りに年代の遠きに過た爲めではあるまいか、今記録の示す處に基りて、辿り得る



年代までを辿つて行けば博多云ふ地名が始めて國史の上に現はれたのは、孝謙天皇の天平寶字三年、續史紀云ふ古本に、『博多大津、對馬壹岐は要害の處』云ふ文句がある、是れ博多の地名が國史に現た最初であらうこの事だ。然しながら開港場としての博多の存在は恐らくは其れよりもつゞき遠い以前でなくてはならぬ、何せなれば神功皇后が三韓の征途に上らせ給うた時には、『儼河口』(那珂川)、『楳日浦』(香椎)の間から、御舟を進めさせ給うた云ふ事實が日本書記にある、果して然らば博多云ふ地名は、冠せられないまでも、津湊は既に其の時代から開かれて居たものゝ推定し得られるのである、即ち應神帝の御代には帝國の國威八荒に輝いて、三韓も年毎に朝貢を怠らなかつた、時の政府は博多に官家(行政官廳)を置いて、三韓の折衝を始め、内治外交の事を司らしたもので、宣化天皇の御代に及んで、官家は更らに規模を權限を擴張して、諸政の機關は益々整うた、當時博多の名稱は、單に『那津』、『儼津』、『儼大津』、なごゝ稱へ、或は『筑紫大津』、『荒津』も呼んだのを、敏達帝の御宇始めて西海一の開港場と定まり、次いで孝謙帝の天平寶字中に至つて、茲に始めて博多大津の稱が起つたのである、然らば此の頃の博多はさうの様なものであつたか、魏志の

倭人傳には『儼國の二萬餘戶』なごゝ大袈婆な文句を記せるのを見ても、當時福岡



博 多 灣

市附近が如何に賑やかな都會であつたかを、知るこゝが出来、亦博多の港は此時代薩摩の坊の津、伊勢の安濃津と共に、日本三津の名さへあつて、内外の船舶輻輳しない時はなく、唐土三韓との交通も盛んであつて、彼我の國使、商客の往來するもの頗る多く、政府は『鴻臚館』の北館を博多に置いて、應酬接待に備へるに共に、一面には外夷の來寇を慮つて、陸には『警固所』海には艦船を浮かべ、防人を置いて、邊海の防備を嚴重にしたのも、此の時分からのことである、當時の博多は云はゞ日本の大立關であつた、國使商客の往來は一步進んだ物珍らしい、彼の地の文物に接するの幸がある代はりに、聽て起るものは外虜



の難である、後宇多帝の建治元年時の政府は九州の諸族に命じて、博多沿岸西は今津より、東は宮崎多々良に至るまで、蜿蜒長蛇の如き數里の石壘を築いて、一朝外難の日に備へたのであつた、博多を以て「石城」と呼ぶ、其の由來は蓋し夫れからのこゝである、弘安五年始めに奉行所が開け、永仁元年には九州探題が設けられた、北條の末年頃迄は博多の榮華は尙ほ衰へず、探題の治績と共に袖の湊の繁華に差したる異狀もなかつたが、世は南北朝時代となり、次で足利氏起るに及んでは、打續く内亂の爲め、海外との通商も次第々々に衰へる一方、爾來幾十年袖の港は漸次泥土に埋もれて、大船多くは遙かの沖に繋がつて居た、而して後奈良天皇の天文年間には外船の來往愈々跡を斷つて、博多港は漸く衰運に赴いた、應仁年間博多は一時大友氏の勢圍に入り、白杵安房守は今の出來町附近に居砦を構へて、瓦町から辻堂町に至る間に城濠を穿ち、又博多と住吉との間を流れて那珂川に注いで居た比惠川の流域變更の工役を起した、今の石堂川が即ちそれだ。

奥津風荒津の濱のなみまくら

ならばぬ物のねんかたもなし

衣笠

草枕旅行君を荒津まで

無名

おくりてくれさあきたらすこそ

荒津の海我ぬさまつりいはひてん

無名

はや歸りませ面かはりせて

足利氏の時代戰國の世に於ては、博多は幾度か兵燹に遭うた、家は焼かれ財物は奪はれて、町民の路頭に泣いたこゝは幾度であつたらうか、天正十五年豊公島津征伐の爲め西下した頃には、市中の商賈は八方に逃がれて、人も煙も絶え何物をも残さなかつた、云ふ、應神帝以來千有餘年の間榮えに榮えた鎮西の舊都も、斯うして一時全く其跡を絶つたのである。

豊公島津を懲らして六月凱旋の途に博多に來つた時、此の憐れな殘骸の博多を悲んで、自から地形を按じ設計を施こし、石田三成、小西行長、長束正家、瀧川三郎兵衛等の諸將及び下奉行三十人を督して、博多復興の一大工事を起した、現在の福岡市の内今の博多部は即ち夫れであつて、絶大の偉人豊太閤は即ち我が博多再興の恩人であるのだ、此の時の博多新市街の設計は、十町四方を定め、非常の場合の爲め民戸の奥行を深



くし、或は井水の供給を便利にする等、當時としては殆んど模範的であつた、秀吉が連

歌を催ほした時の句に、

博多町幾千代までやつものらん、

此の前句は黒田孝高の叔父休夢が附けた、  
立ならべたる門のにぎはひ、

再興後の博多は公領であつたのを、當時筑前の主であつた小早川秀秋替地を以て私領に移した、黒田長政筑前入國の時、亦た先例に倣つて博多を私領とし、爾來約三百年間博多は往時の様に對外的に自由な開放的な行動を味はふこみなき代りに、安靜に且つ平和に、其の治下に繁榮を續けたのであつた。

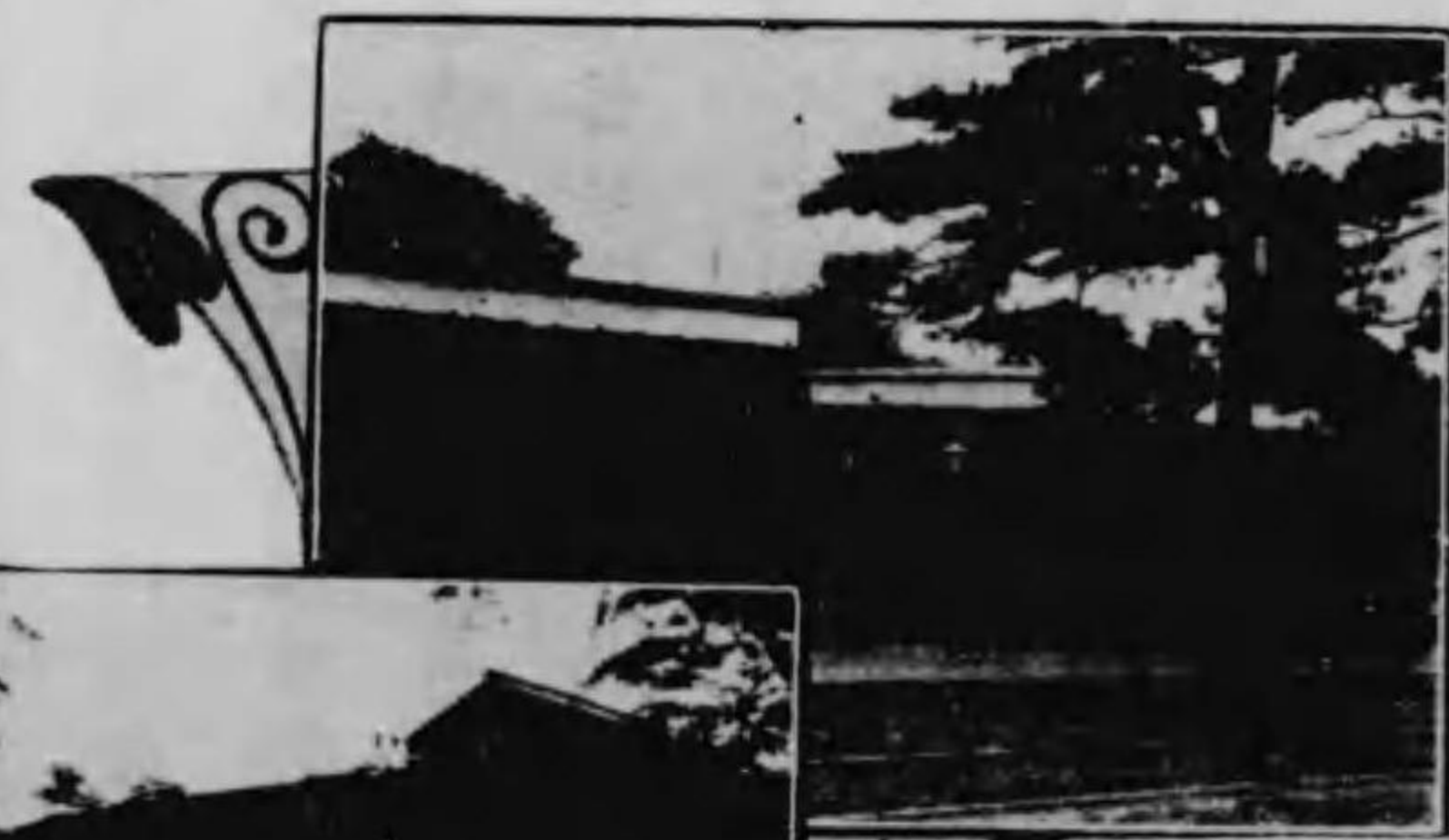
天正より慶長に至る戰國時代、博多が兵燹に罹つて、榮華の夢を破られた頃には、福岡は未だ名も福岡と稱する貧しき一漁村であ



福岡市背面の景

つた、荒津山の汀草香江の畔には、蘆荻の水に戦く所、點々たる漁家の燈火明滅する幽

邃の里であつた、後陽成天皇の慶長年間、徳川氏覇業成り、六十餘州の政權を握るに及んで、黒田長政の功を論じて、中津十二萬石の城主から筑前五十二萬石の國主に移した、長政は慶長五年十一月入國して、名島城(小早川氏の城廓)に居をトしたが、名島は位置山河の險には據るも、丘陵起伏して都邑を開らき得ないので、又如水と相諮り、博多の西方、福岡の地を選んで、新たに城廓を營んだ、慶長六年始めて工を起してから、七個年にして成つた、鎮西に名高い福岡の舞鶴城は、即ち此の城砦を云ふので、其當時城の西方には草香江と云ふ入海があつた、工を施こして湟としたのが大壕である、萬葉集に曰く、『草香江の入江にあさるあし田鶴のあなたつ



(一) 福岡城



(二) 同



くし友なしにして、當時此の邊一帶の土地の平和な幽寂な氣分を味はひ得らる

橋島中の昔



橋島中の今

が明治八年取毀つて福岡縣廳新築の用材とし、明治二十一年那珂川埠頭延長工事の

るではないか、城の外廓は東は那珂川に限り、東西には長湍を穿ち、西は早良川を以て、自然の外廓に、唐人町東の湍を内廓とした、那珂川の砂洲には、中島を築いて、商家の町(今の中島町)とし、東西に長橋二個を架設して博多と連絡させ、同時に城下の地區を劃して武士町人の住宅に充て、長政の曾祖父高政が備前の福岡より起つた因縁に因んで、名を『福岡』と命じた、王政維新に入つて、黒田公藩政を奉還した後も、尚ほ福岡の東廓中島町詰には、櫛形門と云ふ廓門があつた、其左右の川縁には石壘があつて、全く博多と區域を別にしてゐた

際にも此の石壘を用材に取つて、今では全く其の面影を存せぬやうになつた、福岡が開かれてから今日に至るまで三百十餘年を超えた、昔は蘆荻風に戦いた貧しい一漁村の小さな福岡も今では博多と共に大福岡市となつて、人口十五萬、西日本に誇るべき一大商都となつたのである。

めづらしや是や博多の唐の人

名にもこまばもあらぬ事かな

舟出せし博多はいづこつしまには

しらぬ新羅の山ぞ見えける

慈

鎮

封建時代の博多福岡の有様は、貝原益軒の筑前續風土記(元祿年間編纂)に依つて、其の一斑を窺ふこまが出来る、即ち之に依れば福岡は町數二十三町、町家數一千五百二十五軒、人口(武士を除く)一萬五千〇九人(男八千餘人、女六千餘人)、酒家九十八軒、麴家三十八軒、博多は通路の數九流れ、此の町數百十三町、家數三千百十八軒、人口一萬九千四百六十八人(男一萬千餘人、女八千三百餘人)、酒家九十五軒、麴家十八軒を算して居た、而して此の以外に黒田藩の藩士總數(家族共)約一萬五千人内外が福岡方面に居住して居



つたこゝは無論であつて、寛永六年黒田家の制度に依れば、士分——中老以下千五百二

十人、陸士以下——兵卒——二千六百二十五人、合計四千百四十五人となる。此等藩士の階級は、中老(二千石以上二十軒)、大組(六百石以上約百軒)、馬廻り(百石以上約六百軒)と、以下所謂切拵持となつては、無足組、城代組、陸士、側筒、足輕、御小人、其他の雑務等に區別せられてあつた。其整然たる盛況思ふべしである。

享和二年出版『筑紫紀行』の一節  
俊頼朝臣の歌に

から人のしがの小島に舟出して  
博多の沖に時うつるなり

こあり猶此外にも歌多し、さて此處の町數豎横合せて百八十町ありと云へり、通り筋の町



福岡城武具櫓

屋は大形瓦ぶきにて藏造りなる。其外の町町は草葺多し。此處の名品として皮細工及帶地を商ふ家おほし、さて是より黒田侯の御城下福岡までは十丁あまりの間町續きなるを行く。この町の出口に川あり、橋をわたれば中島町と云ふ。此町のはづれにまた川あるを猶橋をわたれば城下の町屋あり。大形博多の町に同じけれ。家中町は町中、廣く家造りも博多よりはまさりて町筋華好なり、さて御城の景色よし。

酒は飲めく、飲むならば日の本一の此鎗をのみ取る程に飲むならば  
之れぞ誠の黒田武士

影なれてやぎる月かな人しれず  
夜なく、さわぐ袖のみなごに

うなばらや博多の澳にかかりたる  
もろこし舟にさきつぐるなり

から人の志賀の小島に舟出して  
博多の澳にさきつぐるなり



## 福岡市の發達

徳川幕府の晩年幾多勤王志士の赤い血潮に培はれた新政治の若芽は、王政復古の偉業となりて發達した。明治大帝大統を嗣がせ給ふて世は明治に改まり、封建制度は廢せられて郡縣の政治となり、福岡藩は新に設けられ藩主は藩知事となり、福岡、博多を始め舊藩内の藩政を司つた。藩政廳今の縣廳なるものが舊福岡城内に設けられたのは其の當時の事である。黒船の來襲に一度門戸を開ひてから、日本の文物制度は泰西の著しき刺激を受けて、急速の發達を遂げ、明治の初年藩は更らに廢せられて縣となり、福岡に博多を打つて一丸となし、行政の區劃上更らに分つて三大區に分ち、今の福岡部を第一大區に、博多を第二、第三大區として行政を布いた。明治二十二年地方自治制始めて布かれ、茲に福岡市自治の基礎が出来た。

維新後の福岡市は、依然政治的には福岡縣の首都として、經濟的には地方一帯の物資の供給地として繁榮した外に、博多港が日本海、瀬戸内海、九州北半部の沿海航路、小廻りは船等の寄港地であつた爲め、主として海を中心として、海を中心としても繁昌して居たが、明治二

十二年八月よりは更らに特別輸出港として、重に朝鮮との貿易交通の途が開かれ、次で門司市の勃興、九州鐵道線の開通は、地方的關係に多少の變動を生じて、對外的干係に於ては數歩を門司市に譲つた代りに、福岡市は更らに附近に起つた、所謂筑豊の炭山を新得意として、陸運に依つて一層其物資供給の範圍を擴め、同時に白砂青松風光明媚の地として天下に傳へられ、遊覽地として外客の足を曳くに至つた。超えて明治三十七年には京都帝國大學の分科として、醫科大學は市の東端水清氣澄の地に設立され、引續き四十四年には更に工科大學加設され、九州帝國大學として獨立し、今や六百の學生を收容し、今日に於ては西海に於ける學問の府としても亦た其權威を天下に示して居る。

然しながら福岡市が關西の大都市として、乃至九州の中心都市として、經濟的に認めらるゝに至つたこと、即ち新福岡市の勃興は、實に明治四十三年開催の九州沖繩八縣聯合共進會以後にあること云はねばならぬ、即ち此の共進會は少なくとも、我福岡市發達史の上に一時代を畫するものであること云ふことを得るのであつて、此の時からして我福岡市は内外共に都市としての體裁品位に一大革新が行はれたのである。詳し



く云へば今の九州電燈鐵道會社の福博電車が市を横斷して敷設され、同じく九州水力電氣會社の博軌電車及び北筑軌道が一は町を二周し一は西方十二哩の沿岸を縫うて開設された結果、期せずして市區改正が斷行され、大道路新橋梁の開通架設に加へて、市對接近町村との距離は著しく縮少されて、事實上の福岡市は之れが爲めに極めて大なる且つ急速な膨脹をなしたのである。又丁度其頃から各種の企業熱は、我が福岡市民の奮起を促して、諸會社、新事業の勃興を來たしたのみならず、外界からは九州全部を活動の舞臺とする、保險會社、銀行、貯金會社、各種の支店、又は代理店等の設立せらるゝもの日々夜々に増加する一方で、斯くして經濟的見地からして、事實上九州の中心都市と呼ばれるに至つたのである。而して此の間に於て市は從來の筑紫郡警固村全部、及び筑紫郡豐手村字豐富の一部を併せて、此の面積約十分の一方里の市區擴張を實行したのである。

以上は福岡市自體の説明であるが、此の福岡市が從來地方的商業の都會として、順調の發達をなしたに付ては、其の周圍の勢力を度外視することは出来ない。福岡市の背面に我國無限の寶庫たる、筑豐炭山のあることは既に云はずもがなの事であるが、此

の外市の三面を包圍する郡村は、凡て之れ豊穰な農産地であつて、農事の整理改良の行届いて居ることに付ては、福岡縣は蓋し全國に聞えて居る土地柄である。又前面立界の浪岸を洗ふ所には、今津、宮ノ浦、玄界島、志賀島、姪濱、殘島、伊崎、箱崎の大小漁場があつて、海底無盡藏の水産物を二六時中、我が福岡市の前に提供するのである。福岡市の繁榮依つて來る所ありと云はねばならぬ。

往昔の岡は港灣貿易で榮へて居つた、近世の福岡は遊覽地として、地方的商業地として客を引いた、然も今代の福岡市繁榮の基礎をなすものは如斯ものではない、近年交通機關の完備、時勢の流れは、福岡市として全く西日本の大都市として、將た亦純然たる商工業地としての繁華である、貨客の往來集散愈々頻繁で、市街の體裁益々整ひ年を追うて膨脹發展を重ねて、其大なる餘力は次第々々に近郡に溢ふれつつあるのである。

左に福岡市及接續町村の戶數人口を上げて、近年市の膨脹の狀勢を示して置く、

### 福岡市戶數人口

(福岡市プロパー)



年 別	人 口		戸 数
	男	女	
明治二十二年	二四、四八四	二三、七七七	四八、二六一
同三十一年	三三、二二六	三一、五四六	六四、七七二
同四十一年	四〇、八〇七	三六、七〇八	七七、五一五
大正元年	四八、〇二三	四五、四九四	九三、五一七
同四年	五九、〇一三	五五、一八三	一一四、一九六

同接續町村戸数人口 (大正四年末)

町 名	戸 数	人 口
西新町	七一九	五、二六七
住吉町	二、八六五	一三、九六六
千代町	一、六〇五	七、三八三
堅粕町	二、三〇八	一〇、九八五
箱崎町	一、一〇〇	六、〇五三
計	八、五九七	四三、六五四

現在福岡市	總戸数	二三、二六四	總人口	一五七、八五〇
-------	-----	--------	-----	---------

同接續町村戸数人口累進表

年 別	西新町		住吉町		千代町		堅粕町		箱崎町	
	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口
明治四十年	五〇〇	三、三〇四	一、四四一	七、二四七	一、一六二	五、七〇一	一、二二一	六、二七九	九三六	五、〇二六
大正元年	六六六	三、八〇九	二、四三六	一、一九二八	一、四二三	六、四四六	一、八四二	八、五三九	一、〇九一	五、九七〇
同四年	七一九	五、二六七	二、八六五	一三、九六六	一、六〇五	七、三八三	二、三〇八	一〇、九八五	一、一〇〇	六、〇五三

**博多の渡邊家** 渡邊家は博多に於ける一大族である。殊に先々代與一氏、先代與八郎氏の傑物であつた事は誰一人として之を否むものは無いのである。渡邊與八郎死んで博多人無しとさへ云はれた。現今總本店を福岡市上西町七番地に置き與八郎氏時代からの支配人北崎久之丞氏が萬事を取仕切つて居る。現在渡邊家の事業として重なるものを擧ぐれば、▲渡邊電気工業所(工業用鹽酸加里製造) ▲紙與合名會社(吳服太物商) ▲同上支店紙與吳服店(吳服の小賣を遣つてゐるのであるが大阪より西では尤も多額の賣上があると云はれてゐる) ▲紙與糸店(綿糸精綿卸商) ▲武藏温泉(此の温泉が古の太宰府の近くに在つて有名であるのは本文に述ぶる處の様であるがその薬師湯御前湯川湯は亦渡邊家の事業である。)



## 市を中心とする史實

應神帝の時始めて官家を置かれて以來一千七百年、福岡地方は西海の政治的中心地であり、且つ又三韓支那に對する日本の要津であつた云ふ關係から古來市附近は、國家的史實頗る多く、杖を曳て近郊を廻れば、白砂青松或は古色蒼然たる間古蹟の當年を語るもの尠くはない、茲には其重なる史實の二三を叙する。

△菅原道實の配流 醍醐天皇延喜の御代は藤原氏全盛の時代であつた、武士は藤原姓を冒さねば立身の途無く、庶民は藤家の恩顧を願はねば、出世の機會が無かつた、菅原道實は野見宿禰の裔に生れて、幼より穎悟の性を有し、長じて文章博士となつた、宇多天皇に仕へて誠忠を致し、敢て藤原氏あるを知らなかつた、醍醐天皇御位に即かせらるゝに及んでは、御親任特に厚く、累進して權大納言右近衛大將、又た右大臣となりて、一國政治の實權を司り、只管慈愛の心を以て國を治めた、藤原一門の重鎮に、藤原の時平云ふがあつた、道實の榮達を妬み、藤原菅根と相謀り、之れを退けて權勢を擅にせんとの野望を起し、道實に野心ありと密奏して、延喜元年三月之れを太宰權帥に

貶し、且つ其の叛心ある事を責めた、道實は意外の冤罪に、驚き且つ憂悶して、宇多上皇に歌を奉りて勅裁を仰いだ、歌に曰く

流れ行く我身もくづこなりぬこも

君しがらみこなりてごめめよ

宇多上皇の御驚き一方ならず、急ぎ救はん宮中に至らせ給ふたが、時平、菅根等四門を閉ぢて會はせ奉つらず、遂に入る事を得ずして還らせ給ふた、斯くて道實の家族子女二十三人も、亦夫々別所に配流せられたのである、道實は今の博多の一部に上陸して、太宰府の配所に赴いてから、終日門を閉ぢ、只管文墨に托して、僅かに愁思を遣るのみであつた、翌秋一夜、悽然として、懷舊の情を洩らした有名な詩がある、

去年今夜侍清涼、秋思詩篇獨斷腸、恩賜御衣今在此、捧持毎日拜餘香

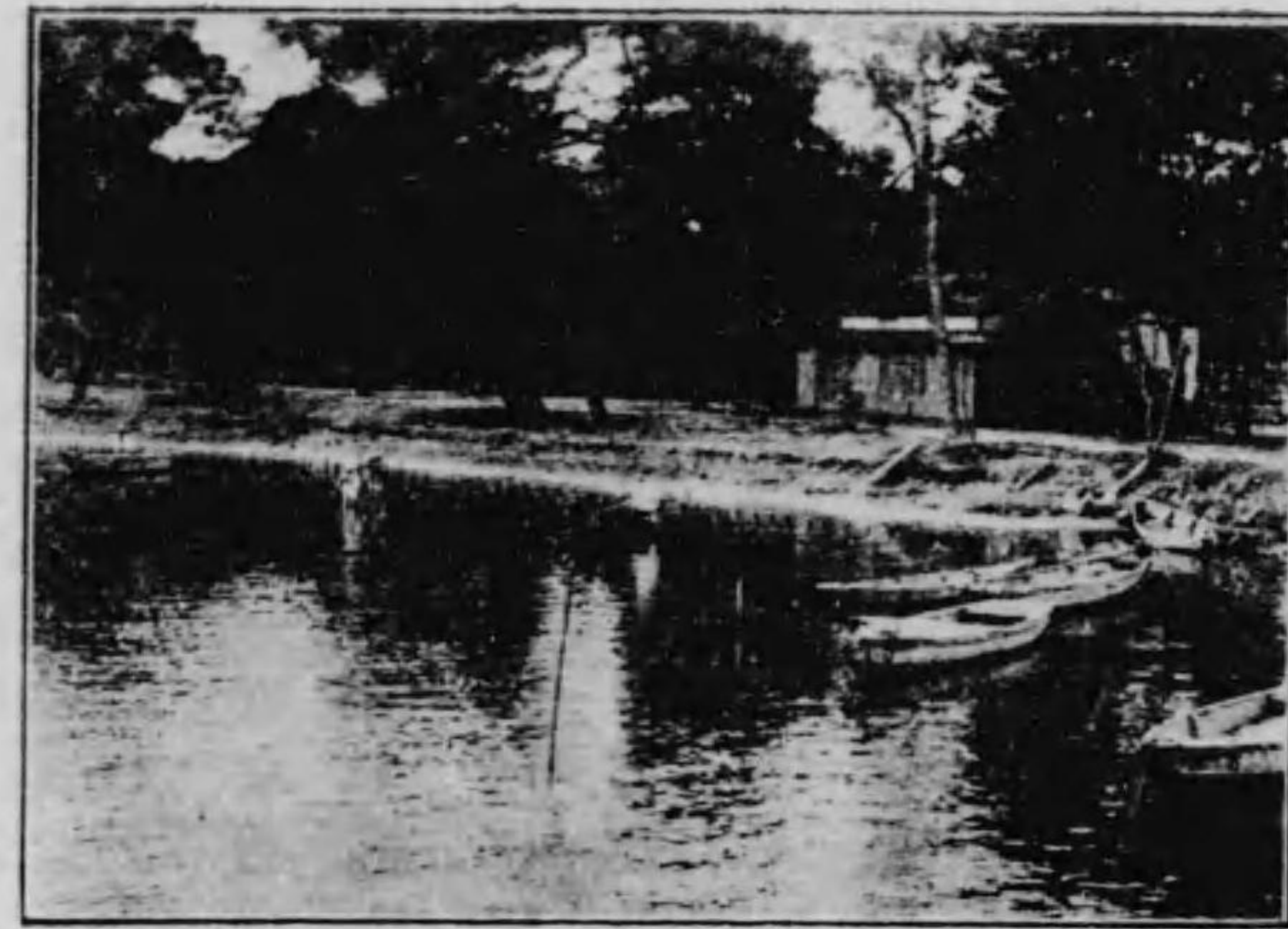
世其の至誠至忠を稱し、今に至るまで其の志を悲まぬものは無い、延喜三年二月太宰府の配所で、空しく此の世を去られた博多より四里、寶満山籠古梅、馥郁たる所、神音縹渺たる太宰府神社は、實に誠忠の人道眞を祀る處である。

## △天慶の亂

朱雀天皇の御代伊豫國椽に藤原純友云ふものがあつた、爲人狼戾



好んで虐殺を行つた。天慶三年一門徒黨を集めて伊豫に起り、讃岐の一戦に破れて九州に逃がれ、太宰府を圍みて之れを焼き、又た官物を奪い取るなき勢ひ再び振うて居た。十二月總追捕使小野好古兵を率ゐて來り、博多に於て之れを戦うた。純友は又大敗地に塗れて、再び伊豫に走つた。博多が兵燹に罹つたのは、此の一舉が最初であつた。云ふこゝである。



多 多 良 川 沿 岸

州に逃がれ、太宰府を圍みて之れを焼き、又た官物を奪い取るなき勢ひ再び振うて居た。十二月總追捕使小野好古兵を率ゐて來り、博多に於て之れを戦うた。純友は又大敗地に塗れて、再び伊豫に走つた。博多が兵燹に罹つたのは、此の一舉が最初であつた。云ふこゝである。

#### △文永の役

風無き夕の多々良濱邊の波は、金

波銀波に輝いて、今こそ平和の氣分幽寂の思ひあるが、昔は外寇の古戰場として、多々良の海は血の海に化した事が幾度であつたらうか。文永の役は將さに其の一こつであつた。時は龜山天皇の御宇

文永十一年の四月、元の都元帥忽敦蒙は、日本侵略の目的を以て、韓國との連合軍四萬人、戰艦九百艘を率ゐ、大舉して來寇した。對馬壹岐から肥前の沿海、各地を侵略して、蠻

行を敢てし、勝ち誇つた勢ひに油が乗つて、進んでは博多を襲ひ、太宰府に迫らん。府中は愕然として色を失ふの時、時の探題小貳經資は急ぎ京都の御所に報じ、一方九州各地諸豪勇士を徴し、身射から諸軍を督し、戰鬪の區處を定めて、敵軍の來るのを俟つた。十九日に至り、元軍は今津に入り、一部の陸兵を上陸せしめ、主力部隊は艦隊に俱に、翌日博多を攻めた。茲に海戦は博多筥崎に連り、陸戦は今津より佐原、西新町、鹿原百道、修猷館所在地、鳥飼、赤阪の線に互り、我軍は善戰良謀を以て防いだ。如何んせん敵は山の如き艦艦、新式の兵器で威迫しつゝ、市中に火を放ち、奪略を行ひ、進んで筥崎宮を圍んだのである。敵は味方の攻略終日、亂戰苦鬪數十回、共に力盡きて、我軍は水城に退けば、敵軍は船に歸りて勝敗は決せぬ。恰かも其の夜一陣の大風が起きた。怒濤大に起つて、敵艦の覆滅するもの無數、兵士の死するもの又一萬三千餘人、餘は皆な夜に乗じて逃れ去る。世に文永の役と稱するものは、此の戰の事を云ふのである。

#### △弘安の役

四百餘州を擧るそは何に蒙古勢と、小學兒童の口にまで上つた弘

安の役は、實に此の博多灣に我が福岡市を舞臺とし、背景として演ぜられた、國家存亡の大戰爭であつた。弘安四年の夏、元主忽必烈は日本侵略の野望捨て難く、東路



江南の精銳併せて十萬餘人、戰艦四千餘艘を熾して、一舉日本を屠らんものゝ來寇した。艦艦海を蔽うて、博多灣外に現れた時、彼等の心中必戦必勝を期したのは、云ふ迄も無い事であらう。時の執權北條時宗は此の事あるべきを豫知し、豫め鎮西の諸族に課して、博多沿海の一帶數里の間に、嚴然たる長蛇の石城を築いて、一朝の事變に備へてゐた。後世云ふ處の元寇防壁は即ちこれで、今日迄も現に伊崎浦、生の松原、其他に點々其跡を存するのである。而して亦博多留番役の制を定めて、邊海の監視を怠らな中、恰も此の年六月元軍再來の報に接し、鎌倉幕府は鎮西の諸軍に傳へて、防戦を命じた。強將勇卒の集るもの無慮二十五萬騎、其の一部は肥前の沿海より壹岐對馬を扼して防ぎ戦つたが、忻都、洪茶兵の東路軍は之を壓迫して六月五日には早や博多に迫つた。志賀能古の兩島は、既に彼等の奪ふ處となり、我軍は右壁に據つて之を守り、相對峙する。こゝ旬日にも及んだが、我が將士中の防守のみに甘んせざるものは、交々小舟を操つて敵艦に逆襲し、或は志賀其他の島々に戦つて敵將を殺し、或は虜にする。なご、驍名を馳せた勇士には、菊池武房、河野通有、竹崎季長、草野住長等限りもない。連戦連日、我軍の士氣は大に振つたが、敵は遂に退いて鷹島に據つた。閏七月一日夜颯風起り怒

濤狂つて艦船を碎き、溺死するもの算へ切れない有様であつた。敵將范文虎等は纒かに身を以て免れ、殘兵の船を失うて、鷹島に留まるもの三千人、鎌倉幕府は悉く其の首を斬つた。此の役に於て敵軍の死するもの約十一萬人に達した。傳へられる。此の役や五月廿一日壹岐に始まり、閏七月七日に至る其期間は短いが、實に皇國の興廢に係る大國難であつた。左れば畏れ多くも龜山上皇は、痛く宸襟を腦まし給ひ、身を以て國難に代らん。こゝまで、伊勢大廟に祈らせ給うた。云ふこゝであつて、世に此の時の颯風の高なる二基の銅像こそ、この大捷を萬世に傳ふべき紀念である。

△五卿の入筑 世は刈り菰亂れゆく、文久三年の末つかた、京都の政變は、勤王志士の非運となり、終に七卿の京都落去となつた。即ち三條實美、東久世通禧、壬生基修、西三條季知、四條隆綱、錦小路頼徳、澤嘉宣の七卿は、吉川侯によりて、長州へ落ち、一時周防の三田尻に足を停めて、毛利家の保護を受けて居られたが、幕府の追及が嚴重なので、慶應元年正月五日、又海峡を超えて、筑前の黒田家に、果敢なき保護の身となり、此の中澤嘉宣は、生野義舉に將さして去り、錦小路頼徳は哀はれ病を得て、中途に客死さ



れ、残る五卿の人々は、水野丹後、土方楠左衛門、尾崎三良、田中顯助等の赤誠ある人々に伴はれて、筑前赤間に假居せられたのも、ほんの束の間、太宰府天満宮の宿坊、延壽王院に云のへ蟄居せられた、幕吏の追及に對する、薩藩黒田嘉右衛門等の決死の談判なきは、此の蟄居中にあつた事である。超えて慶應三年十二月には、明治維新の急轉直下的、大革政の結果、五卿は凡て新政府の中心人物として、聖代の廟閣に上らるゝことゝなつたのである。千餘年の昔し、誠忠無二の菅公を迎へた我が太宰府は、新たに亦た、明治中興の功臣を迎へ、爾來年を闊する五十年、明治も大正も改まつて二年の後、神威赫赫たる天満大自在天神の神苑に、五卿都落ちの姿を物した紀念碑が建られ、明治維新の志士に縁故ある、土地の歴史を飾るこゝゝなつたのである。

△福岡丁丑の大獄 徳川幕府の晩年、福岡藩内には、勤王の志士が多士濟々であつた。然し當時の藩論は、勤王佐幕孰れにも決着せず、大體に於て大勢觀望に云ふ様であつた。爲め、藩政廳は幕府を憚つて、慶應元年十月二十五日、藩内の志士、其の悉くを捕へて獄に投じ、加藤司書等七名には、切腹を命じ、月形洗藏等十三名には、斬首を、其他は孰れも遠流、幽囚等を申付けて、藩内の多士其跡を絶つた。此のクーデターを稱して、丁丑の大獄と云ふのである。

加藤司書 衣非茂記 建部武彦 齋藤五六

萬代十兵衛 森安平 尾崎總右衛門 (以上切腹)

月形洗藏 海津幸一 鷹取養巴 伊藤清兵衛

森勤作 伊藤眞一郎 江上英之進 今中祐十郎

今中作兵衛 安田喜八郎 中村哲藏 佐座建三郎

瀬口三兵衛 大神壹岐 (以上斬首) 黒田播磨

矢野相模 矢野安大夫 野村望東 河合茂山

眞藤善八 海津又八 戸田平之丞 三阪十兵衛

山内俊郎 林 泰 長谷川範藏 徳永立六郎

野村助作 小金丸平次郎 一鬼道右衛門 尾崎逸三

尾江逸藏 伊藤茂次郎 早川養敬 (以上遠流及幽囚)

齋田要七 堀六郎 (翌年斬首)

△明治十年の變 西郷南洲が鹿兒島に兵を擧げた明治十年の同じ三月、福岡の士



族建部小四郎、越智彦四郎等兵を起して、大西郷に策應した、先づ福岡城を襲うたが、目的を達せず肥前に逃がれ、更らに秋月に立籠つて、追撃の官軍を迎へ戦うたが、氣勢一向に振はずして潰亂した、主將等は各所に潜伏して、再舉を企てたが、謀未だ成らぬ折しも捕らへられて斬られた。

△其他の史實 以上列舉した史實の外に、福岡を中心とする事變は、南北朝前後から天正にかけて、大小無數であつた、今其の重なるものを上げて見るならば、後醍醐天皇の元弘三年、正慶二年とも云ふには、官軍の將菊池寂阿入道武時が、時の九州探題北條英時を博多に攻めて戦没した、延元元年には、菊池武敏南朝の爲めに、足利高氏の軍と戦つて、多々良濱及び博多に破れ、其後足利時代には、筑前地方は小貳、大友、原田、宗像、立花の諸豪族の角逐交戦の地となり、爭奪焚掠の絶ゆる間も、なく、住民は日夜安堵の暇も無かつた、即ち應永年間には、小貳、千葉等の徒、探題を博多に攻めて、市中は又も兵火の甚し化し、應仁の頃、豊後の大友、周防の大内の兩氏、共に博多を領して居つた時分なども、爭亂頻りに相次いで、劍光尖影の物すごい光景を呈し、永祿の頃には、中國の毛利氏、大友氏と争つて、吉川元春、小早川隆景、立花城を攻め、大友宗麟、戸次道雪等之

を迎へて、博多の町に防戦した、而して此の一戦に依つて、民家の大半は煙塵に歸した、云ふこゝであるが、其後永祿十一年から元龜天正にかけて、此の間約十五六年間、丈は、さしも兵燹に次ぐに兵燹を以てした博多の町も、稍々小康を保つた様で、市街は漸く復舊の色を現はさんとする折柄、更らに薩摩隼人の見舞を受けて、又も兵馬恫惚の甚し化した、天正十一年十一月、薩の島津氏、長驅して攻寄せ、當時の領主大友氏の兵、矢倉門に戦うた際には、又も火を市中に放ちて、民家の多くを焼いた、次いで十四年八月、島津義弘九州を席捲して、立花城を圍んだ時、豊臣秀吉の遠征軍到着の風聞を聽ひて、退却の道すがら市中に火を放ち、博多全部を烏有にして去つた、沖には大船多くかゝり民家一萬餘戸、佛閣僧房数を知らず、其の名四方に廣し、こまで、古書に謳はれた、鎮西の舊都、榮華の博多は、斯くして一度は全く亡び失せたのであつた、今の博多は、天正十五年、豊公九州下向の歸途、其慘狀を憐んで、再興したものである、こゝは、既に前にも述べた處である。

## 出身人物



英才偉人の生れる處、其處には、必ず山水の秀麗なものがある。蓋し優秀なる自然の大きな威力は、不知不識の間、靈覺となつて、彼等に強い響きを與ふるが爲めではあるまいか。古來圓山優水の間に、養はれた者の中から、必ず寛仁大度の哲人を出し、峻阪奇峭の間に育つた者の中には、創造的革命的の偉人が出て居るのである。地中海の彈丸黒子の孤島、濁浪の岸を叩いて、斷崖の骨を洗ふ、コルシカの一少年は、後年世界の帝王を夢みた大ナポレオンでは無いか。夕さりくれば漁夫の夢圓かに、蘆荻長へに水に戦ぐ平和幽寂なガラリヤの湖畔、ヨルダンの谷に生れたユダヤの一木工の兒は、此の幽秀の自然の感化を受けて、『神の愛』の自覺となり、世に救世主と謳はれたものではなかつたであらうか。

我が福岡の地は、固ま山水に富む。南に天拜、寶滿の靈峯は、千古姿態を變せずして眠るが如く、北には立界の怒濤、岸壁を碎るて、無始無終、不斷の活動を教へては居ないか。蜿蜒三里の松原は、春は雨に秋は風に、自然の音律を合して、住民に平和の福音を傳へてはるないか。古往今來、此の大なる優秀な自然の間に、培はれ、無言の大教訓の裡に育つた、福岡人士の間には、我等の規矩とし、準木とすべき、偉人賢哲も、少くは無い、又其の片

言隻句一舉一動、雖も、皆我等を啓發するに足るべき資料ならぬのは無い、史を讀んで之を求むれば、滿眸悉く花爛熳の姿であるが、然し此の間、自から二個の相異なる性格を發見し得るのは、史實研究家の、特に注意を要する處であらう、一は獨り俗界に超然として、常に溫容自若、大義を唱へて清節を守る事、恰かも天拜寶滿の靈峯が千古無言の行を續くるような、靜的哲人的性格である、貝原益軒の如きは、即ち此傾向の多くを具有する、代表的人物ではあるまいか、一は事に當りて、果斷豪毅、或は不屈不撓、艱難に處しては、其志愈々強烈を加ふるこゝ、恰かも立界の怒濤が、無始無終、鞏固の響を絶たない様な、動的改革的性格のそれである、栗山大膳、平野國臣の如きは、此闘將的氣分の多くを具有する、代表的人物ではあるまいか、古往今來の福岡市出身の英才を、拉し來つて、解剖臺上に縱横のメスを振へば、其の多くのものは、皆此異なる二方面の性格を併有し、退いては前者即ち靜的哲人的性格を發輝し、進んで事に當つては、後者即ち革命的闘將的氣分を現はすの感があるのである、今遡つて古來の偉人の行跡を尋ねる事にしよう。

### △黒田如水

『剛毅にして敏捷、人を知りては善く任ず、宏慮深謀、天下に並なし、我



が歿後は或は天下を掌握せん』こは豊太閤が會つて如水を評したるの語であつた、不幸如水は遂に天下を掌握するには至らなかつたが彼の機量は必ずしも小なりこ



黒田如水の肖像

は云はれない、如水は名を孝高に云ふ、天文十五年十一月姫路に生れた、父職隆に俱に小寺政職の麾下であつた、奇智に富み且事體に通じた如水は、夙に信長の霸業成るべきを察し、政職を勸めて其の麾下に参じた、秀吉信長に請うて中國の征途に上つた際には、従ひて各地に功を挙げ、荒木村重の叛ひて、攝津伊丹城に據つた時の如き、如水は大膽にも、單身入城して降伏を勧め、村重の爲めに幽禁の苦しみを受くる事一年に及び、脚足爲めに腐つた云ふ事蹟は、木村重成の軍使と相待つて好一對の美談である、秀吉が本能寺の變を聞き、直ちに毛利氏と和し、軍を返して光秀を伐ち、茲に天下の霸

業を定めたのは、全く如水の献策與つて力があつた云ふ、秀吉は四國九州を征する度に、必ず如水を以て監軍とし、帷幄の内に置いて其の籌策に當らしめぬ事は無かつた、天正十五年七月功を以て豊前六郡十二萬石を賜ひ、中津に居を卜したが、同十七年封を長政に譲りて、自身は剃髮して如水に號し、隱退を秀吉に乞うたが、惜んで許されず、征韓の役には前後にも參謀として出陣し、大に良謀善策を施した、大閤薨して後關ヶ原の役起るの報に接するや、急遽兵を整へて薩摩に迫らんとしたが、關ヶ原の勝敗既に決したと聞き、兵を納めて爾來世に現はれず、慶長九年三月病に依りて薨した、享年五十九歳、菩提所は博多崇福寺内にある。

### △黒田長政

筑前五十二萬石の主として、漣平らかな大堀りの畔、舞鶴城内に在り

て藩政を總攬し、第一代の城主として福岡藩三百年、太平の礎を築いたのは、實に黒田長政である、長政は孝高の長子で、永祿十一年十二月姫路に生れた、十五歳にして既に軍に従ひて、敵の首級を擧ぐる程の豪の者であつた、長政の世に出でた當時、世は麻のようにならぬ、元龜天正の戰國時代であつた爲め、長政は父に従ひて、野戰攻城幾多の戰歴に、天晴功名手柄を著した、孝高衰へて隱退の後、長政封を受けて甲斐守と稱して、



依然中津に居した、文祿より慶長に互りて、豊臣秀吉兩度の軍を起すや、長政は兵五千



像 肖 公 政 長 田 黒

を率ゐて大陸に渡り、士卒を伍して南韓各地に轉戦し、屢々明韓の軍を破り、大に名聲を擧げた。慶長五年、石田三成事を擧げた時、長政は諸將の嚮背を定むる爲、自から先鋒を以て關ヶ原に参加し、首功を立てた。家康を定めたるの時、其の功を論じて、筑前五十二萬石に封ぜられた。爾來國を治むる事二十四年、元和九年八月五十六歳で、京都の寓に客死し、崇福寺に葬られた。

△神屋宗湛 元龜天正の時代、程、生民が

塗炭の苦しみを受けた事は先づ無かつた。世は麻の様に亂れ、梟雄は四方に割據して、掠奪侵略を之れ事とした。九州の主都たる榮華の博多が、英雄の足跡に踏み躪られ、度々の兵燹に罹つて、全街滅亡の悲しき光景

を見たのも、此の時代の事である。天正十五年、太閤南征の砌、此の慘ましき光景を憐んで、博多の再興を計つた。云ふ事は、前にも記した處であるが、英雄太閤をして、此の



室 茶 湛 宗

舉に出でしむるに至つた。其の背面には、實に當時福岡の巨商であつた宗湛の影が、潜んで居つた。こゝを忘れてはならぬ。宗湛名は善四郎、性豪快、洒落の性質で、茶道に達して居た。風流茶事に托して、當時英雄豪傑の意を迎へて、之れを自家藥籠中のものとして、戦國の世に、禍難を免れた事實は、一二に止まらない。恰も太閤南征して博多に來た、宗湛又例の茶事手段を以て太閤に近づき、博多の慘狀を訴へて、其の再興を力願した。傳へられる、十六歳の時既に富國の壮志を抱き、父を謀りて、肥前唐津に移り、朝鮮、支那、呂宋、暹羅等に往來して、海外貿易をなし



たが、謀策圖に當つて巨萬の富を重ね、又各地に鑛山も開ひた、支那から素麵の製法を移しては、博多素麵の由來をも作り、或は博多大阪間の爲替取組の方法を肇めて、我が國銀行業の濫觴を形造くつたなご、實業家としての宗湛の名は、永久に忘れる事は出来ぬ、寛永十年十月八十五で病死した。

宗湛が一代の努力に、巨富を抱いた神屋家も、時の流れには捷つ事が出来ないか、其の子孫は今尙現存しては居れど、又昔日の面影は無い、當時宗湛が秘藏せし名器の博多ぶんりんは、今は黒田侯爵家に移り、太閤を招いたと云ふ由緒深い茶室は、天神町平岡氏の別邸に移されて、今日迄現存し、何れも宗湛の面影を偲ばしめて居る。

△嶋井宗室 天正年間、宗湛と並びて富巨萬を重ね、海外交易の巨商として一世の羨望を受けた嶋井宗室も、又福岡の人である、宗室は名を勝茂と云ひ、盛んに朝鮮、支那、暹羅、呂宋等に通商して國富を謀つた、宗室又宗湛の如く、茶道を嗜み、秀吉に近づくの途を得た、秀吉彼の才氣を愛した、征韓の役に先だつこと二年、太閤の命を受け名を貿易に托して、潜かに韓國に渡り探險六ヶ月、彼地の實情を精査して歸朝した、秀吉其の復命を聴き、喜んで事有るの日汝を以て嚮導とせん、と云ふ、宗室は夫を辭して、殿下の

企圖や大也、然し其の得る處は償ふ處に足るまいと云つて、大いに秀吉の爲めに嚇怒されたこと云ふ事だ、一代の傑人豊太閤に向ふ事、尙一介の人に對するような其の硬直は、以て後人の推賞に値すべきではないか。

△黒田家二十五騎 戰國時代黒田孝高長政の部將には、極めて多士濟々の有様であつた、宗族には、兵庫助利高、修理亮利則、圖書助直之あり、其他、後藤基次、栗山備後、久野四郎兵衛、井上周防、毛利但馬、黒田美作、野村太郎兵衛、吉田壹岐、桐山丹後、小河傳右衛門、菅和泉、三宅若狭、野口佐助、益田與助、竹森石見、林掃部、原伊豫、堀平右衛門、衣笠因幡、毛屋武藏、村田出羽等、孰れも一騎を以て千に當るの勇士である、之れに長政を加へて二十五騎で、黒田の二十五騎と一言は、尙向ふ所敵なしの勢であつた。

△栗山大膳 世に忠を談じ義を叫ぶ武丈夫は多い、而しながら事に當つて惑はず、斷々乎として、其素懷を貫き得るもの果して幾人であらうか、古來史を案ずるに、眞個忠魂義節の武夫は寥々たる晨星を見る位に過ぎぬ、栗山大膳は舊福岡藩の功臣である、渾心の赤誠は灼鐵の如く、國難に遭遇して愈々輝き、一身を賭して黒田家三百年の社稷を全ふした、其身は罪に座して不遇の裡に世を終つたことは云へ、光り輝やく忠魂



義節は今の世までも仰がぬものにてはあるまい、大膳名は利章、黒田の家臣、祿三萬石を食んで、宰臣の首位に居り、豪邁にして果斷の性を有し、武に通じ兼ねて文に達した



栗山大膳肖像

得難き勇士であつた、聰明な君侯は聰明な家臣を捨つる事は無い、長政は深く大膳を重用信頼した、長政の嗣子忠之、祿を受けて家國を嗣いだ、が、父程の明なく放縱にして不羈幕府の忌避に觸るゝ様の事が多かつた、當時徳川の覇業漸やく安定の緒に就いて、諸國諸大名中太閤の舊勳者中には、芟除的淘汰を受くるもの

多く、加藤、福島の如きも、其の厄に遭ひ、黒田も又禍測るべからざるものがあつた、大膳は主家を思ふの極、遂ひに脱藩して潜かに江戸に上り、大膳にも忠之を訴へて、後自からは誣告の罪に座した、蓋し非常手段を以て、危かりし黒田の宗社を全ふせん誠意に

外ならぬのである、大膳は罪に服して南部に配せられ、手厚き待遇の下に謹慎してゐたが、遂に配所で歿した、今日活動寫眞、又は劇として公演される有名な「宮崎文庫」は、實に此の大膳を中心とした者である。

#### △伊藤小左衛門と大賀宗伯

博多商人の特色を發揮したものに、前記宗洪、宗室の外伊藤小左衛門、大賀宗伯、末次宗得、末次興善等がある、小左衛門は、當時の富豪として名高かつた宗藤の子で、博多に本店を、長崎に支店を置いて、私かに海外貿易に従事したるこゝ發覺して、寛永七年黨類三十餘名と共に長崎に刑死した、宗伯は宗九の子で、矢張り其頃の富豪である、父宗九や、宗洪、宗室と共に、數度國主に資を獻して功があつた、歿したのは寛文五年であつた。

#### △貝原益軒

徳川時代、本居宣長、賀茂眞淵、平田篤胤の諸儒と共に、文名を篤行を謳はれた貝原益軒も、亦福岡藩の人である、家は世々醫術を以て藩主に仕へたが故に、益軒も幼時は醫書と佛書を讀んだ、明暦三年京都に遊んで、松永尺五、木下順庵、山崎闇齋等碩儒の門に入りて、和漢の學を研鑽したが、博覽強記の性質なれば、研鑽僅か三年にして業成り、故郷に歸つて藩の學職に就いた、爾後三代の藩主に歴仕して、藩の文化の



爲めに貢獻する處多く、元祿十三年養扶持を戴いて京都に隠棲し、八十五歳の高齡で

貝原益軒先生像



寺 園 金

があつた、英のアストン日本文學史中に於て、益軒を評して、彼は實に詩人ウオーズ、ウ

死んだ、益軒は、國學の蘊奥を極めた云うても、自己の學識を誇るやうの事は無く、常に謙遜の態度を持して居つたが、令聞は却て高く今日の世までも、益軒を崇めぬものは無い。

益軒の著書は百種に餘り、其の中には道徳論あり、註釋物あり、植物の書物の如き、又旅行記の如きもあつた、益軒は書を著すに、志常に一般國民を利するに云ふ見地に立つ事を忘れなかつた爲め、文體は常に正しき國語を用ひて、修辭を施さない處、多く人を讀ましめた所以であらう、此點に於て益軒は確かに、當時の儒學者流を超越して、近代的學者たるの資格

オースの流なり云つてゐる、蓋し益軒の生命は、單に一片の堅苦しき儒者的生活のみでは無く、時に高尚なる思想界にも逍遙して、大自然の音律に共鳴を感じる事があつた爲めではあるまいか、益軒が辭世の詩と和歌は、以て益軒の風格を想望するに充分である。

平生心曲有誰知、常畏天威欲勿欺、存順沒寧雖不克、朝聞夕死豈不悲、

幼求斯道在孤懷、德業無成夙志乖、八十五年爲曷事、讀書獨樂是生涯、

來し方は一夜許りの心地して

やそぢあまりの夢を見しかな

### △龜井南冥

徂徠系統の儒者龜井南冥は、福岡の郊外姪濱の人である、未だ幼い十歳の時分から、西肥の漢詩人に就いて詩を學び、又作詩に妙を得て居た、後京都に上つては、吉益東洞の門に入り、大阪では永富鳳に師事して、儒學と醫學を學んだ、當時長門に徂徠派の碩學山縣周南があつて、名聲遠近に聞えてゐた、南冥も亦其の高風を慕うて長門に行き、徂徠學の研鑽を重ね、其の蘊奥を極めて郷に歸つたが、郷里では儒醫として大に世の崇敬する處になつた、藩侯南冥の名を聽いて起用し、甘棠館に云ふ



のを設けて南冥を教頭に任じ、子弟の薰陶に當らしめた。福岡藩は之が爲古學大に行はれて、藩學爲めに一變せんとする有様となつた。程朱學の徒輩羨んで、百方排斥に努めたので、南冥は遂に黜けられ、甘棠館は閉鎖するの已む無き事となつた。爾來南冥は慷慨悲憤の裡、詩文を以て僅かに慰めて居たが、文化十一年三月、火災の際、自焚して死んだ。其の時年は七十二歳。南冥には著書が甚だ多い。就中南擠問答、辨惑論、半夜物語、南冥集、左傳講義、論語々由等は有名なものだ。

△僧仙厓 大體は美濃の生れであるが、圓覺寺に學んで博學であつた。寛政年間、博多聖福寺の住職となつて、天保八年八十八歳で入寂した。其生涯は脱俗超世奇骨稜々で、頗る逸話に富んで居る。書畫を能くして、今日迄世人に珍重されて居る。

△宮崎安貞、宮川忍齋 安貞は黒田家治世三百年間に於ける、益軒に次ぐ經濟學者で、『農業全書』の著がある。廣島の生れであるが、黒田家に仕へ、晩年は志摩郡に隱居して居つた。元祿十年七十六歳で歿した。忍齋は兵學者である。若狭の生れであるが、黒田家に仕へ、『黒田家譜』、『關原軍記大全』の著書がある。享保元年六十二歳で歿した。

△青柳種信、稻富又百 種信は柳園と號し、地行の生れである。國學に長じて居つ

たが、不遇で終つた。歿した時は天保六年七十歳であつた。著書十數種がある。又百は益軒の門人で、博覽強記を以て聞えて居つた。本名は希賢と云ふのであるが、一夜に五絶百韻を賦したので、又百と呼ばれた位である。藩の儒者であつたが、後浪人して前田家に仕へた。

△平野國臣 勤王の志士平野二郎名は國臣、地行は足輕の家に生れた。微賤の身を以て夙に勤王の大義を唱へ、二十歳の時京都に出てより、遂に不幸京都の獄に刑せらるゝまで、東奔西馳、王事に勤め、國を憂ふる事始終不易、眞に其生涯は不斷の活動であつた。安政五年、二郎は國事を憂ふるの餘り、潜かに脱藩して京都に上つた。當時關東中國には頼三樹三郎、梅田雲濱等の徒があつて、只管王道を説いて居た時であつた。二郎是等の同志と相諮つて事を起さうとしたが、當時は徳川幕府の威力未だ地に墮ちない時分だから、事志と違ひ、鹿兒島、熊本、山口と諸國に流寓して難を免れ、或は捕へられて獄に投ぜられたこともあつた。當時京都清水寺の住僧月照は、幕府の逮捕を免れ、ん九州に下るを送つて、俱に鹿兒島の西郷隆盛に身を寄せ、更らに西郷を加へて日向に逃がるゝ途中、月照は海に投じ、隆盛は捕へられて幽閉の身となつた。其の時二郎





平野二郎銅像

つた、此の時中山忠之大和に兵を挙げたので、國臣は命を蒙つて之れを諡さうとした

が、時や遅く戦い既に開かれて、鎮撫の途盡き京都に歸つて見れば、政界の形勢は又一變して、幕府は大に國臣を索むるに聞き、潜かに逃れて長門に行き、脱藩の同志藤四郎、戸原卯桶と謀つて澤嘉宣卿を擁し、文久三年十月、但馬の生野に於て義兵を起し、大和の同志に策應せんとしたが、間もなく大和の敗報に遭ひ、次いで出石、豊岡、姫路の兵に攻られ、遂ひに豊岡藩の爲めに捕へられて、又も幽閉の人となつた。元治元年幕軍長軍と京都に接戦の際、幕府は其の脱出を恐れて、一味の徒黨三十七人と共に、悉く之れを京都の獄屋で殺してしまつた。國臣時に三十七歳、死に臨み従容として動ずる氣色も無く、

憂國十年、東走西馳、成否任天、魂魄歸地、

みよや人嵐の庭のみみぢ葉は

いづれ一葉も散らずやわする

と詠んだ、壯烈な其最後は志士の面目躍如として、渾身の血を湧かしむるに足るではないか、明治天皇國臣の誠忠を思召され、二十四年特旨を以て正四位を贈らせ玉うた、聖恩枯骨に及ぶ、英雄又以て瞑すべしであらう。

は宮崎司と變名して再び京都に上り、更らに九州中國の間を遊歴して勤王の大義を唱へた。文久元年には又も薩摩に赴き、藩公島津久光に遭うて「回天管見策」、「尊攘英斷録」を上書し、天下に先んじて討幕を論じ、同二年八月には密かに闕下に伏して、時務策一篇を献じて嘉納あらせらるゝ處となつた。然し時非にして遂に福岡藩の手に捕へられ禁獄せられたが、此の獄中で筆硯を禁ぜられたにも、不拘湧くが如き思想は禁ずる事能はず、紙を捻りて文字を作り、彼の有名な「盡忠録」、「制蠻策」、「囹圄集」等の書を著した。翌年赦されて上京し、學習院出仕となり朝議に參與する事とな



△野村望東 王政維新の前後筑前から幾多の志士義人が出た中にも萬緑叢中の紅一點たるものは、實に我が野村望東であらう。望東の本名は元子、婦人には珍らしい氣概があつて、且つ國風に妙を得

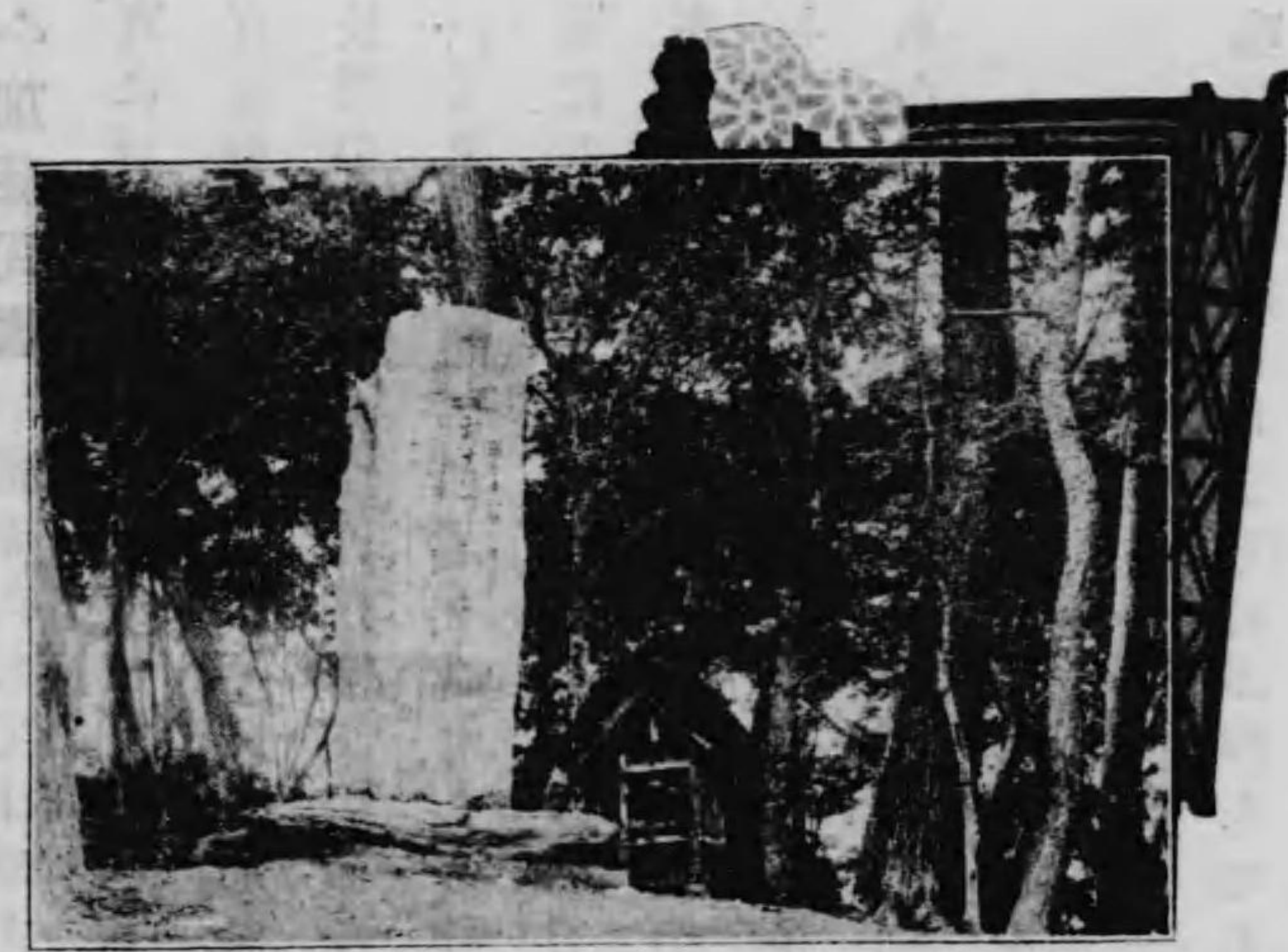


野村望東の肖像

てるた、二十四歳の時福岡の藩士野村貞貫に嫁し、夫と共に勤王に志したが、五十四歳の折夫と死別し、爾來望東は髪を剃りて尼となつたが、勤王の志禁じ難く、婦人の身でありながら、健氣にも京都に上つて、勤王の諸名士と、歌事に托して交り結び、深く皇室の衰微を慨き、志士の間に

奔走盡力する處少くなかつた、當時の國事犯人たる志士義人の人々が、幕府や藩の爲めに追はれ、居るに處無く漂浪するものは、多く望東の平尾山莊に隠れた、高杉東行や、西郷南洲や、平野國臣や、薩摩湯に沈んだ僧月照の如き、孰れも其中の一人であつた、亦

福岡藩の志士が、國事を談じ密議を凝らすの場所は、常に望東の山莊であつた云ふ、



平尾山莊

の秋高杉東行等、潜かに望東を奪つて下關に匿し、更らに三田尻に移して厚く待遇し

望東はかよわい女性であるから、是等幾多の志士と共に表面に立つて國事に盡す事は出来なかつたが、然し其の背面に在つて彼等を勞はり慰めて、其の志を遂けしめた功績は、決して見逃し難いものである。明治維新の大業は云はゞ望東の山莊に生まれ、望東は實に其の生みの母であつたと言つても過言ではあるまい。慶應元年の三月福岡に大疑獄起るや、加藤司書以下幾多の志士は、刑場の露を消え、たが望東も亦捕へられて、姫島に流され、牢獄の中で憂き月日を送らねばならなかつた。望東の姫島日記は其の時の徒然草である。翌年



たご云ふ王政復古の母野村望東は慶應三年六十二歳の時同地で死んだ。

△加藤司書

雄偉にして才略あり、力量又衆に勝れた文武兩道の達人加藤司書は實に日本古武士の典型とも云へるであらう。司書は福岡藩の名門に生まれ、祿二千八百石を領してゐた。元治年間幕府征長の師を起した際、恰かも司書は一隊の將として、長門の國境にあつたが、藩公の命を受けて長州に使い、更に廣島なる尾張總督をも説いて幕長の間に和議を講ぜしめ、同時に五卿入筑の事をも議した。尾張總督大納言慶勝は其の勳功を賞して、三振の名刀一襲の陣羽織を賜うた。後參政に任じ主として軍事を司つてゐたが、慶應元年丁丑の大疑獄起つた際、讒するものありて罪に座し、切腹を命ぜられ、同年十月二十五日博多天福寺で刑死した。年三十六歳。司書は時に風流韻事を好んでゐた。尾張總督に引出物を賜はつた時、想を叙して云ふ、

皇御國の武夫は如何なる事をか努む可き唯身に持てる真心を君に親みに盡すまで

嗚呼英雄閑日月も云ふべしであらう。

△幕末の志士

幕末尊王佐幕の論喧しかつた當時の福岡には、勤王の志士義人は

多士濟々たるものであつた。加藤司書平野國臣、野村望東諸氏の事蹟は既に書いたが、尙ほ此外玄界の波濤が岩壁に碎けて飛沫を散る様に、尊王の大義を唱へて一世を震駭し、君國の爲め一死も辭せなかつた者には、

- |       |        |       |       |
|-------|--------|-------|-------|
| 月形深藏  | 海津幸一   | 月形洗藏  | 中村岡太  |
| 戸原卯橘  | 鷹取養巴   | 建部武彦  | 齋藤五六郎 |
| 衣非茂記  | 尾崎總右衛門 | 萬代十兵衛 | 森安平   |
| 海賀宮内  | 中村恒次郎  | 筑紫義門  | 森勤作   |
| 江上英之進 | 伊藤清兵衛  | 安田喜八郎 | 中村哲藏  |
| 大神壹岐  | 今中祐十郎  | 今中作兵衛 | 瀬口三兵衛 |
| 佐座謙三郎 | 伊丹真一郎  | 堀六郎   | 齋田要七  |
| 野村助作  |        |       |       |

の諸人があり、其中には維新前に捕へられて刑せられ、花々敷い最後を遂げた者が多い。此等諸氏の行動は勇壯にして又悲痛、讀んで人心を感動せしむるものも少なくは無いが、茲には代表的に如上の三氏の傳を列らぬるに留めた。











御代に求むれば、近年物故せる名士として政治界に平岡浩太郎あり、鶴原定吉あり、外交界には山座圃次郎、官吏には太田峯三郎、藝界には川上音次郎がある。現在では浪人組の巨頭に、頭山満あり、續ひて杉山茂丸あり、官吏には金子堅太郎、寺尾壽、寺尾亨等があり、外交官には栗野愼一郎、内田定槌がある。軍人には明石元次郎、門司和太郎、實業家には團琢磨、安川敬一郎、平賀義美がある。學者としては、井上哲二郎、福本日南がある。美術家には和田三造、吉田博、山崎朝雲がある等、各種各様に百花燦爛も云ふべきである。

ごりわきて我身に露やおきつらん

大貳 高遠

花よりさきに先ぞうつらふ

隆 源

我戀は博多をいづるからふねの

定 家

千鳥なく袖の湊をさひこかし

唐土船のよるのねざめに



# 大同生命保険株式會社

大正五年六月末現在

- 一、諸積立金 九百二十二萬八千三百七十六圓餘
- 一、契約高 五千七百三十二萬四千六百五十圓
- 一、件 數十萬三千八百八十一件

社長 廣岡 惠三

本社 大阪市西區江戸堀上通一丁目九番地

電話 土佐堀(長)一三一、一三二、一三三

九州支店 福岡市西中洲

長電話 二四〇番




明治二十六年創立

支拂タル保險金額

壹百貳拾餘萬圓

本社

東京丸ノ内馬場先大通リ  
社長 西脇濟三郎  
專務取締役 清水文之輔

 太陽生命保險株式會社

諸積立金壹百七十餘萬圓

九州支社

福岡市橋口町八十一番地

支社長 石原賢造

電話特長七八二番  
振替貯金口座一九三〇番



日ノ出生命保險株式會社

九州支部 福岡市天神町一七番地


電話六一一番

支部出張所 名古屋 京都 大阪  
廣島 福岡 北海道

本社 東京市神田區淡路町一丁目一番地

資本金五百萬圓

福岡市博多下西町七番地

 共同火災保險株式會社福岡支店


營業項目

火災、海上、運送  
傷害各保險

電話 (長二〇九番)

振替口座福岡四〇四番

福岡市博多下西町三番地

 共同生命保險株式會社福岡支部

電話 長六八九番

振替貯金口座福岡六〇六五番



福岡市下名島町二十八番地

# 富士生命保險株式會社

## 福岡出張所

電話 一〇五四番  
振替貯金口座福岡二三九九番

理想的相互組織ナルガ故ニ契約者ノ共有物ナリ契約者ノ増加ト共ニ利益ヲ増スベシ  
株式會社ト異ナルガ故ニ營業稅印紙稅免除ニ付是等モ亦契約者ノ利益ヲ加フ



# 蓬萊生命

社長 太田清藏  
專務取締役 高橋光威  
同 宮本幸五郎

本社 東京市京橋區新着町十番地  
九州支部 福岡市天神町八十二番地  
特長電話 七八九番

- 我社は純然たる相互組織にして全加入者に利益を配當す
- 我社の主なる出資者は各舊藩主たりし名門華族なり
- 我社の利益配當は保險契約後二年又は三年目より毎年配當す
- 我社は十才の幼年者より六十才までの被保險者を契約す
- 我社の契約する保險種類は十年、十五年、二十年、廿五年、三十年の満期とす



# 國光生命保險株式會社 福岡支部

福岡市博多下祇園町

電話 話二一四番  
振替福岡第二六八二番

- 本社 東京市京橋區尾張町新地
- 支部 東京 仙臺 大阪 秋田 廣島 鹿兒島 名古屋 金澤 北海道



福岡市福岡橋口町八拾一番地

常磐生命保險株式會社

福岡支部

電話六四六番  
振替口座福岡〇〇〇番

本社

東京市日本橋區本材木町

一丁目二十二番地



萬歳生命保險株式會社

九州支部

福岡市下小山町

(電話長二二六番)

## 福岡市概観

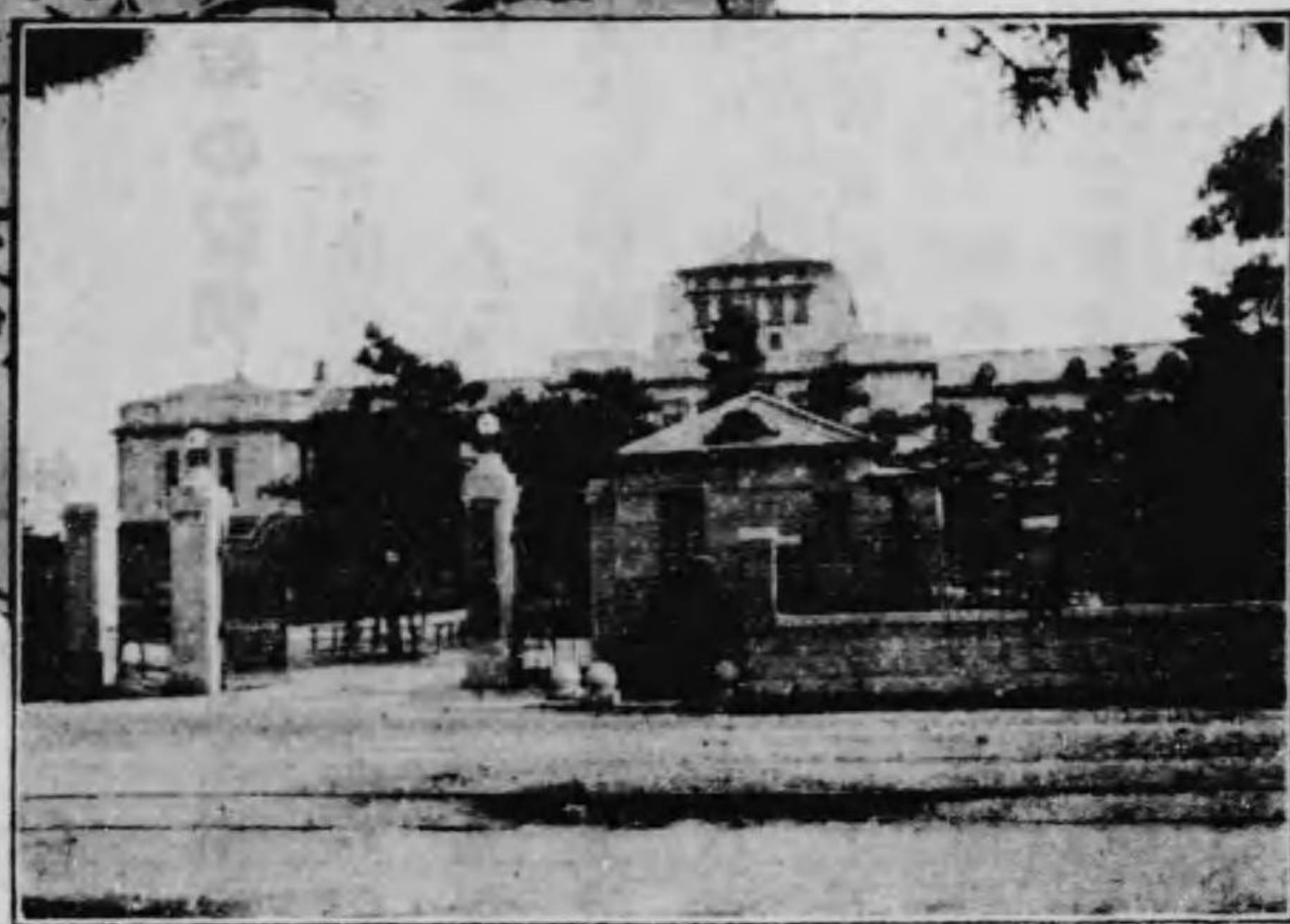
### 地理的説明

△一般の説明 門司から九州線の汽車に乗じて南すれば約二時間餘にして達する處、白砂青松の間楚々たる流れの那珂川を挟んで整然たる一大市街がある、之れ即ち福岡市である、行政區劃上の福岡市は現今戸數一萬四千六百六十七人口十一萬四千二百六十四、人口十五萬七千八百五十(西新町箱崎町千代町住吉町堅粕町を含む)を算して居る、福岡縣廳歩兵第三十五旅團司令部、九州帝國大學、其他教育、行政の各官廳があつて、一縣政治教育の中心地點である計りでは無く、其の繁華の度合に於ては、九州中多くの都市を遙かに凌駕し、實質上の中心都市とも云ふべき觀がある。

位置は、九州の稍々西北部、北緯三十三度三十六分三十五秒、東經百三十度二十四分、市役所の位置の地にあつて、我が國中央標準時より遅くるゝ事十八分三十七秒の處に



ある行政區劃上現今の福岡市は、東は石堂川を隔て、筑紫郡堅粕町千代町と境し、南



福 岡 縣 廳

は同郡住吉町三宅村早良郡鳥飼村に西は樋井川を挟んで早良郡西新町に隣つてゐる。而して北の一方は一面凡て博多灣に枕み洋々たる灣頭、青波を隔て、間近かに「九州橋立」の稱ある海の中道の白砂青松ミ、ピラミットのような志賀玄界の三葉山と相對するのである。即ち福岡はさうしても海の福岡と云はねばならぬ。

名にしおふ龍の都の跡さめて 細川幽齋

波をわけゆく海の中みち

波風をおさめて海の中ばまで 宗祇法師

道ある國や又も來て見む

地勢は概ね平坦で、東南は沃野遠く走つて、僅かに西公園、荒津山の一小丘が博多灣に

突出し、其餘勢は海を潜つて蓬萊山のような鶴來島を現出してゐる。古來の謠言に



海 の 中 の 道

「るやうだ、若しも福岡市を以て蝙蝠といふ動物に例へられるならば、其の生命を支ふ



る血管營養神經は電車であらう、又血管動脈線は河川であらう、電車には縦貫線一  
周線がある、縦貫線は九州電燈鐵道會社之れが經營に任じ、西今川橋を起點として  
東は宮崎八幡宮前まで延び、別に博多驛に通ずる支線もある、一周線は九州水力電氣  
會社の經營で、博多の全部及福岡の重要部分を一周し、博多驛前に會するものである、  
支線は西門通りから吉塚驛に達するのがある、河川では名高い那珂川と石堂川とが  
ある、那珂川は水清く砂は白い、遠く背振の山中から出て、蜿蜒八里二十五丁、博多の中  
央を貫いて灣に入る、石堂川は水清かで魚族の棲息に適し、寶満山より出で、多々良  
濱邊に注ぐまで六里二十五丁、俱に舟楫の便は尠くない。

△氣候 次に福岡市の氣候に付て一言したい、一年中の平均氣温は十四度九華氏  
五十八度八で、略ぼ神戸又は大阪の平均氣温に等しく、名古屋よりは〇度四、東京より  
は一度一高く、鹿児島に較ぶれば一度九、臺北に較ぶれば六度七低い、而して最高の温  
度は三十六度二、華氏九十七度二に昇り、最低の温度は氷點下五度三、華氏二十二度五  
に降りたることもあるが、九州北部の各地に較ぶれば、最高氣温に於て半度餘低く、最  
低氣温に於て一度餘高い、其較差は約二度で、年中氣温の變化に乏しく、一日中の變化

も亦之に準じて僅少である、即ち此一事を以て見るも、福岡は非常に良好なる氣候を  
有する地方と稱するを得るので、加之四季を通じて適度の降雨もあり、空氣は常に同  
等の濕潤を保ち、季節に依りて乾濕の變化も寡い、一年間の降水總量は千五百九十耗  
に止り、本邦中部に較ぶれば多少多く、九州地方の内では最も寡い方と云へる、而も九  
州南部地方の如く降雨の分布不規則でなく、又湿度は年平均七十七%餘を有し、冬季  
と夏季とに於ける差は十%を超えない、風は平均三米四で、常に南東風が卓越して吹  
くが、暴風は割合に寡く、日照強熾で、晴朗なる天氣が多い、之を以て夏季は固より多少  
の炎暑を訴ふるけれども、涼風絶えず甚しき酷熱を感じぬ、秋季は良好なる天氣打續  
き、空氣頗る清澄にして、心身自から爽快なるを覺え、太平洋の如く屢々強暴なる颱風  
の襲來するこもなく、火山地震の如き地變なきは亦甚だ稀で、一年間僅かに數回の微  
震を感じるに過ぎぬ、本市の如きは風土上至幸の地と云つてよいのである。

職業別戸數人口 (兼業ヲ含ム)

大正四年末



職業別	戸数	人口		計
		男	女	
農業	一六三	三九九	二九二	六九一
商業	九、〇二六	二二、〇一二	二〇、六三三	四二、六四五
工業	八、〇三三	一九、一九〇	一八、一一三	三七、三〇三
漁業	一四〇	二八四	一五一	四三五
鑛業	三	一二	三	一五
運輸業	二〇	六〇	三八	九八
雑業	三、一八四	九、一九七	八、六八五	一七、八八二
職業不詳及無職業	四、〇〇一	七、八五九	七、二六八	一五、一二七
合計	二四、五七〇	五九、〇一三	五五、一八三	一一四、一九六

年月は泪のさわぐ我が袖の

淡やこひのこまりなるらん

從二位 行

家

### 市街の色別

福岡市の中福岡市プロパーも稱すべきものは、博多と福岡とから成るこ云ふこは前にも説いた、那珂の清流、市の中央を南から北に貫いて博多灣に注ぐ處、其の左岸は福岡で右岸は博多だ、博多は應神帝の以前から既に津浦を開かれたこ云ふ、然しながら今の博多の町は天正年間豊太閤九州下向の折り、兵燹の跡を憐んで再興せられたものである、太宰府を起點として市街區劃の設計を立てた爲めにか、堅町は南北に横町は東西に、恰も碁盤の目のように整然たるものだ。

現在町の總數百四十八町掛筋(橋口町、麴屋町、掛町、綱場町、中島町は繁華の中心にして西門筋、古小路、金屋町、魚町、西町筋、西町藏本町、吳服町、筋横町、筋並に川端筋は之に次ぎ軒舗相接して人馬の往來絶ゆる時も無い有様である、明治四十三年九州沖繩八縣聯合共進會の當市に開かれた際、縣は巨額の土工費を投じて今の電車通りを開鑿し、福博電車會社は廣軌四條の電車軌道を敷いた、爾來福岡博多を一貫せる電車大通りは日にく軒舗改まつて掛町筋にも劣らぬ繁華な新市街を現出したのである。



博多を分つて岡部濱部の二大部分に區別するこゝが從來一種の色別法で之れは掛筋を中心として海岸の町々を濱部と稱し、反對の南方一帯の町々を岡部と呼んで居るのであるが、岡部は自から堅實な町家式氣分や格式門閥等を尊重する氣風の代名詞であつて、濱部の稱呼は問屋式男性的平民的氣分の代表語と云つてよいのである、要するに三魚市場と取引所を中心として一種の誇ある博多ッ子氣質を醸成したと云へるのである、岡部の町家式整然たる町々に對して濱部特に



掛筋の景

博多の海岸は貿易商店魚問屋材木問屋汽船問屋料理店等軒を連ね雜然たる繁榮を味ふこゝが出来るのである博多名所の一の川端新道は京で言うたら京極ではあるまいか、町幅は狭くても規模は小さくても滿街の裝飾恰かも勸工場を見るように、夜

は瓦斯電燈の光煌々として眩ばゆく四時不夜城の光景眼覺るばかりの華やかさである。

福岡は舊藩時代の城下で従つて封建時代の武家多く此の地は町數五十三町六町筋(簀子町大工町本町)並に橋口町は商厦軒を並べて繁榮の程度博多部に劣らず、其他天神町大名町因幡町等は宏壯の建物蝟集して一種の役所町を形成し、其他は今尚ほ士族屋敷の面影を存する山手風の閑靜な町々である、福岡縣廳を始め市役所貯金支局警察署裁判所其他の官衙學校等は多く茲にある、一ミロに言へば福岡の生命は官衙と學校及住宅にあり博多の生命は商工業にある、今一つ地理的に云へば博多の圈内なれど福岡市の中心點たる東中洲町は市の中央に位置する丈け近年突飛の繁華を告げた、市の遊樂機關たる劇場や活動寫眞館は多く此の區にある、今では區を分つて十四町目となつた程で中洲南、新券の三券番は此の町に一區劃をなし粹客細腰の集るもの多く、終夜絃聲嬌音を聞かぬこゝは無い、川端新道と相並んで博多名所の一に數へるこゝが出来やう、左に市内各町名を擧ぐれば(總數二百一町)

### △博多の部



△福岡の部

常盤町	京町	春日町	冷泉町	西濱町一丁目	柳町	鏡町	上金屋町	官内町	中市小路町	奥小路町	奈良屋町	行ノ町	妙樂寺新町	下魚町
清水町	大元町	幾世町	同二丁目	(自一丁目至四丁目)	大濱町	上金屋町	下金屋町	上濱口町	下市小路町	萱堂町	釜屋町	濱小路町	妙樂寺町	上對馬小路
泉町	元町	小比町	(自一丁目至四丁目)	(自一丁目至五丁目)	海濱町	中濱町	横濱町	中濱口町	中問町	倉所町	芥屋町	西方寺前町	古門戸町	中對馬小路
千鳥町	仲比町	惠比須町	(自一丁目至三丁目)	(自一丁目至三丁目)	石城町	下濱町	甘家町	下濱口町	中市小路町	上市小路町	古溪町	藏本町	綱本町	下對馬小路

上吳服町	上西町	上鱒町	出來町	下祇園町	楠田前町	竹若町	上小山町	御供所町	下桶屋町	下普賢堂町	西門町	上東町	上土居町	上新川端町	中島町
下吳服町	下西町	下鱒町	掛町	萬行寺前町	大乘寺前町	箔屋町	下小山町	上奧堂町	馬場新町	寺中町	蓮池町	下東町	中土居町	下新川端町	(自一丁目至十四丁目)
上魚町	上店屋町	上洲崎町	麴屋町	瓦町	社家町	上厨子町	上赤間町	中奧堂町	上辻堂町	金屋小路町	北船町	中小路町	下土居町	川端町	全南新地
中魚町	下店屋町	下洲崎町	博多橋口町	今熊町	上祇園町	下厨子町	下赤間町	下奧堂町	下辻堂町	上桶屋町	上普賢堂町	古小路町	片土居町	川口町	全向イ川端



天	上	須	藥	林	雁	西	濱	地	東	大	荒	東	西
神	名	崎	院	毛	林	職	行	行	唐	字	戸	唐	唐
町	島	裏	町	町	町	人	東	東	人	藥	町	町	町
因	下	船	紺	鐵	土	船	養	地	西	大	荒	西	西
幡	名	津	屋	砲	手	子	子	行	唐	字	戸	唐	唐
町	島	町	町	町	町	町	町	西	人	庄	村	人	人
大	須	鍛	東	藥	萬	吳	大	樹	浪	大	伊	浪	樹
名	崎	冶	小	研	服	工	工	木	人	字	崎	人	木
町	土	町	姓	町	町	町	町	屋	町	下	浦	町	屋
橋	手	町	町	町	町	町	町	町	町	警	浦	町	町
口	極	材	西	養	東	本	新	大	大	魚	西	大	大
町	樂	木	小	巴	職	職	大	圓	字	今	公	字	圓
極	寺	小	姓	町	人	人	工	寺	今	泉	園	今	寺
橋	口	姓	町	町	町	町	町	町	泉	町	園	泉	町
口	寺	町	町	町	町	町	町	町	町	町	園	町	町

以上は所謂福岡市プロバの町の有様であるが此外事実上の福岡市を説明せんとならば、勢ひ筥崎八幡社の所在地たる箱崎町東公園大學通りで名高い千代町住吉神社新柳町で有名な住吉町及び北筑軌道の起點としての西新町なごを度外視するこ

こは出來ない。

博多の掛筋を一直線に石堂橋を渡つた大通りを大學通りと稱するのであつて、旅館商家軒を連ねて醫科大學前から更らに箱崎町に通じ工科大學前に出で遠く香椎に至る國道と名島道とに分離するのである。

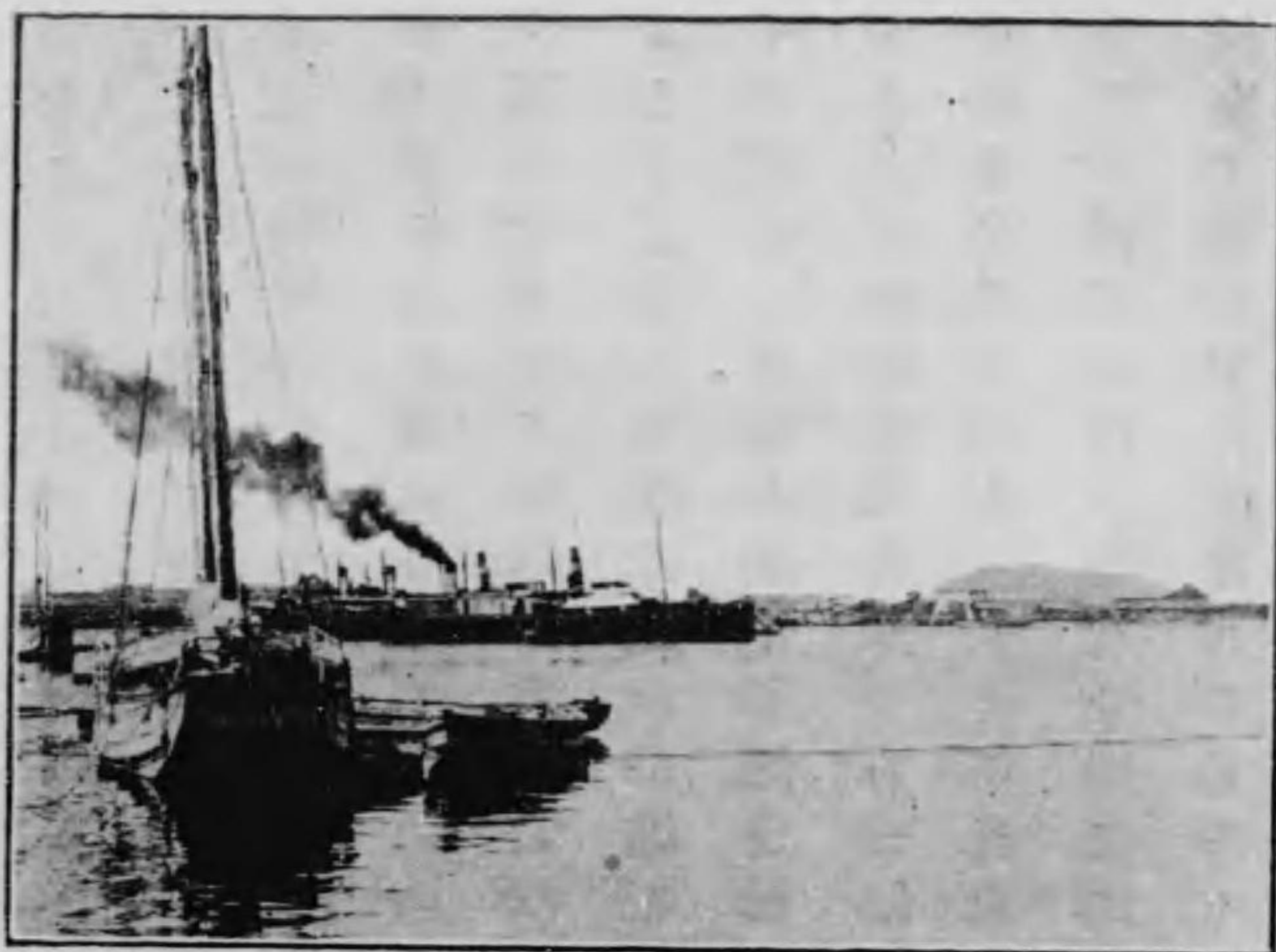
住吉町は福岡市の東南部に連接して殊に大字春吉の一區は西中洲寺町の外一番町から七番町迄整然たる市街地であつて主に清閑なる住宅地と商家とから形成せられて有名な新柳町遊廓に接するのである、特に住吉神社を中心とせる住吉通りは九水電車の大通りで近年頗りに市街地としての色彩を増した。

福岡部福博電車の終點今川橋を渡つた大通りは九水會社の經營になる北筑軌道の起點であつて此の大通り及び南方に併行して繁榮な大通りが即ち西新町である、福岡の町々に接續して人家稠密延々二哩の姪濱迄續いて居る、以上は即ち福岡市プロバの外廓とも稱すべきものであつて事實上今日の福岡市を形成する要部たるを失はぬものである。



## 福岡市と其港灣

福岡市の港灣云へば、實際上博多灣全部、即ち東は箱崎、名島、奈多、和臼の浦々に次いで、西戸崎、志賀島に北折し、西は伊崎、姪濱、横濱、今宿、今津、西の浦の浦々に至る。此沿岸線十八哩の間に包容せられたる、約二十五平方海里の一大海面を指すのであつて、何人の計算であるかは知らぬ。昔封建の時代に、若しも博多灣全部を埋め立て得るならば、丁度筑前五十二萬石丈の收穫を得るこの想像計算が傳へられて居る程である。而して此廣漠な一大灣内は全く我福岡市の事實上の領域であつて、前記沿岸の浦々は、夫れ夫れ二六時中獲物の斷ゆることのない、豊富な漁村有名な漁區なので、此水産物年額約壹百萬圓の大部分は間斷なく我福岡市に集中され、而して消化されて、確かに市繁榮の一要素を供給して居るのである。中にも一時大築港計畫で以て有名な西戸崎は、「海の中道」の北端にある。博多灣鐵道は此處を起點として、延々十五哩、四、白砂、青松の間を香椎に通じ、宇美に終る。此鐵道に依つて、山手數ヶ所の炭礦から西戸崎に運び出されて、更らに朝鮮其他へ輸出され、或は軍艦商船の燃料となる石炭丈けれども、年額四十



博多築港の景

萬噸を下らない。又スタンダード、オイル會社と共に、世界の二大石油會社と稱せらるるライジングサン石油會社の精油所及び輸送所は、此の西戸崎に置かれてあつて、遠く福岡市の海岸から眼の前に白く數個の大タンクが望見せらるゝのである。毎年南洋から輸入せらるゝ原油の額は約七拾萬圓を算し、此處で石油として一定の容器に入れられて、更らに西部日本各地に轉送せらるゝのである。而して博多港から西戸崎、志賀島、今津、宮の浦、西の浦、立界島等には、志賀島汽船及び浦田汽船の兩航路があつて、毎日十回以上ランチの往復がある。

おもひつゝいはねばいごころのみ

後深草院少將内侍



さわぐは袖のみなこなりけり

こひわぶる袖の湊のなみまくら

いく夜うきねの數つもるらん

前大納言 忠良

日暮れば袖のみなこを行く螢

光

俊

俗に博多港を稱せらるゝものは博多部の中央博多灣の一角に在る。地圖を開けば博多部の北方、凹字形の港灣が夫れだ。我國での津港中最も古い外國貿易港である。云ふことは前にも既に説いた處である。然るに徳川治世以來海港は年々土砂に埋められて船舶の出入も漸く不便となり、近代に至りては普通形汽船の碇泊にも差支へる。云ふ有様になつたが、一方には明治二十八年特別輸出入港の資格を與へられたので、福岡市民は明治三十一年資本金貳拾五萬圓の博多築港株式會社を起し、市の補助を得て、那珂川口から石堂川口に至る一帯の海岸線に面積二萬二千九百五十坪の繋船場を其周圍に四萬八千五百坪の荷揚場、市街宅地、並に道路敷地の埋立地を作くる。さういふ設計で工を起し、四十一年漸く工事成り、次で市で此築港一切を引繼だ、此總工


費約五拾萬圓最初の設計では大船舶を收容するの目的では無かつた爲め、規模は大ならず設備亦不充分ではあつたが、尙ほ且つ八百噸以下の船舶は優に内港に碇繋し得ることとなつて、船舶の荷役は從來に比べて、非常な便利且つ經濟的となつた。爾來博多港は壹岐、對馬を初じめ、九州北半部沿海航路船に對する航海の中心點となつて、貨客多くは博多港に集まり、去る明治三十八年には福岡市の命令航路として、博多港を起點として壹岐、對馬を経て朝鮮釜山に至る、月五回の往復定期航路をも開らく事となつた。市は爾來年額千五百圓乃至七千圓の補助を與へ、以來博多港對朝鮮の航路は漸次に發達して、年毎に貨物の取扱ひも増加し、現時は對馬汽船會社の天眞丸が此の航海に當り、釜山から更に鎮海灣まで航路を延べたのである。又一方に近年遠洋漁業の勃興に連れて、博多港を碇繋場とするトロール船及び鯨肉運搬船は二十餘隻に上り、年額約百五拾萬圓の漁獲物は一旦博多港に陸上せられて、一部は此地方の需要を充たし、一部は遠く京阪地方及び九州各地に轉送せらるゝので、左なきだに狭少な博多港は全く橋筒林立の有様で港は愈々益々狹隘を感ずる様になつた。茲に至つて博多港近時の繁榮に伴ふ築港設備の不完全は、又もや市内有力者を動かして大築



港計畫の輿論となり市出身者中の杉山茂丸氏市の有力者謀つて箱崎海岸から名島附近に至る間に大築港を出願して大正三年政府の許可を得爾來銳意港灣實測に従事し第一期工事に要する資本金參百萬圓の株式會社を設立して近く築港浚渫工事に着手する事となつた蓋し本築港の計畫豫定の如く進行するに於ては博多港の聲價は遙かに門司港を凌駕し再び淳仁天皇當時の如く西海一の良港と呼ばれるに至るであらう。

現今博多の港から各地に通ずる航路の主なるものを列舉すれば、

- 一、商船會社船 船數一艘 月三回寄港
- 寄港地は大坂神戸門司平戸佐世保長崎三角大川。
- 一、尼ヶ崎汽船 船數六艘 月十五回寄港
- 寄港地は大坂神戸多度津今治三ヶ濱下關唐津呼子伊萬里平戸佐世保長崎三角島原大川及び唐津佐世保長崎鹿兒島。
- 一、深川汽船 船數二艘 月六回寄港
- 寄港地は東京大坂神戸門司平戸佐世保長崎三角大川。



## 船鑛建土木 船山築木 五業用商品

小泉合名會社製品麻帆布九州一手販賣店  
帝國製麻株式會社製品特約販賣店  
大日本水道木管株式會社製品販賣代理店  
横濱アスファルト株式會社九州代理店  
日本建築用製紙株式會社製品販賣代理店  
日本アスベスト株式會社製品特約販賣店  
天幕、日覆、雨覆製作販賣  
アスファルト塗輔工事受負

### 幸田次兵衛商店

福支 岡店 市海 中岸 島通 町四 西丁 誥目  
(電話長二五二番)  
(一〇三八番)

アスファルト便利瓦



福岡市海岸通三丁目  
船舶鑛山工業用品  
塗料諸油カーバイド  
各種ロープ類卸販賣



旭商會

電話 七一五番  
振替口座 五二六六番

福岡市博多下洲崎町商會

臺灣鹽關東州鹽  
再製鹽特約販賣  
谷鹽元賣捌所

電話 五二六番  
振替口座 福岡四六五〇番

一、對馬運輸汽船 船數五艘 凡毎日一回寄港

寄港地は勝本、郷の浦、蘆邊、瀬戸、平戸及び對馬東西各港、釜山、鎮海灣。

一、九州汽船會社船 船數一艘 凡月二回寄港

寄港地は神戸、下關、唐津、長崎等。

一、秋田商會汽船 船數一艘 凡月五回寄港

寄港地は對馬、壹岐、各港、及朝鮮、釜山。

大正四年中に於ける博多港出入船舶は左の通りである。

博多港出入船舶 (大正四年中)

船舶種類	入 港		出 港		計	
	隻數	噸數	隻數	噸數	隻數	噸數
汽船	四、二五四	九一七、六一五	四、二四二	九一五、三三〇	八、四九六	一、八三二、九四五
帆船	八、二五八	二六一、三一三	九、二二六	二六〇、二二五	一七、四八四	五二一、五三八
計	一二、五一二	一、一七八、九二八	一三、四六八	一、一七五、五五五	二五、九八〇	二、三五四、四八三

福岡港を稱するのは、萬治二年から享和二年に掛けて、藩費を以て經營したものであ



る云ふのだ岬の大部分は即ち其當時に埋築したものである。明治三十三年資本金拾貳萬圓を以て福岡築港株式會社を創立し博多港同様市の補助金を得て、魚町海岸から港町海岸に掛けて、築港埋築工事に着手したが、成績思はしくない爲めに、後市で引受けることとなり、埋築區域を縮少して残工事を完成し、主として和船の碇繫場に供した。荒津山西公園の東方に、入江形をなす繫船場が即ちそれである。

蘆間なき泪の袖の湊にも

國 助

さはるは人のよるべなりけり

いかにせんもろこし船のよる方も

前大納言爲定

しらぬにさわぐ袖のみなごを

うさかりし唐土船もよるばかり

三 宮

袖の湊をあらふしらなみ

### 博多氣質と福岡氣質

人國記の著者は博多の習俗を論じて曰ふ、「筑前の風俗大體飾り多し——飾りなるが

故に終りには何事も成就せざるべし、西國には珍らしき華奢の國なり」云、筑前は云うても主として博多を指した言葉である。封建時代九州は都を距る西の果てであつた、毛深い荒男の熊襲の根據地であつた云ふ、強い觀念が都人士の頭に消へ無い時代に於て、獨り博多のみが著しい榮華の都であつた云ふ事は、其著者をして此の様な途徹も無い觀念を起さしめたのであらう。然しながら博多は果して飾氣多い土地柄であらうか、今では日本の主都たる東京も封建の世には江戸と呼ばれ、其の江戸の都が始めて武藏野の平野に開かれてから、彼是三百年、此の古い都の江戸よりもモット遠い、應神帝以來千七百年の間、博多は一時天下の商津として榮華の極みを盡した時代がある。三韓唐土との往來交易も頻繁であれば、内地諸國人士の出入りも激しかつた、此の如き激しい内外人の刺激の間に育てられ培はれた博多人士には、外交上或は交易上當時から多少の飾り氣も必要であつたらう、而しながら、夫れは恐らく一面觀であつて、全面觀では無い、千代の松原が千古松青ふして博多港の入江の波が無始より無限に濼々として打寄する光景は、恰かも一大水彩畫を見る様な淡々たる太平樂、寛々たる男性的の氣分である。博多人士に共通せる特長こそ、實に其の



造らず飾らざる淡然たる男性的氣分、平民的態度であらねばならぬ。所詮活馬の眼を抜く云ふ氣早い氣性が江戸ッ兒の氣性であるならば、博多ッ兒の氣性は淡如とした活鯛の刺身を口にするやうなものではなからうか。明日の米代は兎に角今日の快樂を妨げてはならぬ云ふ、漂輕な淡泊な氣性は、得て博多ッ兒以外に求める事は出来ない、ヤレ祇園だの、ヤレ『ドンタク』なぞ云ふ場合には、上下を擧つて共同の平民的愉快を取る貧しきものは之が爲に其資財を抛つこども意させないのである言葉を代へて云へば一切の階級の觀念は可成之れを避けて、思ふこみを言ひ言ふこみを言つてさんく、世間を押通る云ふ、平民的氣分六分に加ふるに出来るべき丈生活を樂しんで行く云ふ、享樂趣味四分云ふのが、恐らくは博多ッ兒の氣性であつて、此點より云へば所謂神田ッ兒の氣性に勝る事萬々であるかも知れない、博多人に共通な特色は全く此の社會の階級を超越した平民的氣性にあるので、之れは三百年前一時豊太閤直轄の所謂天下領として、附近の大名領に羽振りをきかした時の、氣分の感化が今日迄幾分傳へられたせいではあるまいか。

次に福岡の氣質に移つて見よう、博多は僅かに川一重の福岡の城下、今では博多も

# 福岡山本洋品店

標商登録  
 特許第 〇一七六號  
 昭和 八四七七六號

標商登録  
 特許第 〇一七六號  
 昭和 八四七七六號

特許第 〇一七六號  
 昭和 八四七七六號

特許第 〇一七六號  
 昭和 八四七七六號



# 和洋製菓商



本店

電話 二 三 一 二 番

博多古門戸町

支店

電話 一 二 八 四 番

同掛町新道角

福岡も同じ行政区劃の福岡市に云ふ一大圏内に包括されて天神橋西大橋には晝夜  
福博電車のべるの響きを聞かぬ事は無く、中島橋は一縣の中心點となつて、人馬の往  
來絡繹たる有様であるが、明治維新の前までは福岡の方那珂川畔の一帯は高い城壁  
に圍まれて、旅人の出入さへも遠慮勝ちであつた、福岡と博多とは當時或る意味に於  
て全然別世界とも云へたであらう。

博多が大古以來の商都であつたならば、福岡は黒田氏三百年間の城下であつた、大小  
の武臣多く城下に住んで、統一あり規律ある威儀堂々たる生活を送て來た丈けに、其  
地に住む町人に雖も、其の感化を受ける事が多く、博多の潑刺たる天領的氣分に引換  
へて、極めて質實であり剛健である、言を代へれば黒田如水以來、殊更に涵養せられた  
る素朴で律義で物堅い而して一種の霸氣を有する所謂黒田武士特有の精神が傳へ  
られたのである。現今に雖福岡人士が、一般に潑刺たる氣性の代りに嚴格な堅忍持  
久的一種の品格を有する所以であらう。

要するに博多人士は例へば火のやうなものであらう、物に觸れて焼き盡さねば止ま  
ぬのは博多ッ兒の氣性である、福岡人士は例へば水のやうなものであらう、物に觸



て浸潤せぬ事のないのは福岡ツ兒の特色である。僅かに川一重の博多と福岡、現今では一般に獨特な氣質薄らいで、多少相共通した點はある。云ふものゝ、尙此の獨特の氣質丈は何處やらに保たれて失はれる事はないのであつて、而して此の各特色ある二個の異なつた性格が相依り相助けて市の繁榮發展を助長しつゝあるのである。

### 市民の年中行事

古から磊落と陽氣な氣分の中に育つて、來た博多ツ兒を有する福岡市では他の都市に比して年中行事数が非常に多く、市民は毎年々々此の御祭り騒ぎの爲めに忙殺される。而して之れも亦た確かに我が福岡市の特色の一つである。就中博多山笠や松囃子は博多人の意氣と特性との表象として他地方人へ見せたい一種の誇りである。

次に重に地方に特有な行事の數々を列挙するこゝとした。

△玉競(たませり) 筥崎八幡宮では毎年正月三日箱崎町及び馬出の若者連が蓬頭赤裸になつて岡部濱部の兩組に分れ、神殿に詣で、神寶の木玉を受け夫れを捧げ

て海中に浸し陸に上つた時若者の一人が玉を取つて地に投げる。此の時喊聲四方に起つて東西兩軍の若者は死力を盡して、玉を奪ひ合ふのであるがこれが即ち玉競である。此の時衆中健闘無雙の一人が玉を奪つて神殿に献ずれば戦ひは茲に止むのであつて、兩軍の内其力闘の勇者を出した方の組は勝利を得たるものとして凱歌を奏し之を以て其年の幸福の徴とするのである。極寒の正月三日である、赤裸で而もその上に豫め汲み置かれた水は遠慮なくぶつかけるのである。「勇壯」そのもの云つて好い。因みに此の木玉は約六百年前箱崎の住民山口某一木某が海中から得て八幡宮に献納したものと傳へられる。従つて毎年の玉競には此の兩家の子孫が神社と玉競連との間に立つて此の木玉を受授するの慣例があるのである。

△松囃子 是一名「ドンタク」も云つて博多年中行事中の最も重なる一つに數へるもので其起源は不明であるが文祿四年小早川秀秋が名島の居城にて松囃子を見るこの記録が宗湛日記にある所から見ると之よりも以前であることは確實である。其後寛永十九年よりは毎年々々新年の嘉例として正月十五日に執り行つた市民が藩公に對する年始の慶禮に替へたものである。法式は雇人を惠美須大黒福祿壽の



三福神の形に作り馬乗にて押出し、又假闇に車を付け舞衣したる小童を乗せ諸物鳴物を以て練り歩くのである。一度禁止せられたけれども尚ほ例年紀元節には依然其習慣丈けを存して稚兒及び惠比須、大黒、福祿壽の三福神を始め町々では凡て之に準じて曳物手踊等を拵らへ、市中を練廻はり男は女に女は男に假裝して、全市一大歡樂の巷に變じ、其雜踏は却つて以前の松囃子にも勝るやうになつた。日露戦争後毎年三月十日の陸軍紀念日を以て戦病死者の招魂祭を行はせらるゝに當り、松囃子は其餘興さなり爾來毎年三月十日十一日の兩日執り行ふ習慣になつた。

#### △博多山笠

毎年七月十五日博多櫛田神社で催される祇園祭の神事の一つだ。

九州軍記には山笠の發端を永享四年の壬子に始つたと言ふが、一説には往古大嘗祭の御會式に標山と稱するものありて、博多山笠は之を摸したるものとも稱されし。兎に角其起りは随分遠い昔の事であらう。維新前の山笠は高さ三丈にも餘つた山車に精密美麗なる作り物、主に歴史的傳説に關するものを作つて十五日の朝には博多の當番町内血氣の若者で擔で縣社櫛田神社の正門から市中に繰出し勇しい音頭と掛聲で各組競争の態を執つて、博多の要部を一巡して又も櫛田社内に歸還

する血氣な博多ッ兒の活動振りは山笠の美しい作り物と共に博多人が誇りとする處であつたが、明治になつて以來文明の代表物たる電信や電話線が市中を縦横するやうになつて此の由緒深い山笠も其上半部の作り物は別に据山として當番の各町へ備へる丈けで、其下半部丈けを擔ぎ廻はるこころなり漸く其形容のみを存し、昔の純粹な華々敷さを見るこころの出来ぬのは惜しい事であることは云へ、現在六木の山笠が出来て追山當日の十五日の朝、老幼を問はず男と云ふ男が揃ひの衣裳で擔ぎ廻る勇ましさは他に見られるものでない。

#### △流勸頂

八月二十四日には大濱海岸で流勸頂の催しがある。各種の作り物を備へて大施餓鬼の催しをするのであるが、善男善女の集るもの非常に多く當夜大濱一帯は人の波に化す。

#### △放生會

九月十二日から十八日にかけて宮崎八幡宮では秋季大祭として放生會の催しがある。此の祭典中箱崎海岸及び神苑一帯には露店見世物軒を並べて時ならなくに雜踏の市街に化す。此の祭には「幕出」を云つて、博多町民の相當な家からは、全家擧つて家財道具から衣裳までも持出して、濱崎海岸で遊宴する。



△海戦記念會 五月二十七日には日本海々戰の紀念日である元寇の殲滅敵國降伏の因縁に依て宮崎八幡神苑内で毎年紀念會を催される此の日縣下の各地より十數萬の參拜者ある計りでは無く佐世保軍港は毎年驅逐隊を派遣して紀念會の盛況を添へ紀念講演會なきが催さるゝこゝまなつた。

- △招魂祭 三月十日
  - △軍旗祭 八月十七日
  - △難祭 三月十日
  - △兜祝祭 五月二十七日
  - △祇園祭 自七月十二日至十五日間
  - △盆祭 自八月十三日至十五日間
  - △精靈流祭 八月十三日
  - △奴婢出替期 二月二日
- 其他主なる祭禮及び氏神祭を示せば左の如し。
- △官幣大社宮崎宮 箱崎町 一月三日 玉競祭

- △同 同 八月十五日 大祭
- △同 同 自十月十二日至十八日間 放生會
- △同 香椎村 十月二十九日 追儺
- △官幣中社太宰府神社 太宰府 一月七日 御衣替
- △同 同 二月二十五日 御衣替
- △同 同 八月二十五日 大祭
- △同 同 九月二十五日 御衣替
- △官幣小社住吉神社 住吉町 三月七日 御田植祭
- △同 同 七月三十一日 夏越祭
- △同 同 十月十三日 宮日祭
- △縣社櫛田神社 祇園町 六月十五日 例祭
- △同 水鏡天滿宮 天神町 九月二十五日 例祭
- △同 同 六月二十五日 御誕生祭
- △同 光雲神社 西公園 四月二十日



△縣社警固神社	小烏馬場	十月十九日	
△同 烏飼八幡宮	烏飼村	十月十九日	
△郷社愛宕神社	姪濱町	六月十四日	
△同 若宮神社	大字今泉	九月十三日	
△無格社若八幡宮	出來町	一月十一日	
△村社下照姫神社(吉祥天)	瓦町	七月三十一日	
△無格社辨財天	名島	七月十九日	
△同 綱敷天神	綱場町	一月七日	
△同 同	同	七月二十五日	
△同 惠比須萬四郎神社	中濱口町	七月二十日	
△同 惠比須神社	鰯町	七月二十日	
△同 豐國神社	奈良屋町	七月二十日	
△同 沖濱惠比須神社	大濱町	七月二十日	
△同 鏡天神	下新川端町	三月二十五日	大祭

△同 同	同	七月二十五日	夏祭
△村社紅葉八幡宮	西新町皿山	十日十九日	
△無格社立歸天満宮	西公園下谷町	三月二十五日	
△同 天満宮	下警固	三月二十五日	
△村社天満宮	厩谷	三月二十五日	

### 名物と名産

氣早な大雑把な博多ッ兒の國にも、天才的の美術家や、工藝家は生れるものだ。博多の一面觀は天才の國である。随つて我市には美術工藝的製産品が多い。美術品としての博多織、博多人形、博多絞、高取焼の如きは、將に博多ッ兒の天才的方面を天下に紹介するものでは無からうか。博多ミ云へば直ぐにも聯想する博多織は、確かに福岡市の名産の随一であらう。足利時代嘉禎年間、滿田彌三右衛門ミ云ふ人が唐より傳へて創製したもので、更に天文年中、竹若伊右衛門が一種の新機軸を出したミ云ふ事だ。藍は藍より出て、藍よりも青い、唐より受けた博多織が、夙に日本絹織物の重要品とな



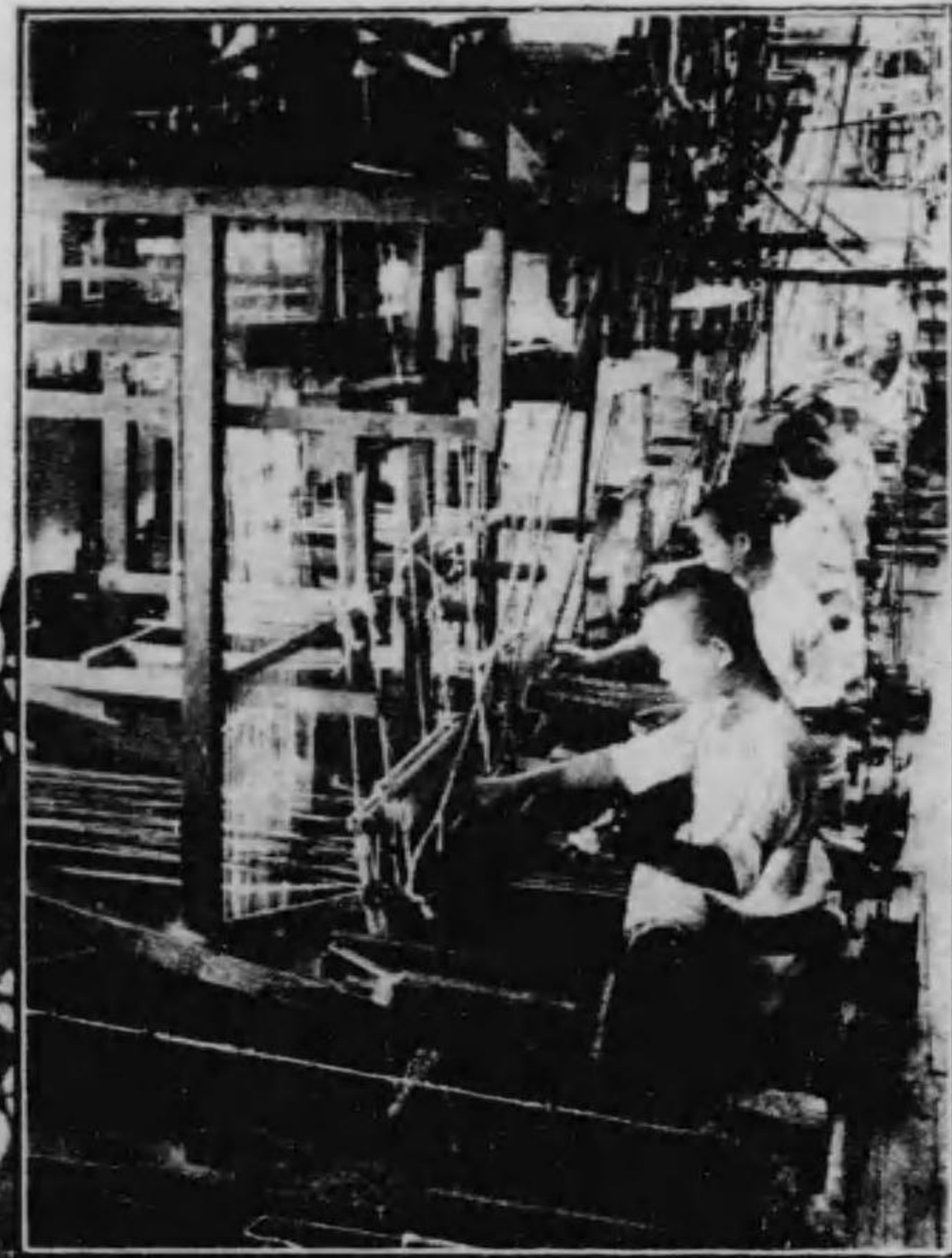
# 水焚 紀の國家

博多川端町

電話三〇五番

三

り、教を受けた唐にも運び出される、其後の隆盛は博多ツ兒の美術的天才的性質を忘れてはならない證憑であらう、近年博多織を



博多織製工場

模倣する京の西陣、加賀の米澤、桐生、八王寺等、孰れも市場で競争をする様になった結果、博多織の生産状態に及ぼす影響は尠くは



博多織陳列



# 久

油醬久上

名譽金牌  
名譽銀牌  
一等賞金牌  
優等賞

安政二年創業  
商號 楠屋

釀造元  
町屋紺市岡福  
吉久村松

標商錄登

# 生の松

各清酒品評會ニ於テ  
優等名譽金牌受領

福岡縣糟屋郡箱崎町  
釀造元 三島米吉  
電話一九二〇番

標商錄登







博多舊柳町

新三浦本店

電話五六一番

すき焼

御料理

水焚

京都市二條川東石原町三三二

京都支店

電話一二九五番

無いが然し博多織には地合に於ても技術に於ても前記各絹産地の企及する事の出



博多人形陳列

した者であるとも云はれてゐる。孰にしても博多人形の歴史は沿革する處甚だ古

來ない、特長あるのみならず、帶地類は古來獨特の譽がある、博多織の聲價衰へざる所以であらう。博多人形の聲價は近年頓に揚て、外遊旅人の必ず一品を購はぬは稀だ、彫刻の巧妙さ體裁の優美さ著色の鮮明さは、本品の特色であらう、博多人形は慶長年間長政公の御用職人正木宗七に依て創製せられた、人丸人形並に幼稚な玩弄具が、其の嚆矢であることは一般に傳られる説であるが、一説には安政年中四代目正木宗七、同時代の七輪師中の子安兵衛の次男吉兵衛なるものが、木彫を以て有名な牧牛軒利治に其の技術を受けて、創業



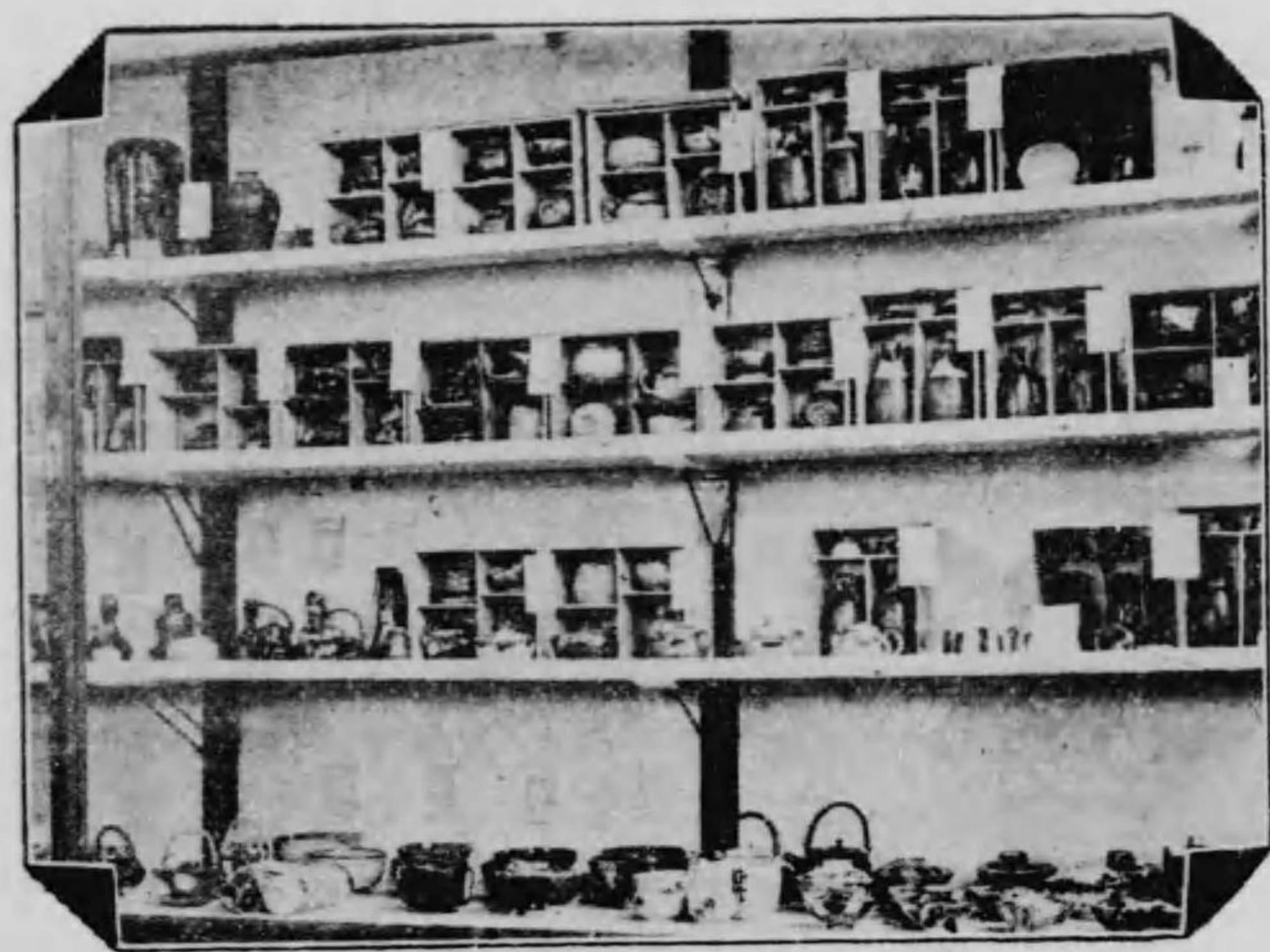
い、明治の晩年以後、學術標本、歴史、地理的、模型人型に應用せられてから、名聲愈々高く  
なり、臺灣、朝鮮、歐米諸國等への輸出さへもある  
やうになつた。博多絞は又博多織と並んで往昔  
から博多名産の一である。傳説の傳ふる所では、  
天智天皇筑前に行幸の際、供奉の女官の纏うた  
衣服の模様が、當時の博多人に強ひ印象を與へ、  
之れに倣うて案出したものこそ、今の博多絞の  
始めである。云ふことだ。爾來改良に改良を重ねて今日に至り、地質の堅牢と染方の確實とは  
數多い模倣品の眞似し得ない處ではあるが、近  
來大和絞、其他安値品の跋扈に連れて、長い歴  
史を持った本場の發展思しからざるも、尙ほ一  
種の美術的特色を發揮して居る。



博多人形製造成實況

高取焼は黒田長

政公征韓の歸途、朝鮮から名工を連れ來り、製陶に従事せしめたのが、其の濫觴である  
云ふ。爾來三百年此の業一時は殆んき廢滅  
に類せんとした事もあつたが、明治二十三年  
に至り、森長三郎云ふ人之を再興し、古風の  
製法に改良を加へてから、高取焼の名聲は漸  
く聞えるやうになつた。此外福岡市の特産  
品云へば、酒、醬油、筑前琵琶、農具、及物類、文具、  
素焼物、荷車、其他の車類、家具類、絹綿交織物、箱  
崎縞、曲物等がある。此中酒、醬油は、徳川時代か  
ら盛んであつて、近來は品質の點に於て、特に  
長足の進歩を示し、朝鮮、滿洲、臺灣を初め、昨年  
頃からは京阪地方迄も仕向けらるゝ端緒を  
開いた。農具類の中、先は博多、先は稱せら



高取焼陳列

れて、既に定評があり、及物類の中、鉢は博多、鉢と呼ばれ、天文、中唐土から直接傳來せら



れた製法である。博多へられる。文具は博多港が唐土從來の要津であつた關係上、昔から全國に聞えて居つて、文祿年中豊公名護屋陣の折、博多の町人某なるもの、筑紫筆を献上した。云ふ傳説がある。素焼物は世に博多七輪として名高く、荷車類は、明治十年の戦争當時から聞え、曲物類は箱崎のツギ箱として有名だ。今此等我福岡市の工藝品の中特産物と稱せらるゝものゝみの戸數、産額、及價格を表に依つて示して置く。

博多帶しめ筑前絞り歩む姿が柳腰

福岡市特産物

(大正四年中)

種別	製造戸數	産高	價格
博多織	一四九戸	一一八、七八〇本	四三二、三〇〇円
博多絞	五四	二四、〇〇〇	四八、〇〇〇
箱崎縞	二二	五六、四九〇	六七、〇〇〇
博多人形	三五	一六四、五五〇 <small>ナ</small>	五八、〇〇〇
高取焼物	六	五二、八八〇	六四、四九〇
素焼物	二六	三八五、五〇〇	三四、五二〇

種別	製造戸數	産高	價格
家具	五二	四四、七五〇	一二六、二五〇
農具	一二	四七一、三五六	九八、一三一
刃物	一四	四五、〇〇〇	九、〇〇〇
諸物	四〇	五、二三〇	一〇四、七四〇
曲物	三〇	一〇六、〇〇〇	二一、六二〇
文具	一六	二、八八八、〇〇〇	一〇三、〇六〇
琵琶	一五	二、〇〇〇	二七、〇〇〇
酒	一四	一三、二九〇 <small>石</small>	三七九、五〇〇
醬油	二一	一三、〇〇〇	二一三、〇〇〇

飲食物の名物を云へば、長崎のカステイラ、熊本の朝鮮餠、佐賀の丸ボーロ、岡山の黍團子は天下に名高い。其地々々の名産であるが、之にも比すべき人口に膾炙した名物としては、雞卵素麵、罐詰儀助煮、黒門飴、石堂飴、行當り餅、葛素麵、石堂醬油、博多灣煎餅、仁和煎餅を上げねばならぬ。此中仁和煎餅は、有名な博多仁和加に因んで作へた。仁和加師の用ひる半面形のせんべいである。其形状の珍奇な處から、御土産として兒童を喜ばせるに足る。雞卵素麵は、藩政時代藩公江戸上りの折りには、將軍家への御土産品



中に加へられた云ふ程名高い名物の一つである。雞卵の黄味を以て製つた素麵云ふよりも寧ろ優等の菓子も云つたがよい、食して風味は宜しいけれど、價は随うて高いのは、同品の賣行名聲に伴はざる所以であらう、此の外近時博多堅町から出るカルシウム泉の如き、藥用靈泉として稍名聲を挙げつゝある未知數ではあれど又名物の一に數へ得るであらう。

### 過去現在の市政と市民の負擔

封建時代福岡博多の行政は、町奉行及年行司に依つて執られて來た、然らば此年行司云ふ制度は、何時頃から始まつたであらうか、古史を按ずるに、齊明天皇の七年、百濟の乞ひによりて、筑前國朝倉の木の丸殿に行幸があつた、其の御途すがら博多にも行啓あらせられた、其時既に年行司云ふ役號があつた、傳へられる之を以て見れば、年行司云ふのは頗る起源が遠いのである。

足利尊氏天下の政權を握つた時には、年行司は、大年寄と呼んで、人員は四人であつた、戰國時代大友、大内の兩氏が、博多を分領した時になつて、再び年行司云ふことに名

宮内省御買品

博多特産

高尚  
優美

葛そとめん

御進物用適品

銃砲、火薬類  
獵具一切

卸小賣

福岡市下新川端町

博多銃砲店

電話二三二番 口座二八六八番



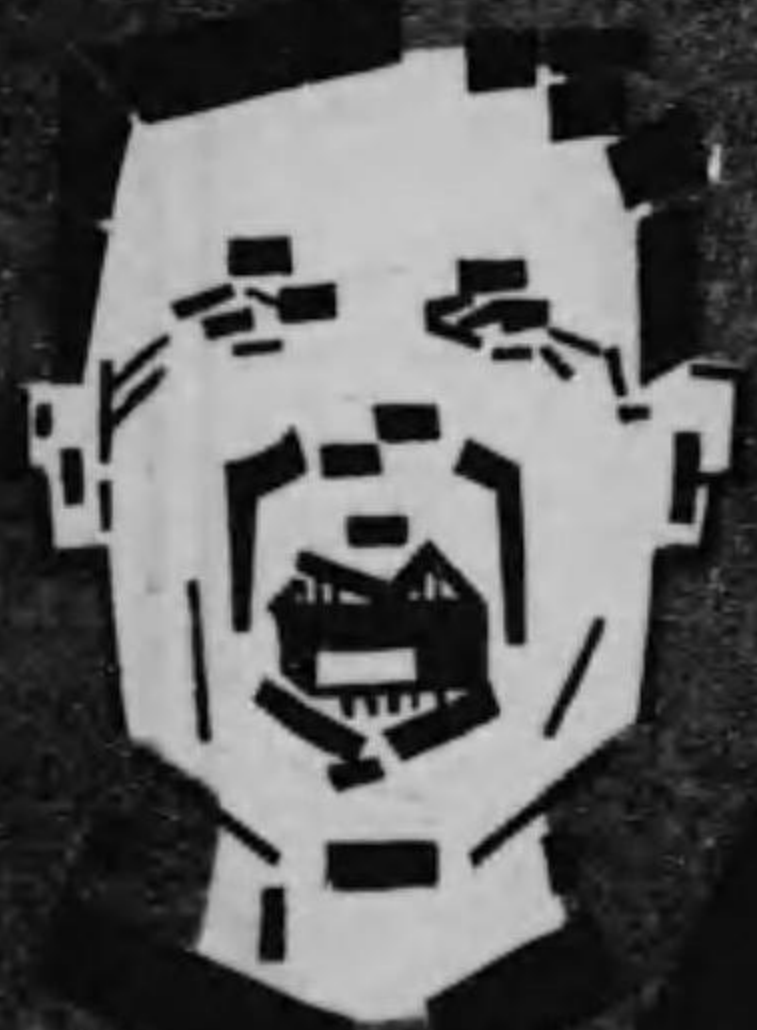
各大学病院御用



# カルシウム泉

全国有名薬店にあり  
(説明書進呈)

最近発見の病源治療薬として  
各博士達が推奨せらるゝものせし  
試してみてもたいさう。殊に肺病患者の  
如き内臓疾患には驚くばかり  
卓効を顕はすのであります



多博  
會商紫筑

いさだてし定指と

二五一話電

## 箱崎編ニ清水紺

製造元 筑前箱崎町

### ヨ 清水商店

電話一九五〇番  
振替貯金口座二二番

### 川 川野屋呉服店

福岡市本町

電話四五九番



TRADE MARK



製造 九州正宗 磯野鋤先 和洋農具 銅像銅器 鍋釜鑄造 販賣

鑄造工場ノ一部



筑前博多上土居町

磯野七平鑄造所

長電貳番・振福七番

最新 流行

高 等 履 物 東 京 兩 全

さかゝる心や履物店

博多新道

電話一六六四番





商標 登録  
 各種清涼飲料水及果實蜜製  
**合資社會三帆屋**  
 電話九〇番 振替福岡二四六番  
 營業所 福岡市西町一九二番地

三帆シトロン ● 三帆子ルー

**三帆サイダー**

ブドウサイダー ● ラウチムタン

石英水銀電燈用水殺菌器應用

四〇

福岡市通町黒門

**春木本店**

電話一五三〇番  
 振替福岡二四〇五番

**蒸氣應用飴製造業**

門司市明治町二丁目

**春木分工場**

電話六八七番  
 振替福岡七九四八番

銘酒 **花關**

ハナノセキ

醸造元

福岡市船町二十四番地

**許斐商店**

電話貳百拾五番  
 振替口座福岡三九番

福岡市外八幡村平尾

**福岡牧場**

福岡市船町

福岡牧場牛乳販賣部

電話千〇八番

純良 **牛乳**

小兒牛乳

朝鮮釜山港南濱町一丁目

**許斐支店**

電話四二一番・振替口座京城六二八番

**鹽**

大日本鹽業株式會社代理店  
 大倉組青島鹽一手販賣店  
 三井物産輸入鹽一手販賣店  
 再製鹽製造販賣

**絶影島工場**

電話十二番

四一



登 録 商 標



福岡市外馬出  
醸造元 箱島甚一郎

登 録 商 標



福岡市橋口町  
醸造元 中尾卯作

前が替つて、双方六人宛を置いて、博多居住民の行政を掌つて居た、次で豊太閣の博多再興、黒田氏の筑前入國、當時迄の間は、治者の施政方針が變る毎に、年行司の員數權限にも屢々變革はあつたが、黒田氏藩政の基礎定まつて、諸政大に舉つた時から、福岡市政の最高機關は、町奉行であつて、此町奉行は人員二名、寺社奉行兼務の慣例で、郡奉行の上席であつた、其配下には吟味役、諸願係二名、町方附約二十名、奉行所吏員頭取三名、頭取格四名ありの役員が附屬して居つたのである、即ち此時代に於て、年行司の制度も愈々確立して、年番所、或は年行司役場等も出來、各町に年寄及年寄助役を置き、町奉行は市中での名望家を選んで、年行司に任じ、其任務は町奉行の指圖を受けて、其區域内の宗旨改め、諸公用、諸納金、夜廻り、老幼孤兒の救濟等、町人一統の行政事務を司つて來た、而して此名譽ある福岡市最終の町奉行は、福屋等、衣非安六郎の兩氏であつた。

明治の代になつてから、福岡の年行司は本役一人、助役二人と云ふ定員に減じたが、同四年に至りて、大年寄、中年寄、改稱して四名を置いた、同十一月始めて市民の戶籍編成せらるゝに至り、茲に又も改稱して正副戸長となり、同五年には戶籍編成の事業終りを告げたのを機會として、筑前全國を三十二區に分つた、此の時今の福岡市は、福岡



部を第一區博多部を第二第三の兩區に分つて、戸長、副戸長の制を設けた。維新以後數年の間は政府でも諸政整はなかつた爲めか、制令は幾様にも改められ、殆ん朝令暮改の有様であつた。我が福岡市の行政方法も、又爾來幾度か改められて、或は曩きの三區制を分つて、二十餘小區となした事もある、更らに小區を合併して、四小區となつた。ここもあつた。行政當事者の名稱の如きも、年行司より正副戸長、又は戸長手傳なき改められた。維新以後の年行司は松下久兵衛、深見甚三郎、山崎藤四郎、武田六平、内海善兵衛の諸氏であつて、千餘年の歴史を持つた年行司の名稱も、之等の諸氏に依て、光榮ある終りを告げたのである。

明治十一年始めて福岡博多を統一した福岡區なるものが出来、其の調所を區役所と改めて、區長は民選に依つて定めらるゝ事となつたが、現代の福岡市の礎は、此の時から成つた。云うても差支はあるまい。明治十四年戸長は一時官選となつたが、同十二年市町村制の敷かるゝに及んで、福岡區は改まつて、福岡市となつた。其區域は舊那珂郡春吉村の内東中洲七軒屋裏、馬場川添、濱新地、同郡犬飼村の内出来町、同郡堅糟村の内石堂川下、早良郡鳥飼村の内地行東町、同西町、榊木屋町、新大工町、西町等の郡地を

裂いて市に併はせ、區役所は市役所と改まるゝ共に、區長は市長となり、助役、參事、會員、收入役の役制も定まつて、市民の選舉に待つ事となり、茲に福岡市の形體は出来た。



福岡市役所

爾來日本の國政西漸、福岡の地勢的優勝の位置は、相待つて驚くべき發達を促がし、市の行政も時々に進んで來た。大正五年には筑紫郡警固村を合併し、大正四年には豊富村大字豊富を市に併せて、今では行政區劃上市内の人口十一萬四千百九十六人、戸數一萬四千六百六十七戸、町數二百〇一町(大正四年末)市には

市長、助役、收入役の外、左表の通り市吏員を置き、市内各町には總計二百十四人の町總代があり、市參事會員は定員六名、選舉區は福岡博多の二區に分れて居つて、代議士一名、縣會議員二名、市會議員三十六名の定員で、専ら市行政の遺憾無きを期しつゝあ



る、以下明治維新以來の歴代市長、助役、収入役及市會正副議長、及現在市吏員數を掲ぐれば、

市長

上任年月	退職年月	在職年數	氏名
明治二十二年五月	明治二十五年十一月	三年六箇月	山中立木
同 二十六年一月	同 二十七年十二月	二年	磯野七平
同 二十八年五月	同 三十二年七月	四年二箇月	奥山亨
同 三十二年八月	同 三十八年八月	六年	松下眞美
同 三十八年九月	大正三年七月	八年五箇月	佐藤平太郎
大正三年十一月	在職中		井手佐三郎

助役

上任年月	退職年月	在職年數	氏名
明治二十二年六月	明治二十七年八月	五年二箇月	鷹取甚橋

収入役

同 二十七年八月	同 二十九年三月	一年五箇月	濱田九郎
同 二十九年四月	大正三年五月	十八箇年	小野直路
同 四十三年十月	在職中		秦傳次郎

市會議長

上任年月	退職年月	在職年數	氏名
明治二十二年六月	明治二十七年八月	五年二箇月	濱田九郎
同 二十七年十月	同 三十九年十一月	十二年	浦江凡夫
同 三十九年十一月	在職中		鶴原洗太郎

當選年月	退職年月	在職期間	氏名
明治二十二年四月	明治二十七年十二月	五年九箇月	不破國雄
同 二十八年一月	同 二十八年五月	五箇月	小野新路



當選年月	退職年月	在職期間	氏名
明治二十八年五月	明治三十七年四月	九年 簡	不破 國雄
同 三十七年五月	同 三十八年十二月	一年 八箇月	香江 誠
同 三十九年一月	同 四十四年四月	四年 四箇月	遠藤 甚藏
同 四十三年六月	同 四十四年十二月	一年 七箇月	石村 虎吉
大正元年一月	大正二年四月	一年 四箇月	高島 習
同 二年五月	在職中		岩永 左八

市會副議長

當選年月	退職年月	在職期間	氏名
明治二十二年四月	明治二十二年十二月	九年 簡	丸田 重雄
同 二十三年一月	同 二十七年十二月	五年 簡	小野 新路
同 二十八年一月	同 二十八年四月	四年 簡	山路 重雄
同 二十八年五月	同 二十八年五月	一年 簡	不破 國雄

當選年月	退職年月	在職期間	氏名
同 二十八年五月	同 三十一年十二月	三年 八箇月	大野 未來
同 三十二年一月	同 三十五年十月	三年 十箇月	丹增 良
同 三十六年一月	同 三十八年十二月	三年 簡	遠藤 甚藏
同 三十九年一月	同 四十年十二月	三年 簡	柴田 良之助
同 四十一年一月	同 四十二年十二月	三年 簡	溝部 信孝
同 四十三年一月	同 四十三年十二月	一年 簡	武藤 勝平
同 四十四年一月	同 四十四年十二月	一年 簡	太田 太兵衛
同 四十五年一月	大正二年四月	一年 四箇月	有吉 久兵衛
大正二年五月	在職中		渡邊 綱三郎

福岡市役所吏員現在數 市長一、助役一、收入役一、(庶務係)書記五、雇一、(兵事係)書記三、(戶籍係)書記三、(衛生係)書記二、(掃除係)監督長一、監督一、巡視九、(學務係)書記三、(商工係)書記四、(稅務係)書記二、(會計係)書記七、雇三、(水道部)技師長一、技師一、書記六、雇四、技師七、助手四。

次に福岡市累年の歳入、歳出及び市民の負擔率を表で示せば、左の通りである。



福岡市歳出入決算と市民負擔率

年次	決算		平均一戸負擔額	平均一人負擔額
	歳入	歳出		
明治二十二年	一四、一二九	一三、九七一	一、四八〇	二、二七〇
同三十一年	四〇、五六四	三一、〇四九	三、一五一	三、一八
同四十一年	三四五、〇一一	二七六、四二〇	二四、九四八	三、五六六
大正元年	三五九、一八七	三四〇、四八九	二六、二二八	三、六四一
同四年	三二五、六二五	三二三、〇〇六	二二、〇二三	二、八二九

以上は即ち市民が福岡市なる自治體を經營するに要する負擔であるが、更に之を一般的に考へて見れば市民の負擔する税金は云ふ迄もなく、國稅、縣稅、市稅の三種である。而して之は市民の生産能力を吟味する好箇の材料であるから、煩を厭はず數字を上げる事とする。

△地租 は大正四年度の總額金六萬參千拾圓で、之を細別すれば、田租千七百五拾壹圓、畑租參百貳圓、宅地租六萬六千八百八拾四圓、雜地租貳百七拾參圓。

△營業稅

大正四年度の決定額は、總計金拾萬五千參拾參圓で、其細目を上げる。

業種別	法人稅額	人員	個人稅額	人員
物品販賣業	三、三四四	一七	三八、〇一八	一、〇六八
銀行業	一二、三六三	五	七、三九〇	七六
金錢貸付業	四五〇	四	一四	一
物品貸付業	一三、四七一	七	五、四四〇	一二〇
製造業	九三	一	三五一	一四
印刷業			一五五	五
寫眞業			二一三	六
運送業	二六〇	一		
倉庫業	八、八〇七	一		
鐵道業	一、三二八	一	一、六一七	二六
請負業	一九三	一	九〇七	三八
席貸業			三、三四九	五六
料理店業				



△所得税 大正四年度の第一、二種決定額總額金拾萬百拾參圓、人員五十八人、第三種は左表の通りである。

業種別	法人税額	人	個人税額	人
旅人宿業			二、一二〇	三九
周旋業			二〇六	一七
代理業			二六	一
仲立業			八三	五
問屋業	一、四九六		三、三三九	七〇
計	四一、八〇五	四三	六三、二二八	一、五四二

所得高	税額	人	員
千圓以下	二二、七三〇		二、二一〇
貳千圓以下	一六、六五〇		四九一
參千圓以下	一一、一二七		一六三
五千圓以下	一二、三二二		一〇一

△縣税 大正四年度納税額合計拾貳萬八千五百貳拾五圓で、科目別人員は左の通りである。

科目別	税額	人	員
七千圓以下	五、三三九		三八
壹萬圓以下	七、一三八		三一
壹萬五千圓以下	六、三八二		一八
貳萬圓以下	一、三七七		一
參萬圓以下	一、九五六		三
七萬圓以下	七、一四二		一
計	九二、一六三		三、〇五七

科目別	税額	人	員
營業種別	一八、四七四		四、三三七
雜種稅	六八、九八八		七、六八一
戶數割稅	一四、九九三		一四、四〇六
鑛業附加稅	二七		九



科目別	税額	人員
取引所營業追加税	四三三	一一
賣藥税追加税	一九	九二
所得税附加税	六、三七九	三、〇六一
營業税附加税	一〇、三五九	一、六六四
地租	八、八五三	六、七四七
計	一二八、五二五	三八、〇〇八

△市税 大正四年度納税額合計金貳拾六萬八千六百六拾七圓を算する、即ち

科目別	税額	人員
營業	一八、八八一	四、三三七
雜種營業	七一、四五七	七、六八一
戸數	一一一、二八二	一四、四〇六
地價	五、八八二	六、七四七

國稅營業割	所得割	賣藥營業割	臨時取引所營業割	計
二五、二一〇	三五、四八九	三三	四三三	二六八、六六七
一、六六四	三、〇三八	九二	一一	三七、九七六

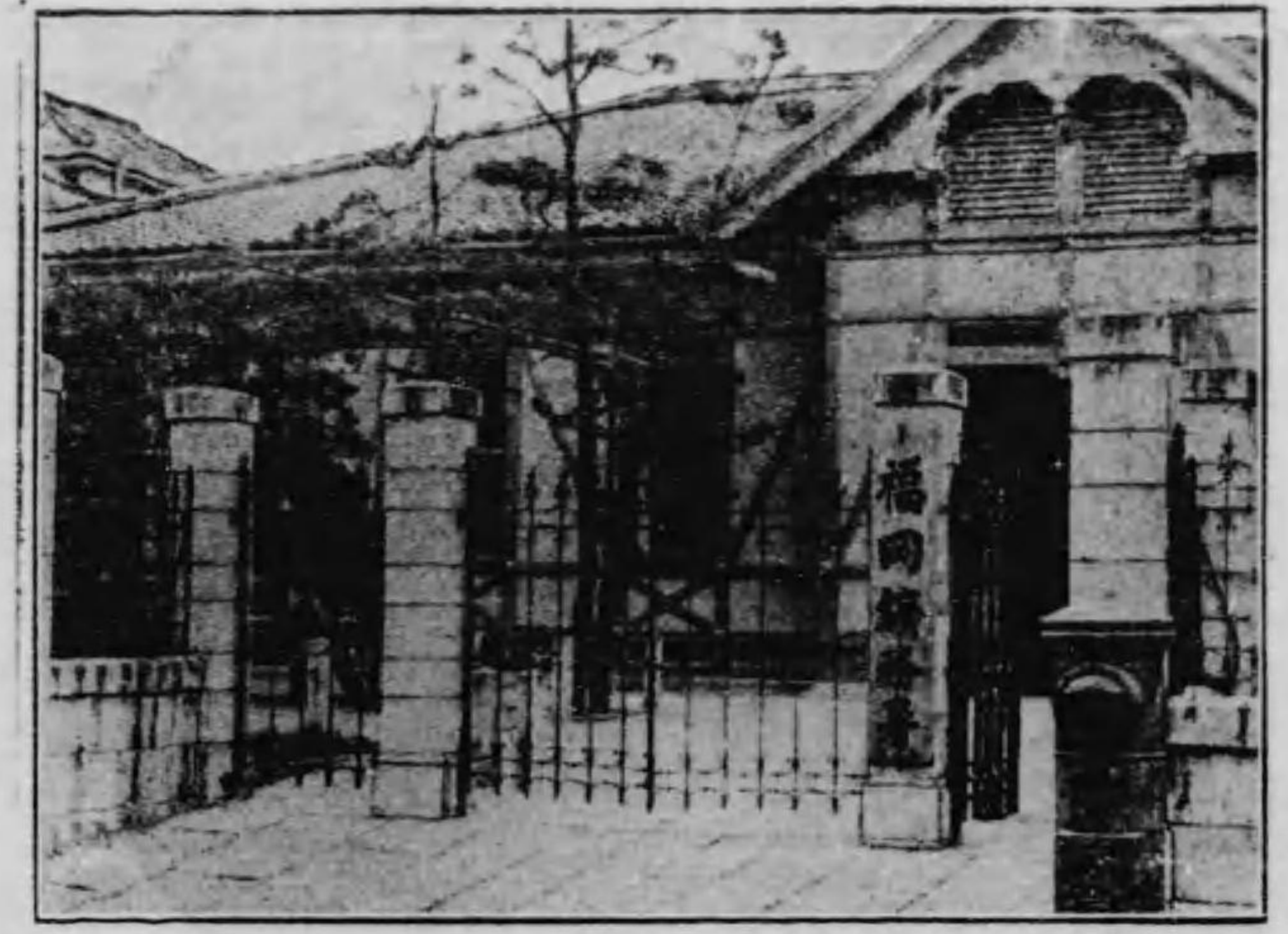
右に依れば市民の諸税負擔の總高は、合計金七拾五萬七千五百拾壹圓で、此の外大正四年度の登録税金六拾參圓、相續税金參千七百五拾六圓、通行税金參萬八千貳百貳拾八圓、狩獵税金六百六圓、賣藥税金六百六拾壹圓、計金四萬參千參百拾四圓と、同年度の間接國稅に屬する、取引所税金貳萬參千參百壹圓、取引所營業税金四千五百參拾八圓、酒造税金八萬六千貳百五拾參圓、酒精及酒精含有飲料税金參百拾八圓、醬油税金四萬四千四百四拾四圓、家用醬油税金七千四百九拾八圓、織物消費税金參萬四千六百七拾貳圓、石油消費税金九萬六千九百貳拾參圓、砂糖消費税金百六拾五圓、關稅金貳拾四萬壹千四百參拾五圓、合計金五拾參萬九千五百七拾四圓を加算すれば、市民の總負擔は、實に通計金壹百參拾四萬參百九拾九圓の巨額に上るのである。



此の負擔額を各一人別とすれば、尠なからぬ高に上るが、要するに時勢の進轉と、市の發展とは、市民の負擔を漸増するのが大勢であるから、此の點に於ては、今後一層の決心を必要とする次第である。

### 政治的機關

本市は一縣政治上の中心地點であるのみならず、又九州に於ける政治教育、並に經濟上の中心點である、偉大なる福岡縣を統轄する、福岡縣廳を始め、諸他の縣内行政機關は、孰れも本市に位置する外、明治二十五年には、九州及山口縣を統轄する、當時の鑛山監督署、現今の福岡鑛務署、同四十四年には、九州の全部を總轄せる福岡爲替貯金支局が置かれ、同一性質を帯びた中央度量衡檢定所、福岡支所も亦大正五年七月を以て、本市に開設された、長崎控訴院は、廳舎既に腐朽して、改築期に際するを機とし、司法省では、福岡に移轉の事に、意見一致を見たこと云ふ、斯くの如く、九州及西日本を統轄する諸行政官廳が、輻近續々とし、本市に設置を見るや、うになつたのは、云ふまでも無く、本市を圍繞する福岡縣が、其面積に於て、其富源に於て、天下の雄縣として、自ら定評ある



福岡縣廳



福岡爲替貯金支局

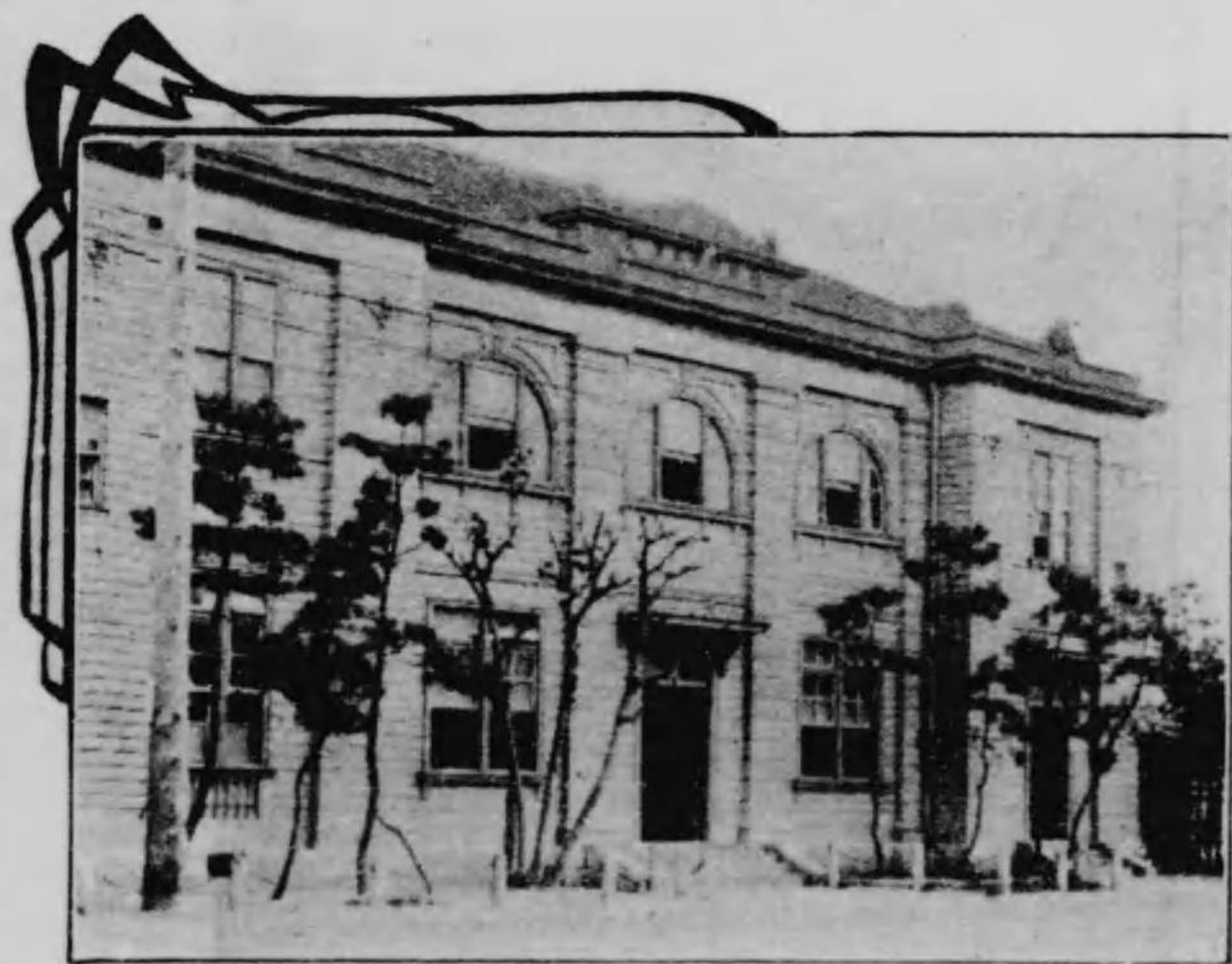
上に、又本市が西日本に於ける、地理的優勝の地位を占めて居るが故である。



△諸官公廳 今は現在福岡市内にある諸官衙しよくわんがの所在地しよざいちを示せば左の通りである。



所支國福所定檢衡量度央中



署務稅國福

市内諸官衙公署

福岡縣廳	福岡市役所	福岡警察署	福岡地方裁判所	福岡區裁判所	福岡監獄	步兵第三十五旅團司令部	步兵第二十四聯隊	福岡衛戍病院	福岡聯隊區司令部	福岡憲兵分隊	福岡爲替貯金支局	福岡郵便局
------	-------	-------	---------	--------	------	-------------	----------	--------	----------	--------	----------	-------

天神町	因幡町	大名町	須崎裏町	同	同	福岡舊城内	西新町	土手町	大名町	因幡町	同	大幡町	因幡町	橋口町
-----	-----	-----	------	---	---	-------	-----	-----	-----	-----	---	-----	-----	-----



福岡專賣支局  
 福岡專賣支局分室  
 福岡鑛務署  
 福岡小林区署  
 福岡稅務署  
 福岡測候所  
 博多稅關支署  
 博多驛  
 中央度量衡檢定所福岡支所  
 福岡縣度量衡檢定所  
 福岡縣農事試驗場  
 福岡縣水產試驗場  
 日本赤十字社福岡縣支部  
 同上福岡市委員部  
 愛國婦人會福岡縣支部

堅粕町  
 上小山町  
 土手町  
 因幡町  
 上小山町  
 住吉町  
 海岸通三丁目  
 馬場新町  
 因幡町  
 天神町  
 住吉町  
 天神町  
 須崎裏町(當分の中)春吉五番丁  
 市役所内  
 須崎裏町(當分の中)春吉五番丁

同上福岡市幹事部  
 福岡縣教育會  
 福岡教育支會  
 帝國在郷軍人會福岡支部  
 大日本武德會福岡支部  
 福岡縣物產陳列場  
 福岡市通俗博物館  
 福岡縣蠶病豫防事務所  
 福岡縣肥料檢查所  
 福岡縣產米檢查所  
 福岡郵便局電信電話技術官詰所  
 博多商業會議所  
 福岡縣公會堂  
 福岡市公會堂  
 福岡市船員事務取扱吏員派出所

市役所内  
 因幡町  
 天神町  
 須崎裏町司令部内  
 大名町  
 天神町  
 因幡町  
 天神町(縣廳内)  
 同上  
 同上  
 東中洲  
 同上  
 西中洲  
 因幡町  
 海岸通二丁目





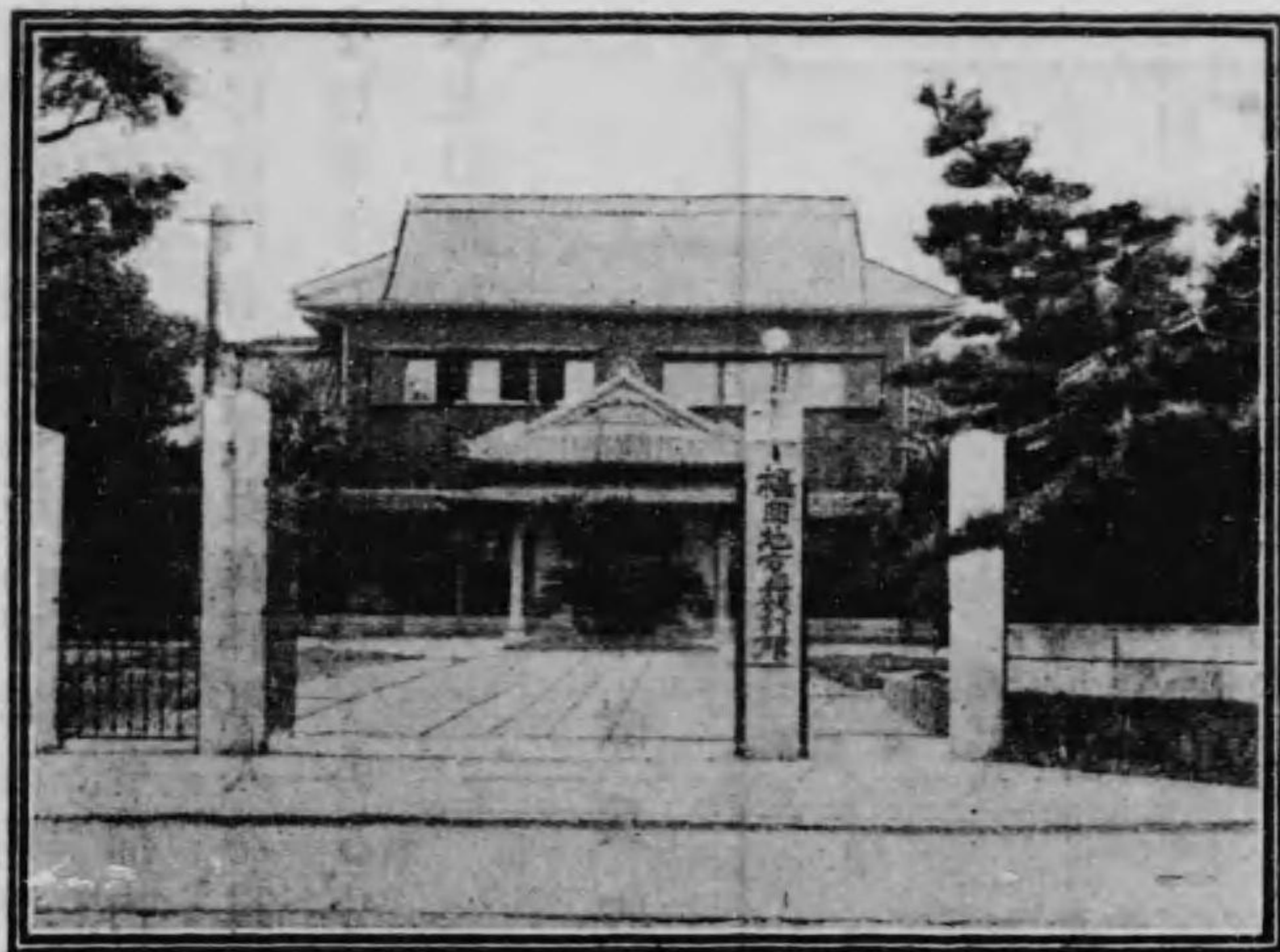


職名	氏名	上任年月	退職年月
縣知事	岩崎小二郎	明治二十六年五月	明治二十八年四月
	岩村高俊	同 二十八年四月	同 三十一年五月
	曾我部道夫	同 三十一年五月	同 三十二年四月
	深野一三	同 三十二年四月	同 三十五年十月
	河野一	同 三十五年十月	同 三十九年十二月
	寺原長輝	同 三十九年十二月	同 四十五年三月
	川路利恭	同 四十五年三月	同 大正二年六月
	南弘	大正二年六月	同 三年四月
	谷口留五郎	同 三年四月	現任

△裁判所 福岡地方裁判所は大名町に、福岡區裁判所は土手町にある。現在所長は能勢萬氏、検事は阿邊義彰氏で、所屬辯護士數は現在三十一名、辯護士會長は原田種一氏、亦公證人役場は市内に十一ヶ所を數へて居る。

△軍事 歩兵第三十五旅團司令部は福岡城内にあつて、日露戰役後の設置に係り、

歩兵第二十四聯隊、及歩兵第十四聯隊を統轄する歩兵第二十四聯隊は、福岡城内に駐



所 判 裁 方 地 岡 福



隊 聯 四 十 二 第 兵 步

營するもので、日清戰爭には旅順二龍山奪取、日露戰爭には第一軍を以て鴨綠江から



奉天戰迄幾十戰の勇名がある、現三十五旅團長は少將三原辰次氏である。此外福岡聯隊司令部は、須崎裏町にあつて、現在司令官は大佐磯谷郁造氏、帝國在郷軍人會は支部を聯隊區司令部内に設け、軍人家族慰安及軍事思想の獎勵を講じ、尙武會は市内有志者及在郷軍人を以て組織され、軍人の慰撫獎勵、家族救済及氣風の振興を目的として活動しつゝある、今参考の爲過去五ヶ年間の福岡市徴共成績表を示せば左の通りである。

### 福岡市徴兵成績

年 度	壯丁 總人員	檢査人員	合 格		現 役		不 合 格 者	未 檢 査 人 員		
			甲種第一乙種第二乙種	計	陸軍	海軍				
大正元年	七七四	五三八	一六一	九〇	七六	三二七	二七九	三	二一一	二三六
同 二 年	八七四	五五一	一五〇	七七	一三六	三六三	三三〇	一	一八八	三二三
同 三 年	八八七	五六	一五六	七五	一三九	三七〇	三三二	七	一九六	三二一
同 四 年	九四五	六二三	二〇〇	七五	一〇七	三八二	三三六	一〇	二四一	三二二
同 五 年	九二〇	五四五	二〇四	七四	一二三	四〇一			一四四	三七五

### △警察、消防

福岡警察署は因幡町にある、新築の美装せる白堊の建物で、現任署長警視廣田熊三郎氏以下所屬警部二名、警部補三名に、巡查百七十二名、警察醫三名、屠畜技手一名を以て、我福岡市民の生命財産の安全を確保しつゝある、現在巡查派出所は、十五ヶ所、詰所四ヶ所、駐在所五ヶ所、左の通りである、

#### 巡查派出所

博多橋口町、東中洲町、下吳服町、官内町、大濱町、石城町、祇園町、天神町、大名町、藥院上人橋、荒戸町、博多海岸通水上派出所、住吉町、千代町、大學前(以上派出所)博多停車場、吉塚停車場、新柳町、博多海岸通りトロール會社以上詰所、三宅村、八幡村、那珂、堅



福 岡 警 察 署

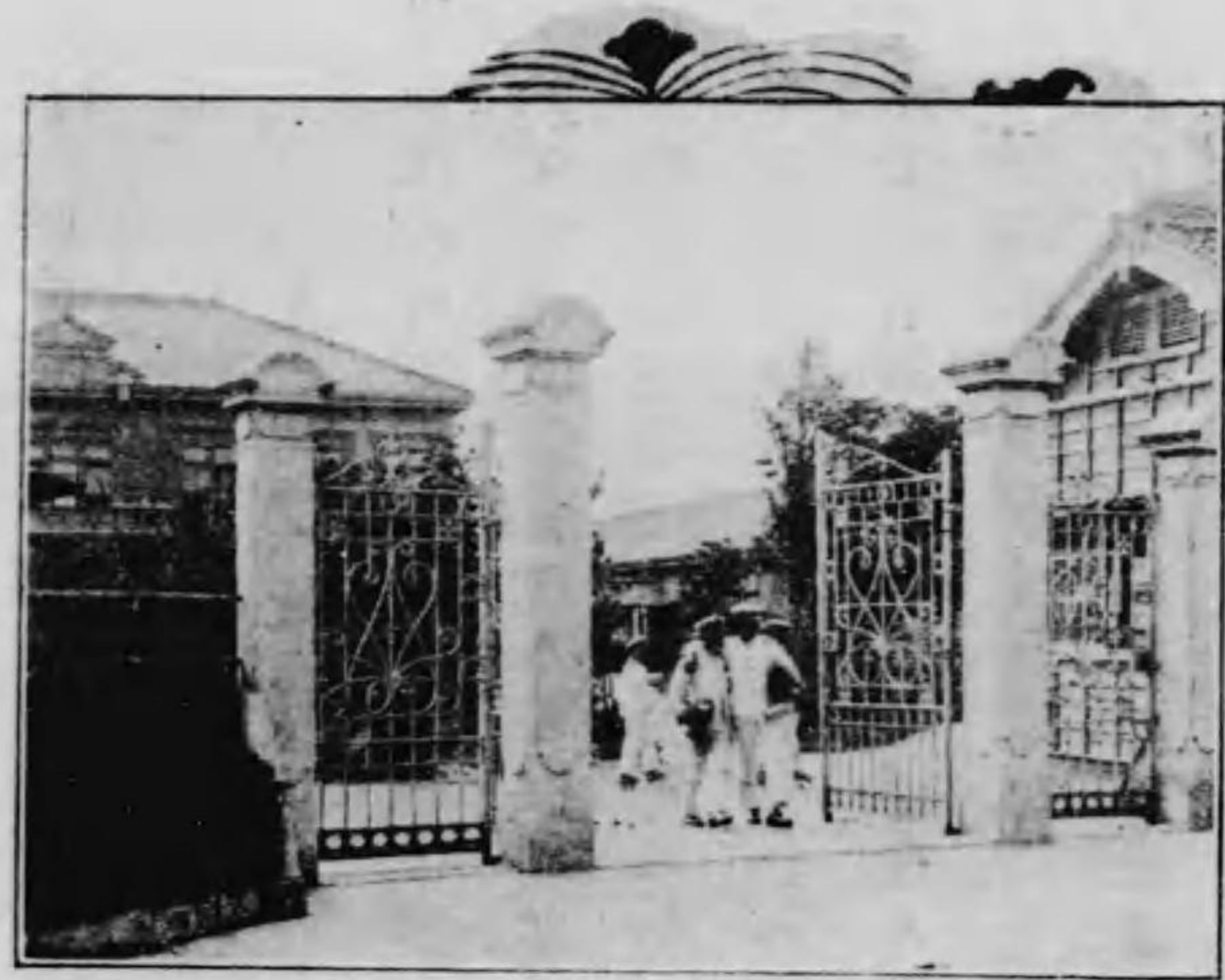
柏町、席田村(以上駐在所)



福岡は由來火災の非常に少ない處として有名である、遠い昔は分らぬが、明治以後の大火を稱せらるゝものでも類焼二三十戸以上に出でぬ、これは畢竟給水の便利、家屋の形式にも依ることは無論であるが、亦所謂博多ツ兒の敏活と勇氣とを證明するに足るのである、消防組は目下總人員四百六十七名を、東、西、南、北、及豊富の五組に分けられて、二臺の蒸汽ポンプが用意されてある、此外千代町、堅粕町、席田村、住吉町、烏飼村、西新町、箱崎町にも、夫れ々消防組の組織があつて、此人員も約五百餘名、警鐘一打の變に備へて居る。

### 教育的設備

福岡縣は教育機關の完備を以て全國に鳴つて居る、従つて我福岡市の特色の一は、教育的設備であらねばならぬ、而して其由來する所も亦甚だ遠く、古來我福岡市を中心とせる地方は、西海唯一の學問の府であつた、孝謙天皇の御代には、太宰府に學業院と云ふのを設けられた吉備公の經營になつたものである、太宰府の配所で不遇の裡に薨した菅公は、日本文學の祖神となつて、現代にまでも其の文名を垂れてゐるではな



福岡縣立中學修猷館

いか、黒田公筑前を治むるやうになつてからは、更らに育英の事業、勃興し來つて、天明寛政年間には、東學問所(修猷館)、西學問所(甘棠館)と云ふのが設けられ、之を東館、西館と稱せられた、東館は程朱の學を遵守し、西館は碩儒龜井南冥あつて、大に徂徠派の學説を講じたが、中途俗儒の排斥に依つて中止されたけれども、東學問所は長く續きて維新の後に及び、今の縣立中學修猷館の基となり、天明以來福岡藩下、幾多の人物を出した學校である、此の封建時代に於ける學者として著名なる人物は、先づ貝原益軒を上げねばならぬ、益軒の一門には、同元瑞、義質、好古、常春、門下には竹田定直、同定良、定矩なごがあり、南冥一門には照陽兄弟をはじめとし、門下には原古處、江上荅州、山口肱臥なごあり、詩人としては宗擘



を最さいし、采蘋さいひん、少琴しょうきんは閨秀けんしゅう詩人しじんの譽ほれ高く、宋學そうがくには月形つきがた鶴巢つるす父子ふし、井土いど周磐しゅうばん等らあり、國くに學がく及び歌人かじんには、加藤かとう一純いつじゆん、青柳あおやなぎ種信しゆんしん、大隈おほい言道やうだう、野村のむら望東ぼうとう、平野ひらの二郎にらう等らありて、多士たし濟き々の觀くわんがある。

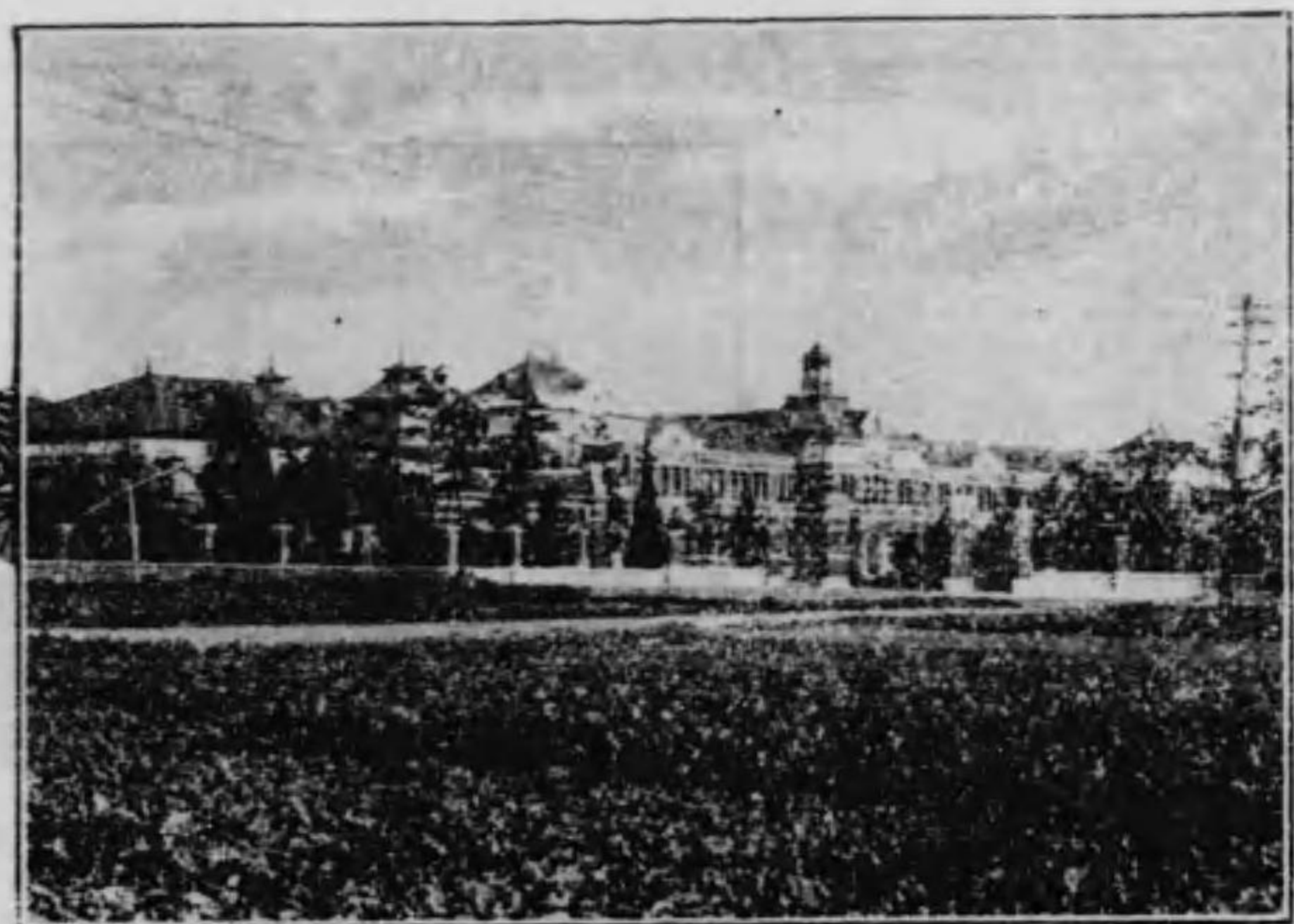
### A、學校教育

維新いしん後に於おても、各種かくしゆの學塾がくじゆは益々いさ盛さかんであつて、宮本みやもと竹墩たけかきの率ひらゆる春信義塾はるしんぎじゆ、及び藤雲館ふじうんくわん、原田はらだ塾じゆ、向陽きやうやう義塾ぎじゆ、荒津あらかづ學舎がくしゃ、正木ただき塾じゆ、高場たかば塾じゆ、並ならに宗むね、辛島しんじま等の塾じゆあり、其後そのち小學令せうがくれい施行しんぎさるゝに及およんで、本市このまちの教育事業けいよくじぎやうは愈々いさ進歩しんぷの域まに入り、師範しはん學校がく、中學校ちゆうがく、實業じつぎやう學校がく、女學校にょがく等の設たち立たつるゝもの、年々としとしに増加ぞうかし、設備せつび亦またた完成ました、明治めいし三十七年さんじちちしちねん京都帝國大學きやうとていこくたいていの分科ぶんかとして、福岡ふくおか醫科大學いこくたいていが始めて福岡ふくおかに置おかるゝ事こととなつたが、次つぎいで四十四年しじしちねん更さらに工科大



學大科醫學大國帝州九

學の完成を俟まちつて、分科大學ぶんかたいていは獨立どくりつして、九州帝國大學きゅうしゅうていこくたいていとなり、茲こゝに福岡市ふくおかは孝謙かうけん天



學大科工學大國帝州九



校學農岡福立縣岡福

皇時代きやうじだいの往時むかしミミウヤウ、九州唯一きゅうしゅうの最高學問さうがうがくもんの府ふたる資格しきかくを得たこゝミミなつたの



設立種別	名	稱	現在生徒數	所在地
縣立	福岡師範學校		三七五	荒戸町
同	女子師範學校		三九五	市外鳥飼村
同	縣立中學修猷館		九〇六	同西新町

九州帝國大學總長  
九州帝國大學醫科大學長  
九州帝國大學工科大學長

△中等學校

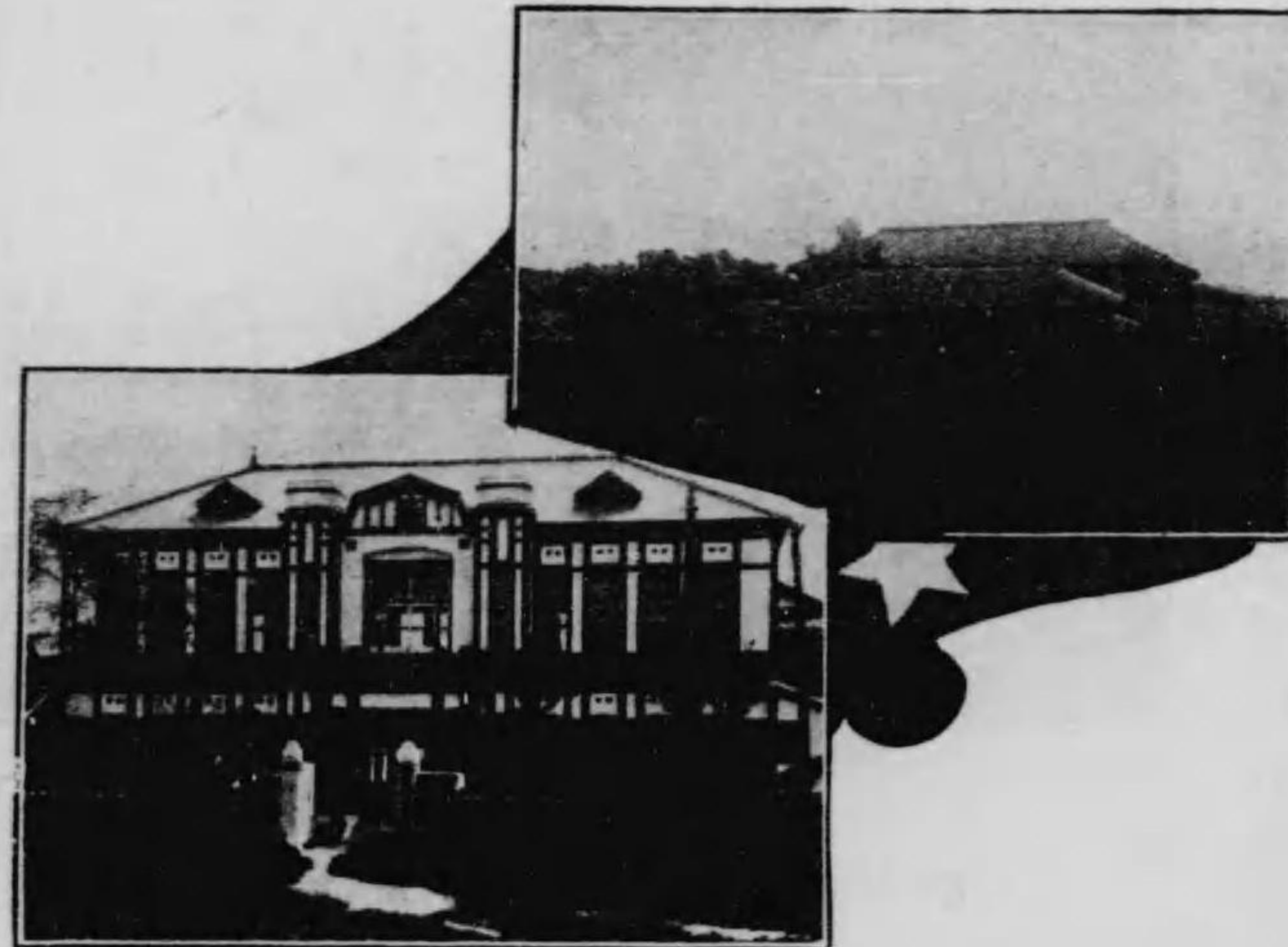
工學博士 眞野文二  
醫學博士 伊東祐彦  
工學博士 服部鹿次郎

設立種別	名	稱	現在學生數	所在地
官立	九州帝國大學醫科大學		四五七	千代町
同	九州帝國大學工科大學		二五七	箱崎町

△大學

現在の本市内、重なる各種學校並に本市立學校を舉ぐれば左の如し。

私立筑紫高等女子學校



私立九州高等女子學校



福岡市立福岡商業學校

である。



設立種別	名	稱	現在生徒數	所在地
縣立	福岡師範學校附屬小學校		一〇八二	荒戶町
市立	女子師範學校附屬小學校		二〇九五	市外鳥飼村
市立	福岡高等小學校		九四七	天神町
市立	當仁尋常小學校		四四四	東唐人町
市立	大名尋常小學校		三六三	大名町
市立	吳服尋常小學校		七三三	上吳服町
市立	奈良屋尋常小學校		五三九	奈良屋町
市立	御供所尋常小學校		五〇九	御供所町
市立	大濱尋常小學校		六二九	大濱町
市立	養子尋常小學校		三二六	養子町
市立	警固尋常小學校		四四二	警固町
市立	松原尋常小學校		四四四	豐富町
市立	箱崎尋常高等小學校		五八七	市外箱崎町
市立	住吉尋常高等小學校		六六一	同住吉町
市立	堅粕尋常高等小學校		八五八	同堅粕町

△小學校及幼稚園

設立種別	名	稱	現在生徒數	所在地
縣立	縣立福岡工業學校		四〇九	東湊町
市立	福岡縣立福岡農學校		二六二	市外那珂村
市立	福岡市立福岡商業學校		四四八	同千代町
市立	福岡市實業補習學校		七二九	天神町

△實業學校

設立種別	名	稱	現在生徒數	所在地
縣立	縣立福岡高等女學校		四一三	因幡町
私立	私立筑紫高等女學校		三九五	下警固町
私立	私立九州高等女學校		二五〇	荒戶町
私立	私立福岡實科高等女學校		一二〇	今泉







女子八千五百七十五人(じん)を算し其就學率は、百中九十九、二六を示し、成績甚だ良好である。

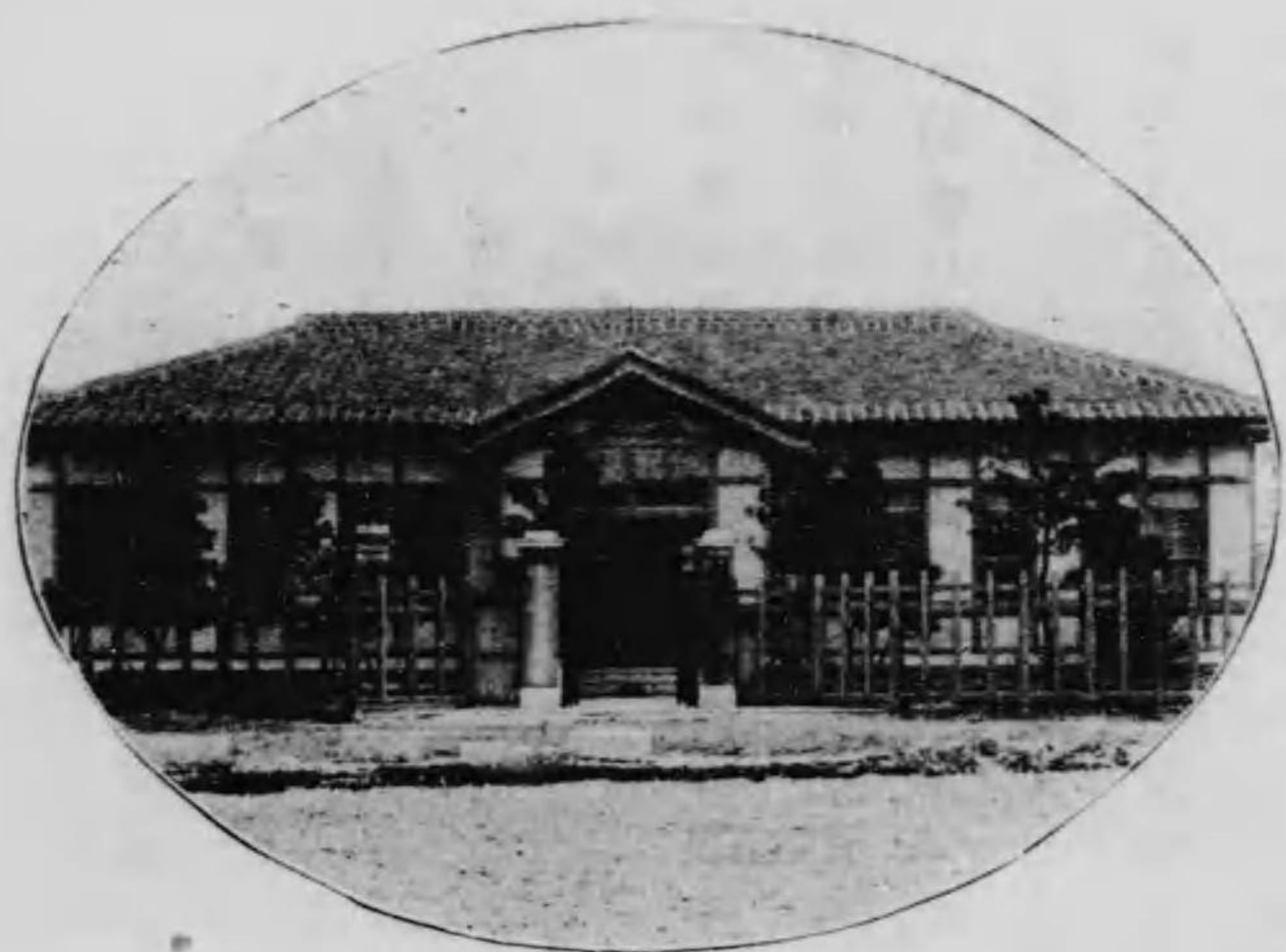
### B、社會教育

我市に於ける學校教育の盛況は、大略以上の如くであるが、次には本市の社會教育の狀況に付て、一言する事とする。先社會教育の最大機關たる圖書館から見れば、

△福岡縣立圖書館 御大典紀念事業として、大正四年中創設費拾貳萬圓を以て福岡縣に依て設立に着手され、目下縣廳内で其事務を執り、館長は伊東尾四郎氏で、既に一萬餘の圖書を蒐集し、巡回文庫の制を實施しつつある。建設地は市内渡邊通りに好個の地を卜し、大正六年建築物其他全部完成される豫定である。

△私立福岡圖書館 荒戸町にある廣瀬玄銀氏の經營になり、明治三十五年の創立で、現在藏書數和漢洋約五萬冊を數へて居る。

△福岡市共用文庫 大正二年以降、市立圖書館設立準備の爲め、福岡市に於て圖書の蒐集に着手せるもので、大名町の大名尋常小學校及び吳服町の吳服尋常小學校に備付ある文庫である。藏書數和漢書約六百冊、市立各學校教員、及市關係者其他に公



福岡縣教育會事務所

開して居る。

### △教育的團體及講演會 福岡縣教育會

事務所は因幡町裏にある。現在會長は武谷水城氏で、時々縣内教育問題に付、研究調査を怠らず、毎月一回教育會報を刊行しつつある。福岡市教育支會は、福岡市長を會長に、市助役を副會長とし、事務所を天神町福岡高等小學校内に置き、市内一般教育の改善方法其他に付き、研究調査をなしつつある。現在會員數は教育家有志家等二百五十餘名を算し、調査委員會として、實業教育調査委員會、市教育改良方法調査委員會等が設けられてある。教育的講演會の數多き中に、毎年比較的規則正しく開催される、重なるものを上げれば、

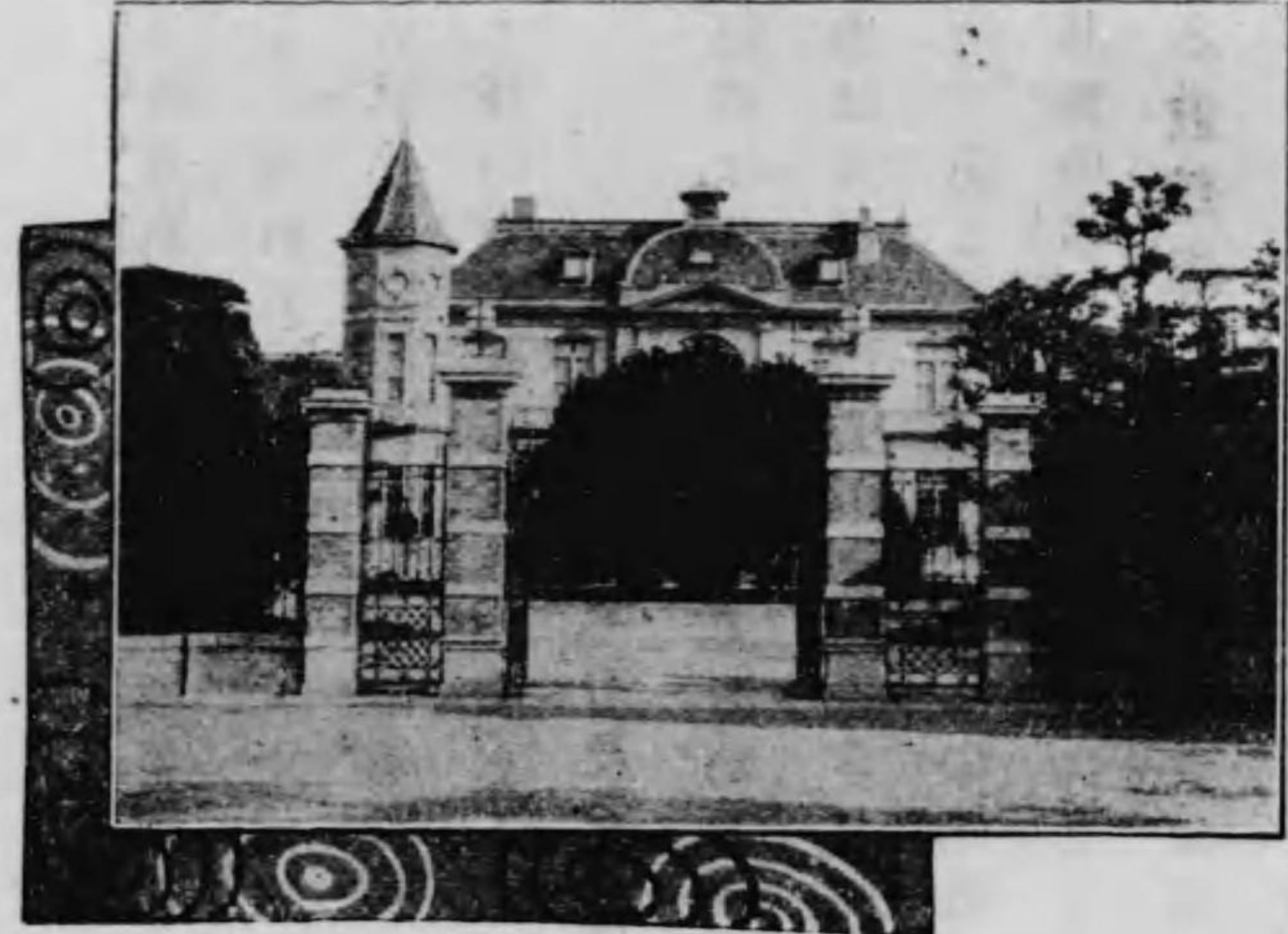


- 一、醫科大學進俗講演會 毎年約二回開會
- 一、工科大學通俗講演會 同上
- 一、福岡日々新聞社講演會 毎年八月五日間乃至七日間開會
- 一、教育支會講演會 毎年二回乃至三回
- 一、報徳會講演會 毎年一回乃至二回
- 一、實業講演會 市役所主催毎年一回乃至二回
- 一、衛生講話會 同上

此外商業會議所、福岡博經濟會、博涉會、福岡三田會、早稻田大學校友會等の主催にて、時々學術及實業講演會の催しがある。

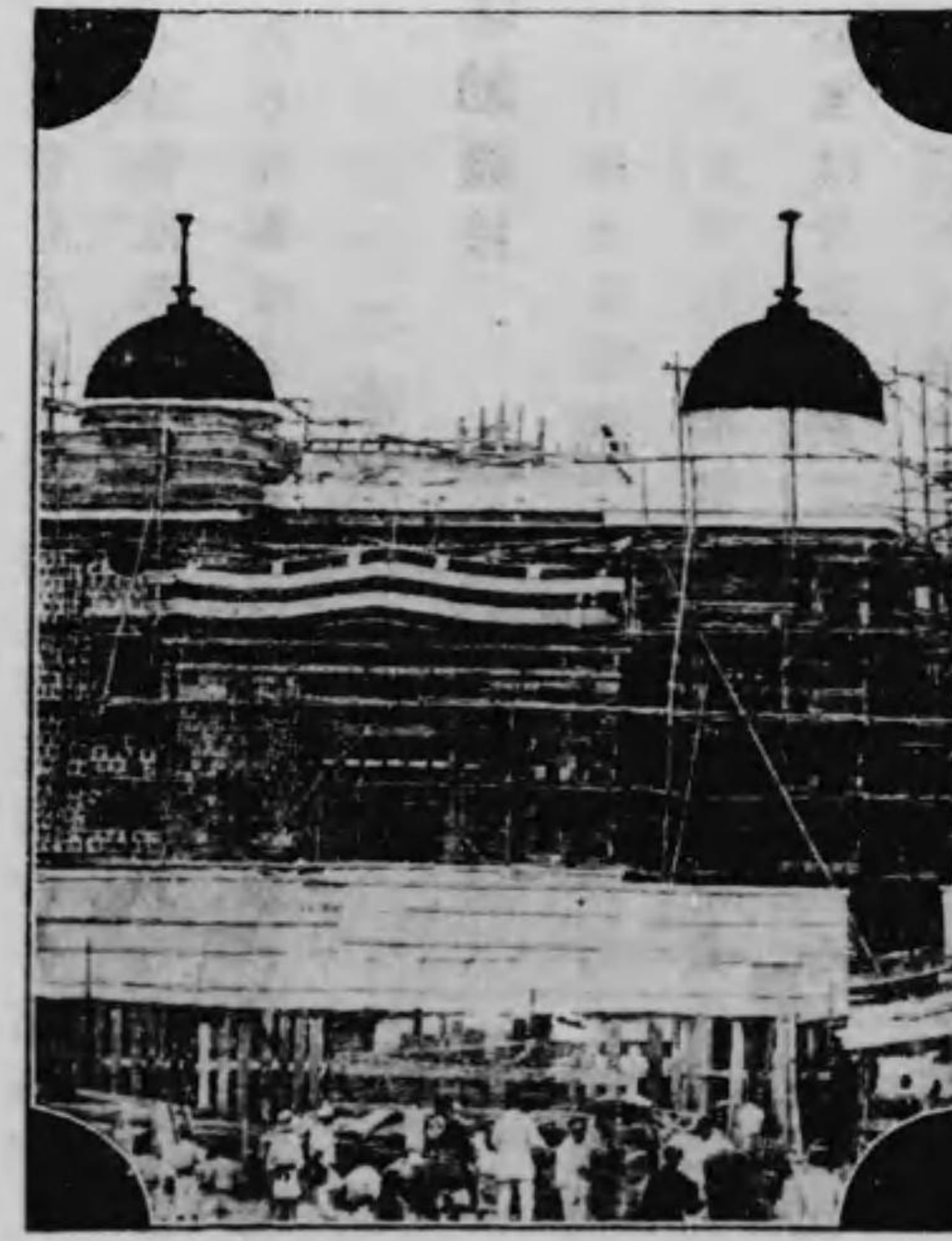
△公會堂 福岡縣公會堂は、市の中心西中洲に廣大なる地區を劃して建てられた、白堊の一大洋館で、建坪二百二十餘坪、明治四十三年の新築に係る本館には樓上に貴賓休憩室、及寢室、其の他の設備あり、階下は遊戯室、休憩室、事務室、談話室等を配置し、別に大食堂兼用の講堂がある、可成公開の制を採つて居る、福岡市立公會堂は、因幡町にある、通俗博物館と共に、市の御大典紀念事業として、大正五年十月の新築に係るルネ

ツサン式洋館で、會堂總建坪數百五十六坪、千五百餘人を收容するに足るのである。



福岡縣公會堂

△博物館、水族館及動物園 博物館としては、唯一の市立通俗博物館がある、市公會堂と共に



福岡市通俗博物館附屬講堂

新築に係り、總坪數八十七坪のゴシック式洋館で、福岡市に關する歴史的參考品、其他に御大典紀念事業の一として、大正五年十月の